2005

大正十三年一月二十九日（第三種郵便物認可）
昭和五年十一月一日發行（毎月一回一日發行）

京城雜筆

秦鴻臺 氏寫

永樂町人 編輯

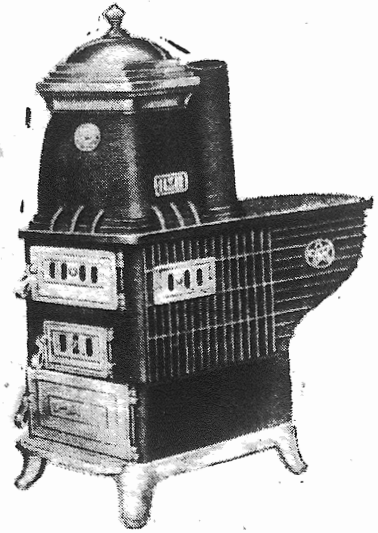
十一月號

（第百四十一號）

富國ストーブ

特長

燃料の經濟○投炭日二回○掃除多一同○溫度理想的○取扱最簡便



形態高雅上品にして極めて經濟的、燃料は粉炭でも何んでも完全に燃燒します

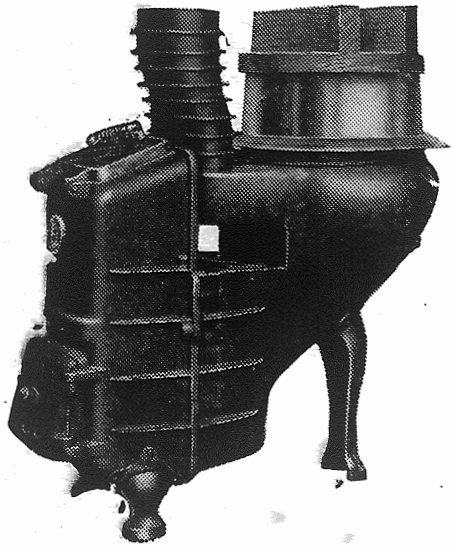
價格

特價十七圓より種々あり

炊事兼用（〇二號）參拾貳圓也

▲三井物産京城支店▼

最六ストーブ



實用向ストーブとして「最六ストーブ」は最完全最經濟且つ最堅牢であります

價格

特價十四圓より種々あり

特約店

京城府西界洞

六三商會

電話龍山二〇三

わしが國さで
見せたいものは
むかしや谷風
今三巴自慢

國産愛用の聲は鮮産愛用であり鮮産愛用は京城に居るものは京城産を愛せよと云ふ事であります。人の嬶を愛するより家の嬶を愛すれば家内安全です。京城人士は須らく京城産の三巴自慢を愛すれば家庭圓滿なり。

米安く嬶の豫算剩餘あり
主の晩酌心やすけれ

全鮮酒類品評會

優等賞に名譽賞盃を授與せられたる銘酒三巴自慢は

京城蓬萊町四丁目

三巴酒造合資會社

電話本一〇六七番

京畿道第一位

醸造石數貳千貳百石

酒造協會主催第一回全鮮酒類品評會審査ノ結果又々優等入賞ノ光榮ニ浴シ申候。之レ弊社技術員ノ優秀ナルニ依ルト雖モ畢竟鮮鶴愛飲家各位ガ常ニ直接間接ナル御聲援アル賜ト感銘罷在候。尚審査員各位ガ嚴正ナル審査ニ當ラレタル事ヲ感謝スルト共ニ弊店今回ノ入賞ヲ空シクセザラン事ヲ誓ヒ將來一層優良酒醸造ニ意ヲ用ヒ可申候間倍舊ノ御引立アラン事ヲ祈上候

昭和五年十月　日

仁川府上仁川驛横

株式會社 **增田屋酒造部**

（電九二四番）

本店　仁川宮町

支店　京城長谷川町

世界に誇る
福祿ストーブ

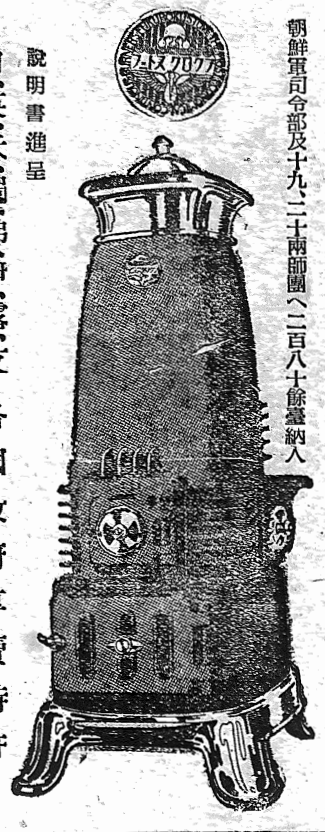
國產ストーブにして世界各國政府の專賣特許を有するもの果して他にありや

福祿ストーブは正に此の榮譽を有する唯一！眞に唯一の代表的國產ストーブなり

されば內地は宮內省始め各省の御用品となり朝鮮に於ては軍隊始め、各官衙、會社、銀行、舍宅等擧つて本ストーブを採用せらる、ストーブ界の明星として全國人氣の焦點となる誠に故ありと謂ふべし

外形のみ福祿に酷似せるも內容是れに副はずして故障百出のもの尠からず誤つて求めらるゝ事勿れ福祿は只一つなり

朝鮮軍司令部及十九、二十兩師團へ二百八十餘臺納入



說明書進呈

日、英、米、獨、佛、伊、露、支　各國政府專賣特許

宮內省、陸海軍、鐵道、商工、文部、遞信、大藏　各省御用品

福祿ストーブ發賣元

トバタ發動機
トバタポンプ　總代理店

合名會社 **松田清商店機械部**

京城府南大門通二丁目
電話本局二四一〇・二九二六・二二三二

各地に特約店あり最寄にて御用命を乞ふ

優等賞受領

朝鮮酒造協會主催

於全鮮酒類品評會

於全鮮酒類品評會

連續二回最高賞入選す

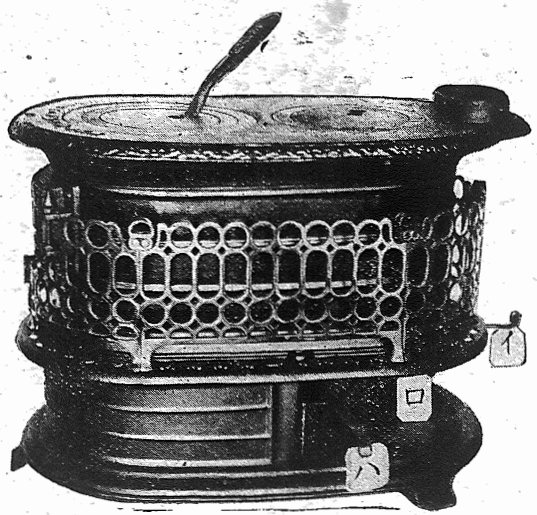
仁川龍岡町

深見釀造場

富永式特許暖爐

起業大正十二年、既に公衆の試練を經たり。

家庭用として比類なき特長を有す



京城府本町二丁目

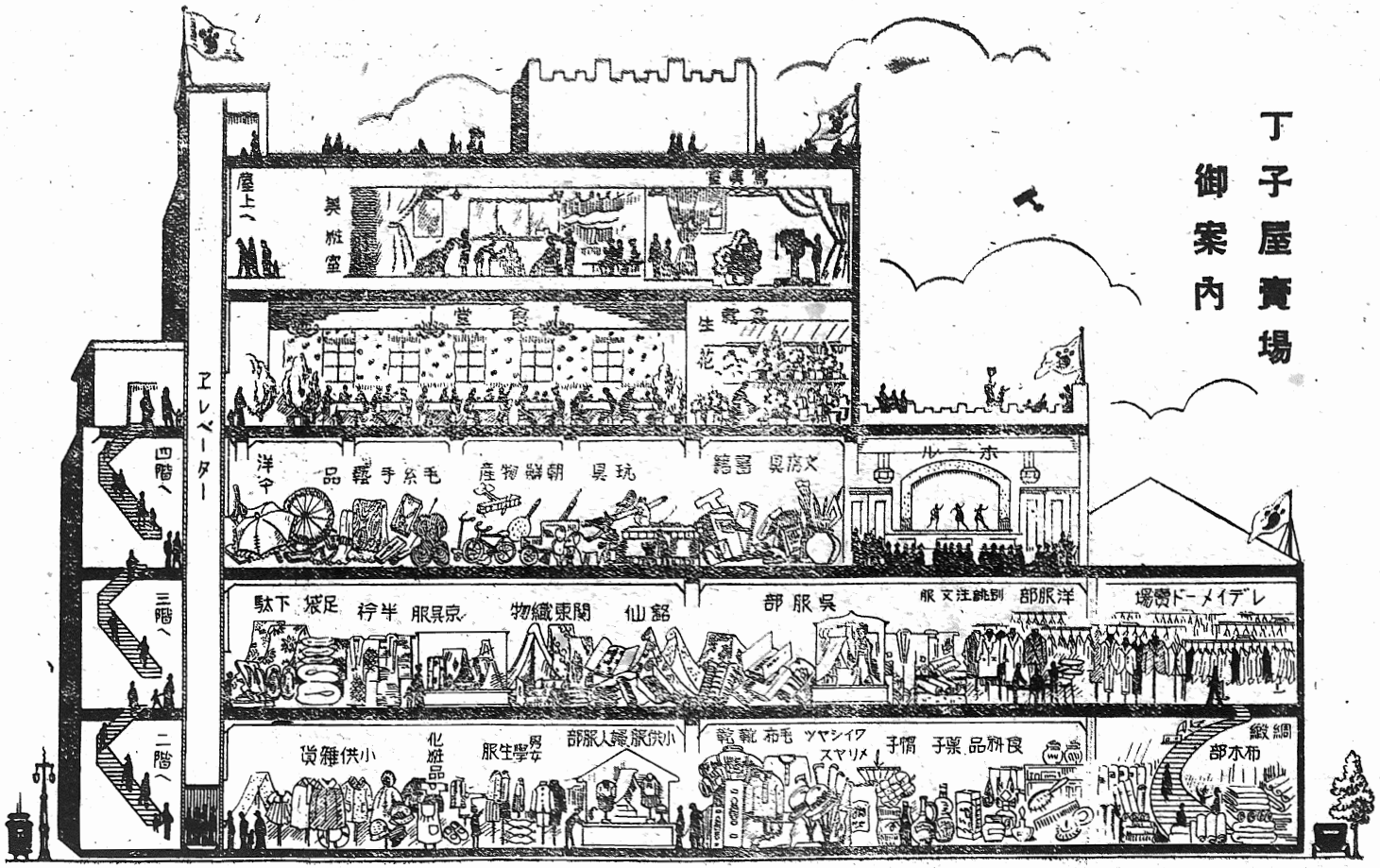
發賣所 青々園茶舗

電話本局一一一一番

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には
鮮内産品使用御奬勵の
御思召を以て
三和高麗燒
漢陽高麗編
三和燒
製造元
富田商會へ
御下命願上げます
京城南大門通三丁目
電本三三〇九
同本町二丁目
電本五五四

金剛飴
金剛ようかん
金剛饅頭
亀屋喫茶部
金剛山
電話本局
四二四五
京城本町二丁目
亀屋
電話本局二七 四七五

丁子屋賣場御案内


屋上へ
美粧室
食堂
生花
エレベーター
四階へ
洋傘
毛糸手藝品
産物
朝鮮
玩具
文房具
書籍
ホール
三階へ
駄下
足袋
袴
半
京呉服
物
織
東
関
仙
部服呉
洋服部
服注文
到
デレイメード賣場
二階へ
雑貨
小供
化粧品
男女學生服
小供服
婦人服
部
帽子
予
寒
品
科
良
ツヤシイワ
スヤリメ
毛布
靴
鞄
綿
絹
部木布

ストーブ

弊店は石炭給供者の立場から實驗研究の結果左の三種を最優良品として各位にお勸め申上ます

キヨーワ・ストーブ 十五圓より三十圓まで
センター・ストーブ 十八圓五十錢より八十五圓まで
アルバン・ストーブ 三十六圓より五十二圓まで

生氣嶺炭

鮮内での燃料は鮮内炭を使用しませふ。
生氣嶺炭は鮮内第一の優良炭で昨年大博覽會に於て總督府燃料研究所から石炭館で發表せられた鮮内著名石炭の分析表に依て其優秀なる事を證明されてゐます。

價格
一噸 拾五圓
半噸 七圓五拾錢
一叺 壹圓貳拾錢

多量御利用ノ向ハ特に御相談仕り候 (市内配達は無料)

京城明治町一ノ五四
櫻井秀專商店
電話 本局三〇〇二番 本局四〇〇二番

宮内省御用達

菊正宗

京城本町二丁目
株式會社 前田商店

釜山本町三丁目
本嘉納釜山支店

十一月號目次

スポーツ……（城大醫學部）今村豐氏（二）
野球往來……（殖産銀行）丸中德三氏（三）
事實……（旭町瀨戸病院）瀨戸潔氏（四）
見たり聞いたり……（高等法院）伊藤憲郎氏（五）
二人の對話……（京城醫專）飯島滋次郎氏（七）
秋の金剛美……（鍾路六丁目）崔南善氏（八）
松茸のにほひ……（城大法文學部）麻生磯次氏（九）
私信……（木浦東拓社宅）川上喜久子氏（一〇）
馴れると云ふ事……（永樂町本田病院）本田建義氏（一一）
提督李如松……（總督府編輯課）加藤灌覺氏（一二）
倉田氏の臨終……（京城中學校）關本幸太郎氏（一三）
なり聲……（第一高女）大場勇之助氏（一五）
言葉の國産愛用……（京城日報社）鮫島宗也氏（一七）
ナポレオン……（總督府商工課）土師盛貞氏（一八）
彌生會句集……（總督府學務局）彌生會同人（一九）
バンドーラ……（京城師範學校）高橋濱吉氏（二一）
頭と足……（京城日日新聞社）市村秀志氏（二二）
船……（朝鮮郵船會社）山口三郎氏（二三）
ナンセンス電車……（殖産銀行）金谷要作氏（二四）
智異山脈の縱走……（每日申報社）朴錫胤氏（二五）
品川雜記……（中央朝鮮協會）中島司氏（二七）
初秋（短歌）……（野田醬油出張所）市山盛雄氏（二八）
朱乙から……（朝鮮新聞社）野崎眞三氏（二九）
いつの間に……（京城醫專）眞能義彥氏（三〇）
車中問答……（京城日日新聞社）別府八百吉氏（三一）
隨筆七題……（竹添町）木塚常三氏（三七）
白川溫泉……（城大法文學部）小田省吾氏（三八）
公冶長……（東四軒町）蒲原久四郎氏（三九）
開城の傳說……（朝鮮史編輯會）中村榮孝氏（四〇）
椿の島……（鈴木運送店）奥永政輝氏（四一）
山を見る……（京城齒科醫專）森哲郎氏（四三）
高麗史の珍記事……（南米倉町）今村鞆氏（四四）
無題……（京城齒科醫專）西山幸雄氏（四六）
心よき追想……（李王職）池部義雄氏（四七）
二昔……（京城日報社）久松前平氏（四八）
將棋名人論……（東京）石山賢吉氏（四九）
尊德翁から……（煙草元賣捌會社）井上清氏（五一）
近代人の匂ひ……（府廳學務課）後藤長治氏（五三）
洋上閑話……（遞信局海事課）古賀國太郎氏（五四）
秋日の椽（短歌）……（南米倉町）松崎嘉雄氏（五五）
十月一日……（載寧三菱鐵山）角田不案氏（五六）
身邊寸話……（大邱日報社）高橋昇氏（五七）
やまと歌……河谷靜夫氏（五八）
腰折紀行……（三巴酒造合名）國風會同人（五九）
ひとり言……浦田多喜人氏（六〇）
永樂町人（六一）

スポーツ

今村豊
（城大醫學部）

數年前ベルリンでスポーツと名のつく新聞雜誌を數へて見たら百近くもあつたが、その大部分は競馬に關するものだつた。一體外國で云ふスポーツは漠然として範圍が廣い。運動と云はるゝものゝすべて、遊戯、陸上水上競技、武藝漁獵、近代では自動車、飛行器、室内で腹の減りそうもない撞球から、さては純興業的の競馬、人間が一向手與しないグレーハウンド犬の競走までも含ましてゐる。何事にも賭けをやり勝負第一で見物する人々より見れば人間が走ろうが、犬が走ろうが、野球であろうが、闘牛であろうが、同一なんだろう。但しスポーツメン、スポーツウヰメンと云ふ時のスポーツは勿論體育に無關係のものや興業物を含まず。そのメン及びウヰメンは見物人でなく自身行る人であり職業選手は除外する。私はこの狭い意味でのスポーツのツモリで話しをつづける。それでも中々範圍が廣い。團体的のものあり、個人的のものあり、全然勝負のない登山狩獵の如きがある。

スポーツを自身でやる人の心持は別として、傍から見る方の興味を主とするならスポーツの中で勝負のある競技が一番面白い。しかも競技の過程に變化のあるを要する。この點同じ團体競技でもボートより野球に一般の興味は集る。ボートは全員が同一時に同一運動を一絲亂れず繰返すので過程に變化が乏しい。勿論クロートに云はせれば漕法、舵手、リーダーのかけ引き等中々興味があるが、野球はチーム全體が一絲亂れぬ事は同樣だが同一時に同一行動を全員とる事はない。各々分業になつてゐるので個性が生き、變化がありヒーローが生れ興味が複雜になる。側から見る方の興味。これは度を過ぎると興業化し職業化する危險があるが。スポーツの發達になくてならぬものである。見て面白いから自然見物が多くなり、見物する中自分もやつて見ようかと思ひ自身出來なくとも子供にやらさうかと思ふ樣になり、次第に一般の理解と援助が出來て盛んになる。一つのスポートを理解すれば容易に他のスポーツにも理解と同情が及ぶ。興行的墮落の危險のないものは見物本位でない、自ら樂む登山、狩獵、ヨット等であるが、これは少數の土地に惠まれたもの及び時間金錢に多少の餘裕ある人に限られ一般大衆のものとなる事は難かしい。

多少興業化の弊害を伴ふともスポーツを一般に徹底せしめる方便としては傍から見る人の興味と云ふものは無視出來ない。スポーツの功利的意義は既に多くの人から云ひ盡されたから茲に述べない。

次にスポーツを自身やる人の心持を述べたい。滋養物でも不味いものは一般が食はぬと同樣、興味の少いものは發達しない。体操や自彊術は興味に乏しく他のスポーツ程ドウシテも發達しない。

【二】

始めは興味でやるスポーツも少し深く入れば興味などと云ふ生やさしいものでない、苦痛の方が多い。しかしこの苦痛は魅力がある。全部を忘れた身心の緊張、及び肉體的疲勞。疲勞を休める時の心持ち等はスポーツやる人のみの知る境地である。登山ウヰンタースポーツの如く多少危險を伴ふものはそれが危險な程冒險心征服慾を滿足させる事が大きく、年々犧牲者も出るが決して衰へない。競技の興味、かけ引き、闘爭心、征服心滿足以外に全然勝負に無關係な官能的な魅力がある。これも經驗のない人は分らぬが、例へばダイビングで空中に浮いた瞬間の感じ、乘馬の反動、ボートのオールの飴をかきまわす樣な抵抗等々、中々忘れられない。

こうなれば趣味でなくて病膏肓に入つたものである。

何時か宴會の席上前々總長服部先生にスポーツはギリシアに發せず支那が元祖だときかされた。この說支持するもの世界に二人、先生以外イギリスにドウグラスと云ふ學者が居るとの事。その折肝心のスポーツの定義を聞かなかつたから先生の所謂スポーツはどこまで指すか不明であるが、お話しより察するに甚だ精神的な武藝に近いものであつた樣に記憶する。歴史的穿サクはその道の人に委せるとして、スポート愛好者は見物丈で滿足せず、すゝんで自身試む可きである。所謂ファンはスポーツの門まで來てゐるが未だ未だ堂には遠いものである。

野球往來

うにと私には惜まれてなりません

毀譽褒貶を外にして默々として淋しく去つた市岡君のために遙かに敬意を表します。

ト より野球に一般の興味は集る。ボートは全員が同一時に同一運動

次にスポーツを自身やる人の心持を述べたい。滋養物でも不味いッの門まで來てゐるが未だ未だ堂には遠いものである。

京城雜筆

野球往來

丸中德三（殖産銀行）

秋の短い陽脚が戸塚球場に物凄い暈影を投げかけて目白台邊の人家の電燈がポツポツと練習見物の三味境にあるファンの目に映る。

默々とした市岡監督——市ちあん——の力强い巧智を極めたノックが始まる。

春の早慶戰にストレートに敗れた、明治にもしてやられた。

けれどもこの秋には投手の小川さえ全快してくれたら。

いや山田、多勢さへ善投してくれたら。

伊丹、水原、水口の打擊のトリオを失つた當時の春のバックよりワンシーズンを經たこの秋はバックも大分確つかりしてきた。戰ふのだ、戰ふのだ、默々として戰ふのだ。

滿身の鬪志が彼——市ちあんの血を熱くしてゆく。

市ちあんのバットには言ひ知れぬ力が籠つてゆく。

スタンドのファンが、おゝ我等の市岡!!と叫んだ。

……

處が時も時、秋の野球戰期に先立つて市岡監督辭任の報が新聞紙上を賑はした。私は限りなき愛惜を彼に感じる。

何故彼はさうしたか。

何が彼をさうさしたか。

ファンは好奇の眼を瞠いた。

……

春の早慶戰に敗けたから辭めさせられたのだ。

いや從來よりベンチとして不適任だつたから。曰く、曰く

べら棒な話だ、一体春の早慶戰で何處を押したら慶應に勝てる算盤が出たのか。

勝敗を左右する投手力と言ひ、バックの守備と言ひ、

優れた處があつただらうか。

大まかに批評し早大ファンに一縷の望みをかけさせたのは、技術的には打擊が慶應に相匹敵してゐたことのみではなかつたか。

スピリット——勿論これは勝敗に重大な影響を有つ場合もあるに相違ない、併し三田にも腰本監督一流の精神が漲つてゐる。

——の發露を空頼みにしてゐたのではないか。

……

この劣勢を率ひてストレートの敗ぼくを喫しなかつたら市岡監督は神樣だと言はれたかも知れない私をして言はしむればよくあれ迄に運んだものだと思ふ。私ばかりでなく心あるファンは斯く思つたに違ひない。

……

市岡君が飛田穗氏の後を繼いで早稻田の監督になつたのが大正十五年の春のシーズンからですから今年で五年、丁度來年で選手が一巡して、本當に自分の子飼の選手達のみになつて內部に一寸の氣兼もなく思ふ存分手腕を揮ひ得たらうにと私には惜まれてなりません

毀譽褒貶を外にして默々として淋しく去つた市岡君のために遙かに敬意を表します。

……

ベースボールの入場料に課稅せんとする問題が再び勃發してきた。

營利を絶對に目的としないスポウツに課稅するといふ議論は我々スポウツに關係してゐるものよりみれば偏見も甚だしい。

形式に於て營利を目的とする他の興行物に似てゐるが故にとの論は餘りに近視的であり理論の根據の認識に餘りに誤謬があり過ぎると私は思ひます。

さあれ我等スポウツに關與するものとして、主催者、統率者、選手、將又觀覽者にも本當のスポウツマンスピリットの体得並に表現を衷心より切望して止みません。

（五、一〇、一〇夜）

◈筆のしづく

三木一彦

○事務官でも、司法官でも、役人を罷めたら、サツサと內地へ歸つて行く。

○朝鮮なぞに用があるかイといはんばかりに。

○銀行會社の大頭もさうだ。忽ち渡り鳥の本性を現はす。

○その中で、警察系統の人だけ不思議にグツと踏み應えてゐる。國友氏、森（六治）氏、加藤（好晴）氏、小熊（九萬造）氏……今村（鞆）氏などもそれに加へてよからう。

○どういふ理由?、それだけふだんの生活が、民間の生活に溶け合つてゐるとでもいふのか。

〔三〕

事實

瀬戸潔
（瀬戸病院）

一

今年の初夏の候農繁期小學校なども田植休みをしてる時、所は山間の部落谷間谷間に二軒三軒と飛び〳〵に小屋がある、其前には野菜畑生絲輸出國の日本の事だ、やはりそんな處でも此畑の間に桑樹が植えてある。其樹の繁茂した丙に忙しそうに桑葉を採つてる男がある、處が其小屋から留守番らしい老婆が出て來て、『お前おれんとこの桑葉を採つてはこまるじやないか』、樹上の男シヤア〳〵として曰く、『婆サン婆サン、お前サンまだ知らんのか去年からお上の御布令で蠶が上簇しかけて桑の不足した時は何處の桑を採つてもよいことになつたのだよ』、婆サン恐縮して『そうかな〳〵』、之は僕の郷里に近い山里に最近あつた話。

二

京城北門内外には當地名物カツバヲイ即ち小盗兒がないそうだ。此間もあの門外恩平面の一部で一寸悪心を起して何かを盗んだ一少年があつたそうだ處が一般に次の樣な噂が次から次と言ひ傳へられた。悪い事をしたものが直ぐ解る藥があるそうだ。警察官が來て今度皆に此藥を飲ませるとの事だ。悪い事をした者は此藥を飲むと体が萎縮してしまうそうだ。小盗兒君心配して自宅を逃げ出したが近くの林でくびれて死んで居たそうだ。京城の直傍にもこんな處があるんだ。

三

今度の國勢調査は始めてゞもなし大した事もなく行くかと思ふてると中々そうは行かぬらしい、僕の病院の附添婦には自己の生年月日を知らず生れた『えと』しか知らぬものがあつた。之は日本帝國に明治の半頃生れた女だ。

も一ッ僕の宅に居るオモニと其子供だ。親は五十近い。子供は十一才だ。共に自己の生年月日を知らない。何かないかと聞くともと世話して貰ふた人が民籍を持つてる筈だと云ふので取り寄せて見ると民籍謄本と抄本とがあつた。處が親の方は謄本と抄本で生年月日が一年違ふし月も日も異なるのだ、一方子供の名は音は同一だが字を訂正してあるのでどれが正しいか解らない字の解らない親が口頭で云ふたのを書いて又直したらしいのである。

四

京城府廳に二十年近くも居た（今は居らぬ樣だ）カイゼルと云ふ小使君が居た。二十幾才かと思はれる別嬪をつれて來て、之が男でない女だと證明してくれとの事、どうした事かと僕もビックリして事情を聞くと此女は數年前から結婚して居て子供迄あるが、民籍は男になつてるので結婚の届や子供の籍の始末に困るので裁判所で正規の手續きをやつてるのだが、就ては女だと云ふ證明書が入るのだとの事だつた。

同一事件をも一つ僕は取扱ふた、よく調べたら朝鮮にはこんな事が珍しくないのかも知れない。

見たり聞いたり思ったり

トは教育勅語に迄迫つてゐる程しかく切實ではないやうである。然し、學校に於て教育勅語を讀むこ

京城雜筆

見たり聞いたり思つたり

伊藤憲郎（高等法院）

演習

唐人里といふ言葉の響きは、心地いゝと思ふ。永年京城に住みながらその土地の名さへ知らなかつた。洵に汪遠な話であるが、演習のおかげで久振りに黎明の情緒を味ひその唐人里のとある丘に佇み乍ら漢江を隔てゝの師團對抗演習——その渡河戰を眺め且つは野原林、道、村——空の匂ひと水の光りとに心を奪はれてゐた。ポエチカルな自然の姿が斯くも京城近くにあり、何時でも汽車に乘つて行けることを發見したことは、私の生活に一つの潤ひを與へたものである。

演習は終りに近いた。私らの丘に白兵戰が始まつた、そして松林の間に煙硝のけむと臭ひが流れた唐人里驛に向いた丘の斜面にも、北軍が攻めて來て散兵をしたが、見ると麓から一人の參謀將校が馬を躍らして上つて來た、審判官である。『いけない、いけない、唐人里驛方面から裝甲列車の猛烈な射撃！こゝはいけない、退却々々！』と叫んだ。アンナ・カレニナに出て來るウロンスキー將校とは斯くやと思はれた白晳美貌の人であつた。勇む馬と共にその將校は何處にか姿を消した。唐人里の丘には、やがて休戰の喇叭が鳴つて人は歸路に就いた。唐人里の野趣と大演習の一場面とは永く私の心に印せらるゝであらう。

『思想的嵐を突破して』

これは、里見岸雄といふ人の書いた本の名前である。新刊が出ると本屋は一聽私の手許へ寄せて呉れるのでこの本も一度現本を見たが、著者は曩に『天皇とプロレタリヤ』を書いた人であり、今度も内容は大體判つてゐることにして買はなかつた。

然るに、講習所の佐々木さんのお室で、社會課長のK氏にお逢ひしたところ、全鮮に頒布の計劃であるが、讀後感を書いて下さいとの話であつたので兎に角讀むことにして本屋から取寄せた。

讀後感は不良であつた、マルキシズムの横行跳梁に對して教育勅語を擁護する企ては、物質生活萬能から精神生活の泉源を指す本質的の人間の氣向ある以上當然と思はるゝが、說くところ今の時代に於ては急進的反動の感なきを得なかつた。著者のいふところ決して僞りではない、教育勅語には精神生活の奥義が一切秘められてゐる——極めてインター、ナショナルの性質さへ持つてゐる、朝鮮は固より如何なる民族もこれを遵奉出來る、斯くて立派な人間生活を送れる超民族性を持つてゐること明かであるが、少しく時幾尙早の論であると思つた。日本のマルキストは教育勅語に迄迫つてゐる程しかく切實ではないやうである。然し、學校に於て教育勅語を讀むことに確信を喪つてゐる程の人は讀んで信念を呼戻すべきである。

學者犬

學者犬トミー君を見た。ヘレンケー孃は、先天的に耳と眼との力なく而も大學者になつた話はあまりにも有名な話であるが、學者犬トミー君を見て教育の魔性を感じた。萬國旗の選分け——日本の旗は愚か支那のもイタリーのも言葉に應じて持つて來る。肖像畫の判斷——西鄕隆盛も乃木大將も知つてゐる。文字の區別——六大都市の札を區別する。算術が加減剩除出來る。應用問題——一本六錢の鉛筆は、一圓で何本買へるか、トミー君早速1の數字札と6の數字札とを咬へて舞台を廻る。更に殘りは幾何かといふと今度は4の數字札を取る。觀客は一齊に拍手喝采であるが人間の方が勘定が遲さうな形勢が見える。

教育の魔力は犬にまで及ぶ、教育次第に依つて色々な世界、種々な社會が出來ると思ふが、悉くの犬がトミー君の如き素質ではない先天的科學究明心のなきもの乃至倫理觀の欠如してゐるものには、教育の施す余地がない。教育に對する人類學的障害——こんな大問題は私には判らないが、學者犬トミー君を見て我々社會に於ける教育といふものの働きを考へたことである。

煙筒型家屋

土地の區劃は實に複雜してゐる地籍圖を見ればどんな土地だつて決して正方形にはなつてゐないこ

京城雜筆

とを痛感する。その土地の上に建てられる家屋も愈益凸凹化して來てゐる。地價昂い都會中心には畸形なグロテスクな家屋が亂立して恰も未來派の畫を現實に見るが如しである。

先頃用件があつて、あの廣場の一角に座を占めてゐる大每の支局を訪れた、奥行も間口もない、兎に角十疊位の一室が四つ重なつてゐる、――N支局長は、これでも四階あつて一番上は日本間ですよと笑つた。その煙筒型家屋の中に何人の社員が働いてゐるか聞きもしなかつたが、あの煙突から盛んに言論界に氣焰を吐いてゐることは面白い。京城雜筆社は社長自ら燐寸箱型家屋なりと嘆じてゐたと思ふが、朝鮮新聞社なども子供の積木型家屋から萬丈の毒氣を冲天にあげてゐる。愉快である。大朝の支局も上海あたりの支那町郊外末端にあつた家をふと思出す。未だ他にも珍型があらう。家屋のあまり立派な銀行あたりは信用價値が却而減ずるといふ話、言論界珍型家屋擬ひの一とくさり、別に毒にも藥にもならぬ話である。

永井郁子を聽く

お祭の夜、公會堂に行つて永井郁子のソプラノを聽いた。街のどよめきを外に興つきぬ秋の夜の音樂――數百の聽衆が耳を鋭くして一つ〳〵の曲目に心を傾ける。若い青少年小女は勿論ながらかなりの年齢の人の多くが頸をさし延べ腕を組み或は眼をつぶつて聽いてゐることは、流石に音樂の普及を思はせる。私は音樂に關しては殆んど知るところなきものであるが音の世界――そして耳を通じて起る感覺の快味を否定し得ぬ爲め時時出掛ける。

女史のソプラノは決して派手ではない、寧ろ地味の固さを以て精緻な頭腦のひらめきを示してゐたと思ふがどうであらう。選んだ曲目の配列にも行届いた用意が見えてゐたと思ふ。何れにもエロ的ジヤズ的の妖艶はなくフラッパーには物足りなさを與へたに相違ないそれだけ堅實な親達の喜ぶところであらう。女史は幼少の折ふとチヤプ臺の上の茶椀々々に依る音の相違を發見し、遂に家中の茶椀を並べたて、親御を吃驚させたといふ挿話を持つてゐると聞いてゐる山田耕作に別れ苦節十年今日獨自の境地を出さんとしてゐることは偉とすべきである。理想家であると思ふ。新箏歌謠曲、淨瑠歌謠曲は、斯る歌手の更に續出することに依つて、古きものが新らしく甦るであらうことを示した。

大隈重信がその開國五十年史に於て日本は西洋文化と東洋文化を融合せしむると書いて居つたと記憶するが、昔判らないものの一つにしてゐた西洋音樂が着々と大衆に喰ひ入りつゝあることは文化融合の一例證とも見れる。好んで歌澤を唱ふといふ藤原義江、そのテナーがこれも先年公會堂で歌つたとき滿堂の聽衆は最後の曲にしきりにアンコールをして歌ふ人は又出てからたちの歌かなんかを歌つた。そのときである壇の間近にゐた五十歳以上と思はるゝ一人の聽衆が歸るつもりで帽子を被りマントを着たところアンコールの爲め通道に棒立ち乍ら止まり聽いた。演者からすれば失禮至極と思はるゝが、その聽手は放心狀態なのである。身分は何れかといへばプロレタリアに近い樣子であつたと思ふが、そのとき私は所謂西洋音樂も大衆化せりと痛感したことであつた。

【六】

大衆が聾でないかぎり音樂的敎養は次第に受容されるであらう。眞面目な人生を歌ふ樂曲が普及され百尺竿頭一歩を進めて名歌手が刑務所で演じて與れる時代ともならば、幾多の過誤の人が音樂に依つてその魂を洗ひ清めることが出來るであらう。作曲家の意圖は多く社會淨化――惱む人々への愛に燃えてゐると思ふ。

◈お女中珍話

三木一彥

○お孃さんのお腹に寄生虫が出來た。

○奥樣は、お孃さんの排泄物の一部をとつて、それを奇麗な貝殼におさめ、それをまたハンカチに包んで、『お松や、これを病院へ持つてお出で』

○それをどう聞き違へたものかお松君近所の交番へ持つて行つた『今日は』、『イヨー別嬪！』、『これをお届けいたします』『何んだネそれは』、『私も存じません』、『ムッ』

○警官は、本職を侮辱したといふて怒るし、お松君は、『アレまあ……』とうろたえて、板ノ間に叩きつけられた貝殼を拾うて廻る

○ホントにあつた事……お松君（假名）とは、×××のS氏邸女中さん。

になる、夏はナンセンスの季節である。だから幽靈談なぞは涼臺か

二人の對話

飯嶋滋次郎
（京城醫專）

部屋に這入ると石油箱が一つ置いてあつた。油紙がかけてあつてどういふ意味か黒二號と横腹に書いてある。彼はそれがM氏宛のものだとすぐ悟つたので窓の戸を開けて煙草を一本吹かした。土の匂ひがあたりに漂つてゐるやうだつた。併し好奇心も手傳つて靴の先で油紙を除けると黄色い麻の切端が覗いてゐた。それから先は探偵小説の一頁みたいな氣がして躊躇した。其途端に豫防衣の胸に紫の鉛筆をさしたM氏が這入つてきた

『鑑定?』と云ふと微笑しながらM氏は默つて無造作に覆をはねのけると髑髏を一つ掌にのせた。古風蒼然たるものである。『何年ぐらい埋まつてゐた?』と云ふと、

『十年ぐらい山の松の樹に下に』

この人は學者であるからその調子は科學的冷靜である、死骨を手にして頼朝に旗上げの煽動を試みた文覺上人と違ふのである。それから『絞殺されたんでせう』と云つた。M氏の話は續いた、『獨逸にこんな話があります、ある下宿で續けさまに同じ部屋で下宿人二人も窓横木に窓覆の紐をかけて首縊りをつたのです。そこで警察で調査することになり、其任に當つたのが若い巡査でした。毎日その部屋に出張して調べては署長に復命してゐたのでした、二日目には別に異狀がないと云つてゐたが三日目には稍手懸りがあつたと報告し四日目には部屋の向ふの窓に素敵な引力があるなどと冗談を云つてゐたのでしたが、五日目にはやつぱり例の窓で首縊りしてしまつたのです、そこでいよ〳〵嚴重に探査すると對立した家の薄暗い室に朝から晩まで針仕事などしてゐる若い女がゐたのでした、黒づくめの衣裝で、じつとしてゐると女郎蜘蛛みたいだつたのです、この女の魅力で、一種の暗示をうけて男達は悲慘な最後を遂げていつたのです、もつともこれはエーヴエルスの荒唐無稽な小説ですがね』、

M氏は冷然としてゐたので彼は拍子抜がしたのであつたが、一寸一矢酬いたいやう氣がした、が生憎彼も怪奇生靈趣味に横溢してゐなかつた。もつとも科學的だと云はれるフラマリオンだとかオリヴアロッヂの著書を漫然と讀了したことはあるが、その說より著者の幽玄な顏に趣味を感じたのであつた世界戰當時に起つた生靈現象を論じたフラマリオンの著書に戰死した中尉が白晝家に歸つてきて、帽子を此所にかけ、その椅子に座つたと脚本のやうに平面圖まで掲げてある一節を讀んで妙な氣がした一体怪談とか身の毛のよだつ話なぞは經驗者はその當時は恐ろしかつたか知れないが、時が經つとみんな愉快な話に變形してしまふ、それを人に聞かせたりすると再變してバカ〳〵しい話、ナンセンスんど知るところなきものであるが曾の世界――そして耳を通じて起る感覺の快味を否定し得ぬ爲め時

○ホントにあつた事……お松君（假名）とは、×××のS氏邸女中さん。

になる、夏はナンセンスの季節である。だから幽靈談なぞは涼臺から雜誌の座談會まで持出されるのかもしれない。

彼氏の談にもどる。

『それでは僕の實驗談をお話しませう』と云つた。『それは今から十年の昔です、私の亡くなつた母が存命してゐた夏でした。盆の精靈火を焚いて、母は湯に行つてしまつたのでした。私獨りで長火鉢のところに座つてゐました、私の家の佛壇は土藏の中にあつたのでした、新聞か何かを手にしてゐた私の網膜には何にか白いものが佛壇から流れたやうに映つたのでした、突然に柱時計が鳴つたのにもグワンと胸を打たれるやうに喫驚したのでした、火箸を握つておかしい程の拔足で石段をあがつて網戸の中を覗くと綿が轉がつてゐたのです。――夜具に入れる青梅綿を母が身の丈ほども買入れて佛壇の前に立てゝ置いたのです』

◈新聞風聞記

三木一彦

○齋藤吾吉氏の商工新聞社は、今度立派な新社屋が完成し、この程盛大な披露宴を行ふた。

○始め同社の人々は、社業の進展に伴ひ、新社屋の必要を痛感しこれを實現するためには、我々の俸給は、向ふ何年間減額されても決して不滿はない――と、内部から結束一致、齋藤氏を勵ましたといふことで、新聞界近ごろの美談とされてゐる。

秋の金剛美

崔　南　善
（鍾路六丁目）

秋酣にして、殊更に金剛山の美が、或ひは報上に或ひは座間に擧揚される。一度でも金剛山の紅葉美に感觸を有する者は、相ならす金風にそれを思起してさへ、今更な悅惚と陶醉とに浸されるといはれる。金剛山それ自身が、美の一大群像で、而も鬱蹟に綠陰に玉樹瓊花に彩られる、春夏や冬の金剛が、それ〴〵特異の趣を添へてくるのはいふまでもないが、取りわけ峭壁に曝されては唐錦と煌き、長谷に漲ぎつては紅蓮と燃える紅葉の金剛は、何れの季節何れの景觀にも類同を許さざる奇絕壯極で實に金剛の美は秋に極まり、天地の美は秋の金剛に盡きるかの觀を呈するのである。

秋山は明淨にして粧ひたるが如しとか、霜葉二月の花より紅なりとかいうて、山の美、秋山の美までも、爛として映えるその外色に象徵しようとするのが一般の常であるが、然し乍ら秋山の美は、春林の紅紫を競ひ、兒女の靚服を衒ふ樣な淺墓なものではない。それは一年の間風に逆ひ雨と戰ひ、千辛萬苦を嘗め盡し凌ぎ來つて、嚴霜冷露にも尙ほ最後の勇を奮ひつゝある血みどろな姿こそ、秋の山であり、紅葉の美しさである。これが、山自身永劫に亘る風削雨蝕と戰ひ拔いて、慘刻の奇姿を殘して居る金剛山に於ては、地と文と相映つて、重々無盡の深刻味を現はして來るのを見る。人の見てア、美しいなといふ、秋山の皮下には、實にかやうな悲壯な血と脈とが浪打つて居るのだ。美しからうが、悲しきそれであるのだ。而して金剛山の秋色は、この風景による悲壯美の極致を示すもので、正に天下一品といふべきである。世に紅葉の名所も多いが、金剛山の樣な悲壯極まる畸形的背景は二つとないからである。

いはゆる優美、崇高美、滑稽美が、それ〴〵我々の美意識の對象たるは勿論であるが、眞に透徹したる美感、骨に浸み肺腑を抉る樣な深刻な美感は、蓋し悲壯のそれにのみ期待し得られるもので、朝暾よりも落暉に、野水よりも激湍に、喜劇よりも悲劇に、目出度し續きの生涯よりも、運命に虐まれた奇窮なる人生行相に、我々の高潮的な美覺が鼓盪される。恰も人間の審美性が、殘忍性を以つて裏付けてあるかの樣に、人は多くの場合、極美と極悲とを、同じ對境に認めようとする。モリエールよりもシエクスピヤに、ウインゾアの女房達よりもハムレットに、我々は餘計な美の饗應にあづかり、同じく悲壯の極とする聖人の最後にでも、娑羅林の釋迦よりも、ゴルゴタのキリストに、ヨリ大なる嘆美が强ゐられる。悲ならざれば美ならず、悲痛極まらざれば至美生れずともいへさうである。

【八】

然しながら、人間の力、その技巧は高が知れてゐる。我々の爲し得る美の表現は爛火的のそれであり、最大限にして電燈位が關の山であらうが、自然はわけもなく、洪大太陽の樣な美を我々の前に展開する。言語に絕し思慮を超えるといふ美は、たゞ自然のそれにのみ存在するものである。而して自然の現はし得る美の極限、その悲痛的奇壯の最高率を最も具體的に而も集約的に表現するが、紅葉に纏られる秋の金剛山といへる。絕對の價値を本具した自然の一大藝術品たる金剛山が、年に一度づゝ悲痛原理の新しき具現をなして、我々に美の最大迫力を加へるのがそのいみじき秋色であり類ひなき紅葉美である。げに秋の金剛山は雪梅の綻びに杖を引き、霜菊の薰りに杯を傾ける心持を以つて賞翫すべき景觀でなくて、當に腸の底の底より込み上げてくる悲感痛情を以つて、之に味到し、之に感入し、之を通して美の宇宙の眞髓に抱合を遂げる勝緣たるべきである久遠の大悲劇の年毎に於けるクライマックスとして、至心悲泣を以て、それへの讃嘆とし頌歌とするのでなければ、秋の金剛山を眞に玩味し得たといはれない。日よりの擦過でなく、心よりの歸入を爲し得なければ、折角大自然より親切を込めて、我々へ贈與し來る悲愍の詩篇も、あたら豚に眞珠となり了らざるを得ないであらう。

本誌原稿
毎月十日までに
御送り被下度候

松茸のにほひ

卷かれた感じがする。尤もごくねちの草藥をぶくしたにほひだけ特に著しいやうだ。

と戰ひ拔いて、修刻の奇姿を殘して居る金剛山に於ては、地と文と相映つて、重々無盡の深刻味を現

嘆美が强ゐられる。悲ならざれば美ならず、悲痛極まらざれば至美生れずともいへさうである。

切を込めて、我々へ贈與し來る悲愍の詩篇も、あたら豚に眞珠となり了らざるを得ないであらう。

京城雜筆

松茸のにほひ

麻生磯次（城大法文學部）

松茸のねうちはにほひとかたちにありと云はれてゐる。尤も土地柄によつて、其の格好などには好みがあり、關東では引締つたどちらかと云へば小柄のものが所望され、關西筋ではぢくの大きいのが珍重されるといふ事である。いづれにしてもつぼみのほつそりしてゐる間が松茸のねうちで、傘が開きかけてはもう遲い。丙地でも產地によつて、多少づゝ其の香氣や形の點で相違があるやうだ。古くから京都の山奥丹波丹後路あたりは松茸の名所とせられてゐた。中國筋も少くない。以前その邊に住んでゐた時分、秋になると毎日のやうに松茸の料理が並んだ。食べ過ぎるとのぼせ氣味になる。それ位に供給が豊富で、値段も安かつたやうである。ところがこちらへ來てから、その松茸とも緣遠くなつてしまつた。八百屋の店頭には並んでゐる。が、中國邊の相場に比べると、大分開きがある。それも緣遠くなつた一つの理由ではあるが、かたちが見劣りする、尙いけないことは、香氣の低い點である。

分析をしたら、松茸などには恐らく滋養價値は殆んど無いかも知れない。實際牛肉などの方が遙かに身體のためになる事だらう。素より松茸は嗜好品であつて、滋養品ではなからう。然し分析して價値のないものが、胃腸の働きを調節する上に案外役立つ場合が尠くないといふことだ。滋養價が高いからと云つて、無暗と獸肉を詰込んだとしたらどんなものだらう。食慾を刺戟する爲には胡椒のやうなものも必要だらうし、懦動を助ける爲には野菜等の纖維も必要だらう。松茸其物には滋養分は無くても、それに特有な香氣と舌觸りとは恐らく間接に身體の機能を高める上に役立つに相違ない。其の松茸がきめも荒く、にほひもないとしたらどんなものであらう。それこそ『無用の用』どころではなく、全く『無用の無用』なしろものに過ぎない。昔の江戸人は肴物を賞美したさうだが、松茸の名に釣られて、何も無味乾燥な木屑を嚙むにも當らないといふ事になる。

此處でにほひの薄いのは松茸に限らない。蕨やぜんまいなどもさうである。總てさういつた淡い上品な香氣を愛する嗜好品などにはどうやらその傾向が見受けられる。それは食物にも限らない。疊表が新しくても、あの特有なにほひは此處では感ぜられない。尤もそれは安直な貸家を巡り歩いてゐるせいかも知れない。新調の浴衣がけになつても、そのすが〳〵しい紺の香は鼻にぷんとこない。それも多量生產の機械染の時代になつた爲かも知れない。いづれにしてもにほひの無いひからびた環境に取卷かれた感じがする。尤もごくねちの草藥をぶくしたにほひだけ特に著しいやうだ。

所變れば品變るといふが、所變ればにほひもかはる。又場所は同じでも時代と共ににほひに對する好みは變つて行く。平安朝人の愛した香氣がその儘現代人の嗜好とはならないかも知れない。紫式部が王朝美人と唐美人とを比較して唐美人にはにほひがない、唐めいた粧はいかにもうるはしいが、なつかしからうたげな點が少いといふやうな意味を洩らしてゐる。にほひといふ語も時代によつて內容が變つて來てゐる。この場合、にほひといふのは嗅覺に訴へた感じのみではない。艶々しい見た目の感じをも含めて云つたものと思はれる。うるはしといふ語も、今とは多少用例が違ふやうで、たゞ美麗の意でなく、端正で整うた意に用ひられてゐる、つまり紫女の云つた意味は、唐美人には端正な美しさはある、如何にもきちんと整うてはゐるが、稍堅い感じである可憐なたを〳〵した點を欲いでゐる、一言でいへば、廣い意味でのにほひがないといふのである。にほひの語について更に廣く用例を求めるなら、色に染まる意とか、花やかにつや〳〵しい意とか、氣韵とかおもむきなどの意にもなるであらう。古歌などで『にほふ榛原』『にほへる妹を』などのにほふは專ら色に就いて云つた言葉で香氣だけの意味ではなかつた。又連句などでにほひといふのは、風韻とか面影とか云ふ意味であつたのである。

にほひの無い生活といふのは、廣くいへば風韵に乏しく趣の無い生活、映りはえたつや〳〵しさの

ない生活、香の失せた雅味のない生活といふ事にもならう。もしさういふ生活だつたらたまらないだらうが、兎もすれば、香氣の失せた松茸を嚙むやうな無味乾燥な思ひを味はせられる。形だけは立派に出來てゐる。建物にしても、道路にしても、見た目の姿は可成り堂々としてゐる。だが、『所謂うるはしい』だけで『にほひ』が足りない。人の心も立派に陶冶されてゐるやうだ。如何にもてきぱきした拔目の無いやうに見えるが、稍もすると、表面を滑走し勝ちでうるほひに乏しい感じがする。滋養になるから牛肉を詰込めといふ主義も結構だが、腹具合を調節する爲にも、もう少し役に立たぬものを役立てて見てもよいかも知れない。合理的といふ言葉は寔にうるはしいが如何にもにほひのない殺風景な言葉だ。人生のをかしみは折々算盤珠の桁違ひの邊に生ずる。にほひのない土地をにほひづける爲には、理外の理とか無用の用などといふ言葉も一層尊重されてもいゝだらう。

京城雜筆

私信

川上喜久子（木浦東拓社宅）

お手紙拜見、よきおたよりでした。

原稿のこと、いつまでもお約束を果さない怠慢をお詫びいたします。私の勝手氣まゝがお忙しいあなたを此の上煩はさないやうに、お催促を再び頂かないうちにと氣にはかけながらやはり何も書けさうもございません。

書きたいと思ふことは澤山あるのに書かうとするのがおつくうでならないのです、病氣をしてからこつち根氣が續かなくて何をするのもいやで仕樣がありません。こと此の頃は腸をいためて弱り込んでゐますのでなほさらさうなのです。

人生の幸福は後悔なき怠慢だと西洋の誰やら偉い人が言つて居ますが、病院通ひと日光浴をするだけで此の頃の結構な秋日和の毎日を送り迎へつつ時々そんな言葉を思ひ出してみます。そしてなるほどいゝ言葉だと思ひます。私の怠慢のあけくれを悔の心がこんなにもつきまとはなければどんなにか幸福でありませう。丁度讀み了つたばかりの失樂園の物語にはイヴが智慧の實を食べて樂園を逐はれる處がありました。定めし後悔といふ言葉も其時から人間の中に生れたのにちがひありません。かうなると全く失はれた樂園へ歸らうとする努力をなさないでゐられないつてことはたしかに人生に課された刑罰ですね。それはさておき怠けつゝ悔い、悔いつゝ怠け――その間にも此の一種の心の病氣、怠慢癖はだんだん救ひ難い重態に陷つて參ります。恥づべきことです。たとひ後悔に鞭うたれるとは言へ今の世の中で怠けながら生きてゐるといふことはまことに怖ろしい罪にちがひありません。これでもし病氣もすつかりなほり藥の必要がなくなつてからのち、なほ今の狀態から脫しえなかつたらその時は死刑に處せられても恨はありません。

こゝまで書いてふと寄生虫といふ文字を聯想しました。私のおなかのなかで人の營養分を横取りしながら平氣で戀をしたり卵を産んだりしてゐた怪しからぬ寄生虫共にこんど追放――ではない死刑を命じてやりました。その革命騷ぎが納つたらおなかの中も幾分か合理的に健康を恢復する事でせう。

さて自分のおしやべりばかしいたしましたが多を搖へてあなたのお丈夫でないお體はいかがかとかげながら御案じ申しあげて居ります。無理がすぎないようにお大切になさいまし。

◇食堂風聞記

三木一彦

○丁子屋の食堂が評判がいゝ。

○殊に女の人に評判がいゝ。

○奥さん連中、互に電話を懸け合つて、お晝頃あすこの食堂で落ち合ふ。そして御用談――イヤ御閑談……イヤ御閑食である。

○とも知らずに、旦那樣もお友達と勤め先からヒョッコリ…『オーヤ』、『アラ〳〵まあ』

○町の中央部の、最輕便な足溜りとなつてゐる。

馴れるといふこと

まあ一寸考へさせて呉れと云はざるを得ないだろうと思ふ。しかしこれも結局馴れたら私如きもので

けで此の頃の結構な秋日和の毎日を送り迎へつつ時々そんな言葉を思ひ出してみます。そしてなるほどいゝ言葉だと思ひます。私の怠

京城雜筆

馴れるといふこと

本田建義

（本田病院）

善い事悪い事に係らず物事に馴れると云ふことは誠に偉大なる結果乃至は力を有するものと私は常に思つて居る。私は幼少の頃は（現在もそうかも知れぬが）極めて小心もので悪く云へば臆病者で自分の怪我した際は勿論のこと、他人の外傷の創なども見きれぬ位で、最初醫者とならうと云ふ際も先づ外科醫は眞平だと決心して居たものでした。ところで一人前の醫師となつて東京の深川に開業――東大の選科に通學の傍――午後と夜間は外科でも内科でも何んでも來いと云ふ全料醫の看板でやり初めた際も一般の醫師としての一通りの外科は修めは修めたものゝ性來の小心がわざわいして患者の一人でも澤山來て呉れることは欲するものゝ交通事故や又は喧嘩等に因する外科的患者が飛び込んで來たらどうしようかと内心大に心配したものでした。然るに私の所は病院の位置の關係上外科專門でないに係らず交通事故等の外傷患者を持ち込まれることが意外に多いので永年の間いや〳〵ながら斯樣な患者に澤山あたり即ち充分馴れて來たので（其の間外科的手腕の必要を感じ不充分ながら多少其の方面を研究せしことはあるも）今頃では肝玉丈は大概出來た積りで如何に大怪我の患者に直面してもアハテルやうな事はない。私はこれが即ち馴れると云ふ事の功德かと思つて居る。先年アメリカ横斷の際シカゴの例の世界一の屠牛場を見物して地獄とはこんな所かと身の毛がよだち、其後暫くは滊車の食堂に出てもどうしても牛肉の料理は食ふ氣になれないで困まつたが、これも馴れると云ふ事から推して考へると私如き小心の者でも馴れたら牛殺しにもあながち成れぬ事もない道理だと思つた。よく洋行談になつて仕舞ふ樣だが同じ歐米外遊中パリーの世界建築物の最高と云はれる彼のエッフエル塔を昇るとき、エレベターを三度も乘り換へて最頂上迄昇つた際三度目に乘換へた頃は隨分高所で下を見たら交通の人馬はまるで蟻よりまだ小さく見へる位で安全と確信するエレベターの室内でさへも餘りのこわさに足一つ動かすことも出來ず、窓口にしがみ付いてこわ〳〵パリーの天地を眺めて居ると、豈圖らんや鐵材を組合せた其エッフエル塔の外側に電燈工夫がぶら下り鼻歌うたひつゝイルミネーション用の五色の電燈を取付け居るのを見た時は實に一驚を喫したと云ふよりか日の出の國日本男子たる自分の餘りに臆病なるを心恥かしく考へたが、しかしそれでは其の電燈工夫が突然日本男子の私に金はいくらでもやるから一つ私と代つて電燈を取付けて呉れんかと持ちかけられたら殘念ながらオイそれと受合はれそうもなくまあ一寸考へさせて呉れと云はざるを得ないだろうと思ふ。しかしこれも結局馴れたら私如きもので平氣の平左でやれぬことはなかろうと信ずるのである。要するに此の馴れると云ふ事は教育上にも修養上にも又前述の如く職業の上にも善い方面にも悪い方面にも非常なる偉大性のあることだと私は深く信ずるのである。

○とも知らずに、且那樣もお友達と勤め先からヒョッコリ…『オーヤ』、『アラ〳〵まあ』

○町の中央部の、最輕便な足溜りとなつてゐる。

◇三越店開き

なにがし

○舊府廳跡に三越新館はいよいよ落成した。鮮銀、京城局と向ひあつて近代的市街美を現出する事になつた。新館は地階とも五階、それに六階の見晴し臺を附設してゐる。

○五階は、ギャラリー、寫眞部溫室、屋上庭園、藤棚、茶室、及び簡單な喫茶を供する設備もしてある。

○四階は、ホール、食堂、貴金屬、家具、樂器を配置し

○三階は、書籍、文房具、男子用洋品、美容室、子供洋服、靴、鞄、玩具、裁縫手藝用品

○二階は、絹綿呉服、細工物、朝鮮呉服、貴賓室に充當し

○一階は、食料品、化粧品、洋傘、ショール、履物、朝鮮物產等の略從來と同じ物を置く事になつた。

○地階は、食堂、市場とし、市場はかつて扱はなかつた種類のものも取扱ふやうになるであらうし盥バケツ等の日用品も茲に置く。

○概略、かういふ風であるが、愈開館の上は内部の裝飾、建築の美は衆目を奪ふものがあらう。

【三三】

明の提督李如松に就て

加藤灌覺
（總督府學務局）

先月末の或る新聞の地方通信中に、彼の文祿役の當時明國救援軍の提督として大活動を續け、それに由つて一時の大立者となつた寧遠伯の李如松は、全くの朝鮮人であるかのやうに紹介されて居つたが。それは恐らく何かの聞違ひをせられたものであるらしく、今更別に彼是といふ程の事でもないが幸ひ私が記憶してゐる其當時の秘錄である宣祖昭敬大王實錄第三十六卷、即位二十六年三月丙寅日の條に

『李恒福曰。提督云吾是汝國人也。五代祖因有罪逃入中國。來時所持弓子至今猶存、仍以其弓出視之曰。願依此樣造弓以惠。吾是一品官。見汝國王敬謹不怠以此也。自稱獨魯江人。所謂獨魯江（禿魯江）即江界也』

とあるのがそれで、實際彼の五代の祖だけは全くの朝鮮人に相違ないが、それ以來續いて來た四代の間は、凡て彼地の人達と婚を連ねて、頗る濃厚なハーフキヤストになつてゐる關係上、どうしても純なる朝鮮人といふ事が出來ないやうな系圖になつて居る。要するに李如松自らが吾は是朝鮮人なりと公言したのも、畢竟朝鮮の人の血を受けてゐる家系であるといふ、一種の外交的辭令と解釋するのが至當であらうと思つて居る。

餘り必要もない史實に關して、こんな低い調子のものを書いて見るのは、一寸恥かしいやうな氣持はするが、丁度今月に入つてから李如松果して朝鮮人なりやとの質問を受けたことが數回あつたので一寸其お答へ旁、茲に一言を記させて頂く事にしたのである。

尙この序に一寸お傳へして置きたいのは、彼が朝鮮に來てから全くあのやうに一氣呵成的の活動を續けてはゐたが、不幸碧蹄の一敗から上下の信望を失ひ、已むなく朝鮮を見棄て鄕里に歸還し、暫く閑地にあつて不遇な月日を送つてゐる中、時の遼東總兵官童一元が蒙古の土默特部族と折衝の上、失敗を續けた後の遼東總兵官に任命せられ。大に萬歷帝の知遇に感じて勇悍に彼等と戰ひ、丁度碧蹄戰敗の年から六年目即ち萬歷二十六年の四月に、恰も碧蹄戰の時と同樣な輕擧を敢てし、僅少な手兵を以て塞外に進出の上、突如として土默特の本營を襲擊せんとするの途中、彼等の伏兵に包圍せられて哀れにも無慙な最後を遂げたといふ事なのであるが、吾人は茲に此一小記述の筆を執るに當つて、特に彼の英靈に向つて深厚な敬意を捧げる。

易
小阪順
岡村石介

【一二】

◈城大風聞記

漢江漁郎

○城大の高木市之助先生は、日本のお能の研究者として有名であるばかりでなく、西洋の人形劇などについても、實に深い造詣をもつてゐられるとのことである。

○先年歐羅巴からもどられる時印度洋でヒドク海が荒れた。しかし先生は、概して船にお强いので鉢卷をして、部屋の中でウン〳〵唸られるやうなことはなかつた。だが、いつの場合にも、自若安祥として居られる先生が、起つたりゐたり、變にそわ〳〵せられるので、友人各位は、『高木さんどうかしましたか。お氣分でも惡いのですか』と、親切に尋ねる。しかし先生は、『イヤその點は大丈夫なんですけれど』といひながら、尙も物に愧かれたやうにそわ〳〵……。

○友人各位たまり兼ねて、『では、一體どうしたといふのです、アナタとしては、妙に落ちつきを失つてゐますネ』と、相當强く質問すると、『實は……實はその……この荒れで鼻が心配でならんのです』といふ返答。

○鼻？鼻？、『あなたの鼻ですか。どうも僕等には、一向意味が判らん。一ッ凡人にも判るやう御說明が願ひたい』

○斯うして、ヤッと判つた意味は、高木先生西洋から澤山のお面を仕入れて戻られつゝある。よッて、この荒天で、大事々々のお面の鼻が、ポキンと折れはしないか……これ先生そわ〳〵の原因と判つて、一同『ナ、ナアーンだ』と欲して無理なる倒れ方を敢てせし結果なり。倉田氏は生徒を保護

故京城中學校教諭

故京城中學校教諭
倉田健之助氏の臨終

關本幸太郎
（京城中學校）

豫てより密かに期しぬ今はしも
さやけく逝かん職に殉じて

これは是れ故倉田教諭の臨終に際する心境なりき。尊くも又淸くもある哉。

昭和五年九月十一日、氏は平素の如く柔道場に在り、英姿颯爽として熱心に生徒の指導に當る。午前十一時五分、恰かも第五學年生徒金永年を親しく稽古中、突然頸部に負傷し內部の脊髓延髓に故障を生じて四肢不自由呼吸困難に陷る。氏の負傷するや三名の生徒息せき切つて校長室に駈け入り其由を余に傳ふ。余直ちに道場に至る京中附近に住む松藤四段は打ち身挫き等に對する手當の名手にして又倉田氏の親友なり。生徒の知らせによりて飛ぶが如くに來場し、頸椎骨の位置を整理せる爲め呼吸稍や安らかとなる。醫博植村俊二氏に來診を請ふ。博士は自働車を飛ばして直ちに來校せらる。授業なき職員、柔道の生徒、報を聞き驚いて駈着けし夫人及武子孃、友人等倉田氏を取り卷きて看護に當る。約三百疊敷の大道場、今の今まで龍攘虎嘯元氣橫溢の觀ありし所、忽ち變じて不安の氣に滿たされ又一語を發するものなし。

植村博士の面ト憂色漂ふ、博士は余に向ひ密かに告げて曰く、豫後に就ては今明言し難し、兎に角入院せしめよ、最善の策を施し見ん、稍や落ち着きて後ち病院に送れと。道場に橫ること三時間餘、其間植村博士は再度來診せらる。午後二時半に至り、特別急造の擔架によりて僚友子弟に擔がれ護られ絕對安靜の姿勢を續けつゝ永樂町植村外科病院に入る。越えて數日終に起たず。嗚呼悲しいかな。

柔道稽古中四肢や鎖骨を傷め關節に故障を生ずるなど往々見受くる所なるも、其の骨折の如き容易に之を治癒し得べく、且つ一度折れたる個所は治癒後却て强緊の度を增し、再度其部の負傷せし例を聞かず。倉田氏今回の奇禍の如きは之を絕無といふ能はざるも極めて稀れに見る所のものに屬す。蓋し今日の柔道なるものは其實用に頓着なく、主として心身鍛練の爲めに課せらるものなり。從て危險の防止に就ては最善の注意を拂ひ研究に研究を重ねて投げ方倒れ方を工夫せるものなり。しかも倉田氏は其技に於て最も練達せる一人にして、殊に倒れ方に於ては自他共に許せる達人なりき。此人にして此事あり。抑も何によりて然るか。想ふに生徒を保護せるが爲めなり。生徒の投げ方不十分なりし故共倒れとならんとせし時、其のまゝにては倉田氏の体軍にて生徒を傷けんことを恐れ、之を避けんと欲して無理なる倒れ方を敢てせし結果なり。倉田氏は生徒を保護せんが爲めに自ら傷く。其死や最も尊むべく、又最も悲むべし。

故倉田氏は我が京中卒業後東京高等師範學校に學び、業大に進みて福井新潟の諸縣に奉職し、大正八年秋母校に歸りて任に子弟の薰陶に當る。氏は幼にして秀才の譽を荷へり。性磊落剛毅にして純眞又義俠心に富む。生徒を愛すること子の如く、しかも其元氣を鼓舞し意氣を發揚せしむに於て至らざるなく盡さざるなし。爲めに門下に偉才を出し又水泳に各種の運動に生徒の意氣大に揚る。氏は只に京中の爲めに盡せるのみならず。又朝鮮半島に於ける武道界に對し燦々の功ありしは衆目の均しく認むる所なり。氏の殉職は誠に尊むべしとはいへ、我京中の爲め、我半島武道界の爲め、痛惜措く能はざるものあり。

氏の病床にあるや、頸部の痛みと、呼吸の困難とは最も氏の肉體を苦しめぬ。四肢は感覺運動共に之を亡失して用を爲さず。但し頭腦は終始明晰にして其臨終に至るまで平素と異れるを見ず。其の遂に起つべからざるを知るや、肉體の苦痛刻々に迫れども、自己の殉職に滿足せし心境と、剛毅なる性格と相待ちて、毫も之を意とせず氏の德を慕ひ氏の恩に感じて、病床を見舞へる數百の人々に對し一々袂別の辭を述ぶ。人によりて法を說く一として肯綮に中らざるなし。臥床中言ふ所は京中のこと門下の將來に關することのみ。生徒に對しては大に京中スピリットを發揮せよと激勵するなど、一言一句涙なくしては聽くべからざるものあり。敬虔の面持を以て陛下

一種の外交的辭令と解釋するのが至當であらうと思つて居る。

餘り必要もない史實に關して、こんな低い調子のものを書いて見て、この荒天で、大事々々のお面の鼻が、ポキッと折れはしないか……これ先生そわ〳〵の原因と判つて、一同『ナ、ナアーンだ』

易
小阪唄
岡村介石

京城雜筆

の萬歳を三唱し、又京中の萬歳を叫び、日頃愛誦せる馬賊の歌を朗吟し、恩を謝し義を述べ、情を盡し道を唱へて呼吸を絶ちぬ。稲村主治醫の苦心、岩井内科博士の協力も其甲斐なく、尊くも悲くも職に殉じて白玉樓中に入り畢んぬ。

剛毅なる精神の持主、しかも職務に倒れしことを本懐とし、肉體の苦痛甚しかりしに拘らず、心中安らけく、精神爽かに、何等迷ふ、所なく、從容として此世を去りし

倉田氏なるも、さすが恩愛の惱みに堪えざりけむ。夫人に向ひ、『苦勞をさせて濟まなかつた』と言ひ、『武子を暫らくあちらへ』と言ふ。終始枕邊に侍し、時に涙を浮べて父を見守り、時にニッコとして無心の笑みに父を慰めし武子孃、子供ながらに面上憂色を湛えて日頃の活氣を亡ひし武子孃、年僅かに九才、尋常第二學年在學中の武子孃、日頃氏が愛撫措かざりし一人娘の武子孃、其の武子孃の

顔を見るに忍びざりしものか。『武子を暫くあちらへ』との要求ありし時、情を汲んで滿座涙を絞らぬはなかりき。此の武子孃を殘し、家人僚友知己門下に名殘りを惜しまれつゝ、あはれ三十八歳を一期として大往生を遂げぬ。かの頑健なる身体、かの俠氣、かの剛毅なる精神かの責任感、かの情誼馬賊の歌、餅搗き踊り、數々の語り草を我等に殘して。嗚呼、嗚呼、嗚呼。

◈中學生の頃

漢江漁郎

○杉原博士は、米子中學の生徒だつた頃は、ズーッと特待生で通しました。

○然るに、博士が五年生になつた頃、縣は、米子中學の良き校長を、だしぬけに失敬し、これを鳥取中學に轉任させました。

○悲憤の氣が全校を壓しました

○一日、博士は、雨天體操場に起ち、縣の横暴非違を數へて、全生徒の奮起を促しました。

○それは、古へのガンベッタのやうな悲痛極まりなき大演說でした。

○その結果、生徒は、代表を選び、直接縣に談判するといふことになつた。

○委員になつたのが、博士外一名である。

○生徒一人につき、二十錢を醵出したから、忽ち總額八十餘圓の金が出來た。

○兩代表は、古へのガンベッタのやうな決心で、鳥取へ行つた。縣廳へ押し縣けた。

○そして知事に會ひたいといふと、學務課長が出て來て、『何の用だ』といふ。『お前にいふ必要はない。此所へ知事を出せ』『ヤー、この小僧ら、ワシを誰と思ふこやつが〳〵……』

○料らず大論判が始まつたとこへ、ニコ〳〵した御老人が出て來て、『まア待て。ワシが知事ぢやウン、そんなことを學務課長がいふたか。ハーン、それアいかん。時にもう十二時ぢや。君等は飯を食つたか。何、まだぢやと。さうかワシと一緒に食べやう。遠慮は入らぬ。さア來い〳〵』

○知事は飯を食はせて、話をして、翌日もどる時、とても大きいカステラを秘書をして驛まで届けさせた。

○歸校——報告演說——『諸君！知事は、實によく判つた人であります』——生徒の一人『……でこの話は、結局どうなつたんだ』兩代表長夜の夢始めて覺めたる如く、『ウ……そ、そ、その點は……諸君實にザ、ザ、殘念……』

人蔘劑では
一も二もなく
總督府
專賣局
精製の蔘精
に限ります
發賣元
貴生堂藥品店
京城本町二丁目
（電本一三八番）
（振替七六一番）

うなり聲

健脚と不健脚の差がはつきり顯はれて來る。先頭はといふと、蟻が這つてゐるやうに小さく見へる程

○兩代表は、古への荊軻のやうな決心で、鳥取へ行つた。縣廳へ押し懸けた。

ふたか。ハーン、それアいかん。時にもう十二時ぢや。君等は飯を食つたか。何、まだぢやと。さう

兩代表長夜の夢始めて覺めたる如く、『ウ……そ、そ、その點は……諸君實にザ、ザ、殘念……』

京城雜筆

うなり聲

大場勇之助
（第一高女）

宵の口お母さんやお姉さんに連れられて平田百貨店やその他の店に無精に女學生達が何か買物をしてゐるのを時々見られるでしようあれは大抵その翌日遠足があるのだと思召して差支ありません。つまり彼等はその日の兵糧を仕入れて居るのです。そして彼等はその兵糧を枕元に置いて寢る程遠足と云ふものは樂しいものらしいのです。前夜天候でも惡いものなら庭のあんずの木にテル〳〵坊主でも結びつけて日和見の百萬遍をするのは獨り小學生ばかりではないやうです。

女學校では毎日終禮といふものをやる、そしてこの機會に色々訓育上の話や明日の行事などを豫告することになつて居ります。その時『明日は遠――』の一言だけでも……嬉しいッ……といふ言葉が異口同音に教室中電氣でも傳つたかのやうにいとも速かに發せられるのが常である。そしてその日の携帶品を一々言ひます。

お辨當――水筒――まで云ふと『お菓子』と生徒の方から次ぎ足して呉れるのが普通です。

そんな物は入らん――と云ふものゝ教師自身でさいも密かに忍ばせて行くものも……（特に女の先生に多いやうですが）……あるのですから教師達も遂ひには苦笑せざるを得ず、つまり暗默の裡に首肯するやうな譯です。

今學期も九月の中旬に始めて全校の遠足が行はれました、私の擔任の三年生は北漢山の大成門が劃當てられたのでした。

愈々當日約百五十名の乙女達は初秋の柔かな朝日に輝かしい笑顔の波を打たせ、いづれもはち切れるやうな手提や、リユックサツクに身をかためて孝子洞の終點を出發したのは午前の八時十五分頃でした。

洗劍亭あたりまでは道は至つて平坦である、一同の元氣は頗る旺盛、行手に息づまるやうな嶮岨が横つてゐるなどとは夢にも思はないやうである。或る者は談じ、或者は歌ふ、女の子は口は仲々達者である。

いよ〳〵北漢山の登り口に差しかゝる、路が段々上り坂になつて來る、しかし人家がチラホラ見へる間はまだ〳〵元氣である。相變らず歌と話しの交響樂をやつてゐる。聽て路は段々と嶮しくなつて來る。人家などは一軒も見へないしかも今年の夏の大雨のために土が流されてゐるせいか、角ばつた石と岩を攀ぢ登らねばならぬ。段々お腹がすいて來る。

私は引率主任と云ふ責任上隊伍の殿を勤めたがソロリ〳〵いろんな言葉が耳に流れて來る。……アーきつい……まだかね……お腹がすいた……ア、死にそうだなんて恁ふなつてくると同じ女の子でも健脚と不健脚の差がはつきり顯はれて來る。先頭はといふと、蟻が這つてゐるやうに小さく見へる程に遠くに登つて時々は後ろを振り返つてハンカチなど振つてゐるのも見られる。其れに反して後尾の二三十名と來ては靑息吐息の連發で一向に進まない。岩に腰をおろしてはなぜ遠足になんど來たのかしらんと云ふやうな顏をして溜め息をついてゐる。『ソラッもう一息だ、元氣を出せッ……』と私等から追ひ立てられては恰度牛が起き上る時のやうな格好をして又登り始める。この間某中學校から來たばかりの元氣の好いS先生などは始めて女學生の遠足に參加して感慨無量、時々は大聲を發して、『前へ進めエ……敵は前方三百米突の所に表はれた……道はア六百八十里』なんてやりだすもんだから乙女達も是迄に聞いた事のない樣な元氣な聲に勵まされては重い足を運ぶが又休む。又大聲を發しられては又登る。又休む、又登る。斯くして漸く大成門が遙かに見へる所まで來たが十四五名の者は最早やどうにもこうにも仕樣がなくなつて來たらしい。岩の上に石地藏のやうに坐つてしまつて仲々動かない。『ソレッもう一息だ、元氣、元氣……』と云ふけれども何の効力もなくなつて來た。S先生は最早變想をつかしたのか鼻唄歌ひながらサッサと先へ行つてしまつた。サア困つた十四五名の生徒をおんぶする譯にも行かず、仕樣がなしに脊後の景色でも眺めやうと思つて振り返へり、マッチ箱が並んだやうな京城の街に見入つてゐたが果然ものゝ一町も離れたと思はれる下の方からウオ――……ウオ――……と云ふなり聲が私

京城雜筆

の耳に聞べて來た。暫くやんだと思ふと又聞へて來る。こうなると私の職業柄、私の耳は敏い。岩上の生徒達は一向に氣が付かないで相變らず石のやうに動かない。このとき私にフト名案？が浮んだのです。虎！虎が來た。『みんな耳をすましてあのうなり聲をきいてご覽』……生徒達は虎！と云ふ一言を聞いて稍不安な面ざしで少時耳を傾けてゐたが、又してもウオー〳〵といふのが聞えるとア、怖わ〳〵といひ乍ら先を爭つてドンドン登り始めた。奇策効を奏したとでも謂ふか、其れからと云ふものは大成門までは誰一人休む者もなかつた。そして大成門を中心に三々伍々組を作つては夕べから用意した御辨當やお菓子に舌鼓を打つたときに始めて遠足のパラダイスを味つたのでした。

しかしあのうなり聲は果して何者であつたか、今だに合點が行かぬがあの場合最も有効なうなり聲であつたことを思ふて今にあの時の場面を思ひ出しては獨りで頻笑んで居る。（一〇、五稿）

【一六】

◈合財ふくろ

漢江漁郎

○鐵道局の鉅鹿氏は、一種の物識りでもあり、且研究家でもある

○ツイこの間も、『變なことをいふやうだが、拙者の研究に依ると、ワイシヤツの値段と娼妓の揚げ代とは、常に必ず一致するもので……イヤ、まア聽き給へ……明治十五年には……明治三十年には……次ぎに同四十五年には……然るに妙なことがあるんだ。といふのは、現在の昭和五年ぢや、御覽のやうにワイシヤツは、滅茶々々に暴落してゐるのに、片や揚げ代の方は、實にケロッとして、少しも聯盟の意義を表現せん。これア確かに研究の餘地がある……』

○雄辯滔々……（この時正午を報ずる振鈴！ケタタマしく鳴る）

○と、机を並べた江口係長徐ろに身を起して、『ヨーシ、判つた！。……お晝ぢや。もうワイシヤツな話はよからう……』

× ×

○朝鮮ホテルに旅裝をといた玄角仲藏氏、早速その夜按摩から近來カフエー、アルプスが非常な人氣だといふ事を聞いた。

○翌日、直ぐに出向いて見ると

なる程大入滿員、設備はさらなり女給も伸々粒が揃つてゐる。よく聞けば主人は舊知の間の谷垣氏。

○『ヤー、君もあてたね。僕も同じことさ。今度こそは玄角がやり損つたと世間ではいつてるさうだが、とにかく僕の仕事も目鼻がついたからね。君も洋食屋にまでなり下つて危まれたが惡くいつた奴は一寸意外だらうね。だが勝てば官軍負ければ賊だからね。しつかりやらうぜ』

○斯くて按摩が取り持つたんだから按摩に禮をしなければならないといふやうな結論になつたさうだ。

× ×

○京城驛長の廣田隆治氏が、球なら三百以上の、物スゴい腕をもつてることは、ヨモヤ皆さん御存知あるまい。

○それで平生は、ちつとも球撞屋へは行かないのである。

○日本趣味の號吹者と目されてゐた、城大の杉原博士……いかなる風の吹き廻しにや、こつそりゴルフといふハイカラ遊びを始めた『博士が……へヘー』と耳の感覺を疑はないものはない。

○瀬戸先生が馬に乘ることは、誰も知る。柔道をやつて、折々人をブン擲ぐりたい習性のあることも、世人よく知る。ところが、人は見懸けに依りませんな。アノ喧嘩ッ早い先生……ナントお茶を習ひ、お花を習ひ、小笠原流禮式を習つてゐるッしやるのです。しかもコ、二三年……。

本塲銘仙
毛糸各種
ちゝぶや
本町二丁目
（電話五〇五番）

コトバの國產愛用
るが商品を造るもの、賣るもの、買ふもの、すべてが日本人であるのにその名前を外國語でつけるば

角伊藤氏、早速その夜拔摩から近來カフェー、アルプスが非常な人氣だといふ事を聞いた。

○翌日、直ぐに出向いて見ると

（電話五〇五番）

京城雜筆

コトバの國產愛用

鮫島宗也
（京城日報社）

外國製よりも品質がよく値段が安いか又は外國製と同等同値のものなら日本で出來たものを使ひましようと言ふのが近頃やかましい國產愛用運動であると思ふ。

まづい高い品でもぜひ國產品を使へ外國製品を排斥せよと言ふのではない、國產偏用を唱へてゐるのではないと思ふ。

今の國產愛用運動は商品に就て從來の舶來品崇拜をやめよとの運動であるが私はわれ〳〵が日常使つてゐることば、書いてゐる文字にも大に國產愛用を唱へる必要があると思ふ。

日本のことばで言ひあらわすことの出來ないことばとか文字なら外國語外國文字を使はなくてはならないのだが立派な日本語があるのにわざ〳〵外國語を使ふ必要はないと考へる。おとうさん、おかあさんと言ふ立派な日本語がありながら、パパだとかママだとか强いて子供に自分を呼ばせようとする親達の心が分らない、おとうさんおかあさんといふ言葉はまことに親しみのある耳觸りのよい言葉であるように思ふ。こんなよい言葉をなぜ使はないのか、茲にも西洋崇拜心のあらわれがあるのではないか。この頃時々府營バス（バスと云ふ言葉は乘合自動車といふ言葉よりも簡單でよいから將來バンとかランプ等の如く常用語となる素質を多分に持ち合せてゐる）に乘ることがあるが、あの女運轉手のキザな『オーライ』『ストップ』と言ふ聲を聽くとイヤで堪まらない。『よろしい』とか又は女らしく『モーいゝのよ』とか『とめて下さい』とか其場合〳〵に適當な言葉が日本語でイクラもあるではないか。宜しく然るべき日本語に改めてほしいものだと思ふ。

茲には一二の例を述べたに過ぎないが外にも澤山こんな例は多いと思ふ。なるべく國語愛用を提唱したい。

國字改良運動の第一線に立つて華々しき活動を續けてゐるカナモジ會は本年七月政府要路に向つて煙草の名前とその包紙との外國語をやめる建議を提出した。それは政府賣買の煙草の名前が外國語であつたりその包紙に外國語を用ゐてあるが、それは左の理由により凡て日本語に改められたいと言ふのである。その理由は先づ國產奬勵の立場から申せば國民の歐米崇拜の風を利用する爲めわざと國產品にも其の名稱や包紙に外國語のみを用ゐてゐるものがある。こんなことではイツまでも國產奬勵の實を擧げることは出來ない。外國語を知らぬ大多數の國民が商品の文字を一見して國產品か否かの見分けが付くようにしたい。それには先づ政府がその專賣たる煙草の外國語をやめる事である。第二には國民生活合理化の立場からであるが商品を造るもの、賣るもの、買ふもの、すべてが日本人であるのにその名前を外國語でつけるばかりか用法に到る迄外國語で記すが如きは外國語を知らぬ大多數の國民にとつてまことに不便であるばかりでなく不見識極まるものであると云はねばならぬ。そして他の一方では『英語を知らねば煙草の名前も讀めない』などと言つて英語をムヤミに敎へこむ。そして敎育能率を妨げてゐる。政府は宜しくこの愚かなる弊風をのぞき敎育及び國民生活の合理化を圖る爲めにもこの建議案を採用されたい

又第三の理由としては國語を軍んずる立場からである、苟くも愛國心あるものは國語を軍んぜよ、國語を卑むことは國家を輕んずることである。戒しむべきである。歷史上から見てもローマ帝國の國語政策、ドイツの國語運動等國家は自國語を軍んずる政策を執つてゐる。現に獨逸には外國語の使用を禁ずるための訓令や規定があり、英國の議會では正しい英語の外は用ゐられず、フランスでは外國語をフランス語同樣に用ゐるには大學院（アカデミー）の決議を要することになつてゐる。

我國でも最近の日本銀行兌換券にこれまで記されてあつた英語が省かれ、又交通整理の札にも『ゴー』『ストップ』等の英語も次第に『ススメ』『トマレ』等の國語に改められてきた。又民間でも自働車の『ウズレー』を『スミダ』に自轉車の『ラーヂ』を『富士』にそれぞれ改めるなど國語を軍んずる風が盛んになつてきた。政府はこの喜ぶべき機運を一層盛んならしむるためにもこの建議を採用されたいと云ふのである。

人間ナポレオンの熱涙

土師盛貞
（總督府商工課）

【一八】

巴里の郊外南西の方向に當つて宮殿と言つては少々大袈裟、先づ別莊と云ふやうな程度の建物。多くの巴里觀光客が訪ねるであらう所のマルメゾン。記錄によれば十七世記に開設せられ、其の後フォンテーヌがどうの誰やらが斯うのとあるけれども、一般には奈翁緣故でよく識られ、殊に奈翁の皇后ヂョセフキンが離緣となつて以來永眠する迄暮した場所として有名である。今は奈翁とヂョセフキンとを中心とした物を陳列して人に觀せる一の博物館で、自分は巴里滯在中、西洋史の復習又は新規啓發の爲めに二度も此のマルメゾンを訪ねた。

ナポレオンが皇后ヂョセフキンを離別して墺太利の皇女マリア、ルイザを娶つた。と云ふ事實は先刻承知だが、此のマルメゾンを訪ねて其の緣故の器物に接し、其の緣故の室に立つて、今更に感慨少からざるもの無きを得なかつた。

ナポレオンがヂョセフキンと結婚したのは一七九六年、男が二十八歳（日本式の數へ年以下同じ）女が三十四歳。ヂョセフキンは二年前革命騷ぎで斷頭臺の露と消えた前夫ボーアルネ子爵との間に一男一女を擧げて居た。（其の女は奈翁の弟ルイ、ナポレオンに嫁し其の間に產れたのが奈翁三世である）卽ち奈翁は子持ちの後家貴族夫人と一緒になつた譯である。男より年長の聊か姥櫻であつたとは言へ、ヂョセフキンは才色兼備の婦人で、軍事的天才を發揮して旭日昇天の勢に就いてゐたナポレオンは、結婚後間も無く新夫人を携へて伊太利征討に出掛るなど蓋し得意の場面であつたらう。ヂョセフキンの奈翁の妻としての社交的働きは花々しいものであつたと謂はれ、奈翁の功業に寄與する所尠くなかつたと謂ふ。斯くて千八百四年ナポレオンが皇帝の位に即くと共に、ヂョセフキンも皇后の位に就いた。

ヂョフキンの離別は千八百九年十二月だが、抑も何故の離別であつたらうか。茲に詳細に之が詮索を爲すことをしないけれども、世に謂はるゝ通り主として嗣子無き爲であつたらう。然し又或人が簡單に片附けるやうに大野心と見榮坊の爲めでもあつたらう。

奈翁が皇位に上る餘程前から、彼はヂョセフキンの腹には子供は生れないと云ふ事に諦めてゐたと云ふ。ヂョセフキンは自分の連れ子たるユーゼーヌを嗣子にと、都合の好い事を考へぬでも無かつた又他の連れ子たるオルタンスが奈翁の弟ルイ、ナポレオンに嫁して生れた幼兒を、奈翁が非常に可愛がるので、之こそ皇嗣にと吾も人も思つてゐたが、此幼兒は千八百七年に五歲で死んでしまつた。斯くの如くにして遂に奈翁の腦裡に何事かを考へさしめるに至つた。

ヂョセフキンが初めて自分の離婚と云ふ事に就ての暗影を感得したのは、奈翁がスペイン征討の爲め巴里を出立する前の一夕であつたと謂はれる。警察大臣フーシェは皇后を室の片隅に誘ひて、何でもない雜談の後、帝國の重要事項から皇帝の苦境に居ることを述べ皇后が之等の爲め私的愛情を犧牲にすること能はざるやを率直に尋ねた。皇后は尠からず驚いた風だつた。無禮であらう下れ。と云ふやうな譯でフーシェに退去を命じた。そして直ぐ奈翁の許に往つて大臣の行動は命に依るものか否かを問ひ尋ねた。皇帝は之を否認して甚だ不興氣な顏をして見せた。皇后は更に途方もない狼藉をしたフーシェの免職を迫つた。皇帝は其んな事は出來ぬといつた。ヂョセフインは侮辱されたと言つて口惜しがる。奈翁は默つて突立つてゐる。此の時よりぞヂョセフインは自己の運命に關する暗示を胸に懷くに至つたに違ひないと言はれる。

ヂョセフインは來てならぬ日が來そうで、今か今かとビクビクして暮すやうになつた。そして千八百九年十二月五日の晩、彼女は頓に生氣の無い靑さめた顏をして、奈翁の室から奈翁に連れられて出て來て、侍女達を驚かした。宣告の日が來たのである。超えて同月十五日、奈翁は樞密院を招集して國家に奉ずる爲め、總べての私情を犧牲にして、最も愛する妃を去らしむる旨宣告した。ヂョセフインも其處に現はれて、泣きの涙で承諾の意を表示した。樞密院は離婚を協賛するの決議を爲した。其の後數週間を經過するかしないか

の內に、奈翁は跡釜の皇后として墺國フランシス皇帝の女マリア、ルイザを申受けて居ることが明か

其の間に産れたのが奈翁三世である）即ち奈翁は子持ちの後家貴族夫人と一緒になつた譯である。男の内に、奈翁は跡釜の皇后として墺國フランシス皇帝の女マリア、ルイザを申受けて居ることが明かとなつた。翌年三月にマリア、ルイザは巴里に乘り込んで四月に花々しく婚禮の儀典を擧行した。時に新皇后は二十歳、奈翁は四十二歳、ヂョセフキンは四十八歳。

離婚となつたヂョセフキンは、一生涯皇后の名稱を許され年金二百萬フラン（後日奈翁は更に私財から數十萬を追加した）を當てがはれることになつたが、離婚は固より心中欲する所でなかつたので紅涙雨の如き哀愁裡にマルメゾン邸に引き下がつた。其の才に於て其の奈翁に盡したる活動振りに於て充分に認められたるヂョセフキンに對しては、油然として同情の聲が湧いた。婦人社會では『あんなに迫ひ出すなんて、今に御自分も不幸な目に會ひなさるわ』などと口八釜しい事だつた。ヂョセフキンは哀愁に心沈みながらも奈翁を慕ふの情息まず、彼が住んだ事のある室を其の儘にして、椅子一つ動かすことを許さなかつた。一方奈翁も必ずしもヂョセフキンを嫌惡した譯でもなく、又聊か心咎めもしたと見え、暫くの間は彼女を訪れ或日にはマリア、ルイザとの間に生れた幼兒羅馬王を携へたこともあつた。而して又奈翁はマリア、ルイザをしてヂョセフインに顔馴染たらしめんと努めたが駄目だつたので、終には自已のマルメゾン訪問を思ひ止まるに至つた斯くて時移り千八百十四年、奈翁の運命傾いて四月エルバに遷さるゝに至つたが、其翌月五月の廿九日ヂョセフキンはインフリュエンザで此世を去つた。臨終の際彼女は『ナポレヲン、ナポレヲン』と

も思つてゐたが、此幼兒は千八百七年に五歳で死んでしまつた。斯くの如くにして遂に奈翁の腦裡に二度繰返して息を引とつた。とマルメゾン陳列館の案内者が自分で見て居たやうな事を言つてゐた。

奈翁が後日セントヘレナで述懷せる所に依れば、彼は彼自身失墜の二原因の一に墺太利との緣組を擧げて居る。彼が虛榮と野心の爲に糟糠の妻を捨てたと云ふ事も、相當或人氣を傷けたらしいが、更に悪い事には新しい皇后の出身が敵役の墺太利皇室だといふ事が、少からず佛國内の心證を害したらしい。

其の後の政情や國際關係等は記述を略して、本稿の終結に急ぐ。奈翁は一度び機を得て千八百十五年三月エルバ島を飛び出して再擧を圖つたが、六月十八日ウォータルーに敗れて巴里に逃れ、廿二日退位を宣した。然し乍ら彼の身の上が其の後如何なるやら、想定もつかなかつたが、いづれは佛蘭西の地を去る外無き運命に立ち至つた。斯くて佛國の土地を永久に去らむとするとき、日を言へば六月の二十五日、彼は今はの御別れにマルメゾンに姿を現はし廿九日迄其處に逗留した。流石の英雄奈翁も敗殘の人として意氣揚らず、兵馬倥偬の疲れと八方塞がりの鬱陶しさを身に包んで茲に來たが、主なくして死の如く靜寂なる屋内に主なくして徒に荒れたる其の庭園に立つたとき、彼は幸福と光榮に輝ける過去の日を憶ふた。而も彼が胸に最も力强く迫つて來たのは

彌生會句集

（第七會）

朝鮮の小さき障子を洗ひけり　朴魯植
あだ花の多き絲瓜でありにけり　山本姚黃
甕積んでかゝれる舟や秋の川　北川左人
石臼く乾きたるあり秋の川　高田宇外
上げ潮に芦の葉摺れや雁の列　福島尙古
川の水黄なる障子を洗ひけり　安達綠童
洗ひたる障子一と先づはめにけり　安藤方子郎
秋の川濯き女去んで黄昏るゝ　大藤波天
鰲釣のこゝにもゐたり秋の川　河村素庵
朽舟のなかば沈みて秋の川　高木好夢
古障子朝の湯殿に洗ひけり　丹馬玄浪
岸草を掠めて速き秋の川　桑原蒼花
風呂桶の下は絲瓜の盛りかな　吉利陽村
漢江の洲のひろごりや雁の掉　山内九華

京城雜筆

言ふ迄もなく亡きヂョセフキンの思ひ出であつた。彼は彼女が植えた薔薇の樹の一叢の前に立つた。

『おゝ、可憐なるヂョセフキン！今にも彼女が小路を歩いて來て、最も好きだつた此の花を手折りそうに見える』、彼はつぶやいた。

奈翁は命じてヂョセフキンが永久の眠に就いた室を開かしめた。自分獨り中に入り戸を閉めて留まること暫時、而して出て來た彼の兩眼は溢れんばかりの涙で一杯であつた。天地靜寂、彼女が自分の名を繰り返して息を引取つた其の室に、唯獨り閉ぢ籠つて彼は何を感じたであらうか。

由來人間と云ふ動物は、全然孤獨の時は芝居氣は無いが、世間と云ふものに面するときは兎角芝居氣が出て、此の芝居氣が幾分かの程度で其の人の行動を支配する。奈翁に關する感激的史實として、戰敗れてエルバ島に赴くときのフオンテブロオ宮殿に於ける軍隊に對する訣別の辭の如き確に心を惹く。又よく畫に描いてあるセントヘレナに赴く途中海上佛國の海岸を見納めに見送る景の如き、之亦斷腸の思を想像せしめる。然し乍らよく考へると之等はいづれも奈翁をして世界の舞臺で振舞つて居ると云ふ事を認識せしめ乍らの所作であるやうな氣がする。ヂョセフキンの部屋に閉ぢ籠つた奈翁は觀て居る人は誰もゐない、自分で問ひ自分で答へる過去樣々の追憶覇業一度沒落して今や前途に光明を認めず虛榮も功名心も何も無い時、微塵の芝居氣も無く、又英雄業でも何でもなく、純眞にして幼のヂョセフキンに對したであらう從て彼の兩眼一杯の涙は蓋し一入間としての、腸から滲じみ出た熱い涙であらねばならぬ。

ヂョセフキンは格別の落度もなく、御釜の飯を焦げ附かした譯でもないのに、離緣となつたのである。自分は敢て世間の女房群の提灯を持ち、御先棒を擔く譯ではないが、之は奈翁の仕打に難點があらうと思ふ。多くの史家の評もそうだ。然し乍ら自分はマルメゾンを訪ね、ヂョセフキン臨終の室に佇立したとき、奈翁の名を繰り返し乍ら死んだヂョセフキンにも同情したが、同じ部屋で腸を絞つた涙の奈翁を憶ふたとき、必ずしも憎いとは思へず、『もうよしよし話は分つた』と慰めてやり度い氣になつて足を他へ運んだ。

◈耳から筆へ

漢江漁郎

○ツイこの間のことだ。齒科醫專の西山先生が、アノ瀟洒たる風采で、鮮銀前を通つてゐられると耳元近く、『あなた！どつかへお供しませうか』、玲瓏たる美音が天邊から降りて來たので、西山先生愕然としてあたりを見廻すと、『ホ、、此處ですよ、あたしですよ。何もそんなにビクツとする事はありませんよ。丁度お晝ですネ何處かへ參りませうか』、いひつつヂリツと肉体を押しつけて來たのは、歳の頃丁度廿七八、おぐむぐと御肥滿、頭こそ斷髮でないが三十年式の洋裝——そして面は二ノ丁、笑へばムツと口の臭いのが『エ、おイヤ……私のお供ぢやおイヤ……』と、グイと手をとつたので、西山先生滿面蒼白……

○『ど、どういたして、決して左樣な譯ぢやないが、本日は餘儀なき所用で他へ參るところ、けふのところは、平にゴ、御容赦…』（この邊どうもフルえて居られた容子）すると相手は、『ホホツ、マダおぼこなのネ。賴母しいワ。ぢや、今日は許して上げませう。但し名刺を頂戴ネ。この次は、四の五の、いひこなッしよ。判つて……ぢや別れませう。アバよ』

○西山先生息をハヅまして學校へ『アゝこわかつた。おそろしかつた。すると僕ア當分京城の町は歩けんのかナー』

○たしかに、ステッキガールといふものが、この町に棲息してゐるさうです。

× ×

○鐵道局の審査主任の鹿島さん事故係の淺見さん、いづれも五十近い半白組。

○だが、學問に年齡なく……どつちも法制學校に籍をおいて、夜な〳〵御通學。

○ところが、電車に乘る場合に學生乘車券（割引）を出すものだから、車掌がヂロ〳〵……學生券と頭の薄いところを、徐ろに比較對照。大抵一言……と來るさうです。

○御兩所もとより法律專攻の士理屈に於ては敢て閉口せんが、何分券と年齡とのヒラキに氣がもめて、思はず口をモガ〳〵。

○右の理由によつて、『薄いところが、尙ほ薄うなりますテ』……いかにも。

パンドーラの玉手箱

を悉く枯らすことに努むることゝなつた。

萬一パンドーラ姫の蓋をとづる

パンドーラの玉手箱

高橋濱吉
（總督府學務局）

開闢の昔天地を主宰した神ヂュピターは、靈山オリムパスの山巓に住ひ常に下界を照覽し給ふた。

ヂュピターは鑄物の神ヴアルカンを火山の工場より呼び寄せ、土塊を授けて女の形を造らしむ。ヴアルカン心をこめて造りしかば出來上りたる人形は美しき事限りなく、うつし世の彫塑などくらぶべくもあらず。ヂュピターは、ヴアルカンの手並を心より喜び、此の人形に生命を與へたのであつた。

ヂュピターが生命を與へたので他の神々は競ふて思ひ〳〵のものを與へた。即ちある神は美しき眉目を、ある神はよき聲を、ある神は典雅なる容姿を、ある神はやさしき心だてを、ある神はもろ〳〵の藝を、ある神は物ゆかしと思ふ心ばえを與へたのであつた。何一つ女としてかくるものがなかつたので、彼女はパンドーラと名付けられた。完全無欠、理想的乙女と言ふ意なるべきか。

ヂュピターは彼女を千里翼を有するマーキュリーに伴はしめて、プロミシュース兄弟の所に運ばしめた。

プロミシュースは洞中に寒さのため慄ひつゝある人々に如何にして身を暖め、如何にして火を造るべきかを懇に敎へ授けたるを初とし、百千の事を敎へ授けた恩人である。石と木とを用ひて家屋を造る事、蓄類を飼ひ馴らす事、耕耘及收穫の事、さては山を堀りて銅鐵を採る事、銅鐵を火熔にかして種々の器具を造ることなどを、それよりそれと敎へ、人間の生活をして芳醇ならしめた大恩人であつた。人々が口ずさみたる歌に

新しの黄金時代は來りける
古きそれより麗はしの
古きそれより優れたる。

然るに此の人間界の事ども、ヂュピターの眼に入り、怒ること限りなく、張本人たるプロミシュースを重き罪科に押し當てんとしたのであつた。ヂュピターの遠謀はパンドーラ姫を與へ、人々を元の如く疾病憂苦のドン底に押し落さんと企てたのである。

世に稀れなる美人パンドーラは人間界に下りて思ふ樣、たとひ大氣の神アシーナが堅く戒めてヂュピターより賜はりし玉手筐を開くべからずと云ひたりとも、よもや見ることさへ叶はざる品々をヂュピターの贈らるゝ謂れあらんやと遂に心あまりて姫は細目に蓋を開きて中を覗いたのであつた。

那の時早し、異樣の響筐の中に起り、躍り現はれしものゝ中に『疾病』『憂苦』などの妖精あり。しばらく一室の中をかけ廻りゐたりしに、遂には人の家々に周く移り棲はんとて、隙間より逃れ出でた。斯くて目には見えざれども今の世に到る迄男、女、さては嬰兒の體にも匐ひ入り人々の悅樂の根を悉く枯らすことゝなつた。

萬一パンドーラ姫の蓋をとづること尙ほ遲れたりせば『前知魔』も飛び出だしたるならんと云ふ。前知魔人間界に出でなば、人々は生るゝやたゞちに一代起るべき先々の事を詳に知り得、世から希望なるものゝ姿は全く消え失せたるべしと言ふ——ギリシヤ神話は斯く語る。浦島の玉手箱ならざるパンドーラの玉手筐こそ今の世にうらみ深きものではある。

◈本願寺の話

北漢山人

○富田儀作翁の追悼會の時には京城の佛敎各宗から、それ〳〵代表者が參列し、一緒に讀經をなし一緒に燒香をやつてゐた。

○スルト一三日過ぎて、某紙に『各宗の勢力爭ひは、實に見苦しい。富田翁の追悼會でも、西本願寺の代表と、東本願寺の代表とは燒香の先を爭ひ、總督總監の面前で、キタないところを露出した』と評してあつた。

○ところが、これが全くのヒガミで、佛式の始まる前、兩寺の代表は申合せて、『丁度燒香壇が左右二つあるから、兩人は同時に進拜致しませう』と約し、事實その通り實行したので、先を爭ふなどは全く根も葉もない事ださうだ。

○物は、見やうに由る。亦たとりやうに由る——

○ついでに、兩本願寺の若い人達は、もう遠から、聯合の懇親會?研究會?を、毎月開き來つてゐるといふことだ。

〔二〕

頭と足

市村秀志
（京城師範學校）

○先日足を怪我して、四五日跛を引いた。不自由な事たらない。それで始めて足の存在を知つた。そんな足で歩いて居たので思はず鴨居に頭をぶつけて、痛いのなんのつて。ハヽヽ俺にも頭があるなと悟つた。

これから足と頭を大事にしやうと決心した。

○スフインクスは頭が人間で眩が獸だ。然しこの頭と足が一体となつて居るので靜さがある。これがばらばらになると頭があつて足を忘れ、足と頭の喧嘩が始まる。そこに人生のごたごたが起る。これは免れ難き姿であらうが靜まる所がなくてはならぬ。スフインクスや馬頭觀音は寂滅安養の姿。斯るシンボルを有史以前に殘した埃及人も偉大なる哉。

○菊を十鉢ばかり人から貰つて育てゝきた。同じ手入れ、同じ肥料だのに小さく治るものもあれば大きく亂れるものもある。然しどれも菊だナーと云ふ趣きに變りはない。兎に角伸び伸びと個性を發揮して居るもの程普遍が生きて居る。特殊に生きて普遍を宿し、差別を現じて無差別をみる。これ實在の姿である。

【三】

善惡美醜は道德藝術の生るゝ所これに宿つてこれを忘れる所に慈悲の涙下る。價値は畢竟するに相對差別の相、却つて絶對無差別價値以前によつて甚定づけられる。

○奥穗高を攀ぢ、蟻の戸渡を渡る。右顧するも千仞の谷、左顧するも萬尺の谷。白道唯間髪を容るるのみ。一語なく、呼吸なく、一念の動きなし。過去未來正邪善惡の別あるなく、其の餘裕なし。人生また然るか。只默して南無阿彌陀佛。こゝに於て頭と足と一体となる。

◈銃獵風聞記

北漢山人

○大學の大塚（藤吉）先生は、銃獵がお好きで、また立派な銃をもつて居られる。

○ソコで、先生が朝早く獵に出懸けられやうとすると、女中さん『且那樣！、けふは、大獵でございませうネ』といふ。『どうして？』と反問すると、『でも、こんな立派な銃でございますからネ』先生これにはいつでも閉口頓首。

○さて、汽車に乘つて、郊野に出て見る。天高く氣清く、鴻雁半空を翱翔する。『ウーン、いゝ獵日和ぢや』、先生躍躍して、ズドンと一發放される。犬はおどり、鳥は、隊伍を亂す。されど、バタ〳〵と羽ばたきして、落ちて來るものは、一羽もない。犬は、且那樣に向つて、『またですか』と、悲しさうな顏をする。

○ソコで、いよ〳〵フン慨していよ〳〵亂發すると、ます〳〵當らざること夥しい。

○やがて、日落ち、秋風蕭索……歸心矢の如くなつて、京城へもどるが、女中さんの一言尙ほ耳朶にあり、悄然として家門をくぐることは、男子の一分として、まことに堪え難い。

○ソコで、先生の面を掩ひ、恥を包んで、訪問したのは、アノ南大門の市場！。つまり五十錢銀貨で、店頭に吊されたる代物を、失敬するの術である。

○先生の狩獵も、嗚呼また實に辛苦多しといはねばならぬ。

○尤も、以上は、少くも兩三年前の出來事で、今はもうそういふ必要はない。『ちやが』と先生は申される。『アノ風雪凄々の夕べ一鳥の獲物さへもなく、孤影蕭然市場に立つて、死鳥を求めた、昔日のこと……今思うても、冷汗が流れる。君、鐵砲も一人前になるには、ウフツ、人知れぬ辛酸があるよ』、そして先生は、始めてグツと匂ひ高い香茶を、一口嚥み下されました。

旗幟　纛
京城黄金町五丁目
龜屋旗店
電話本局一五八五番
振替京城四三八四番

船

ば、雌が雄に轉化する實例ありといふ。無理に檢微鏡下に性をつゝかずとも、男性の『聲』『丸』が

京城雜筆

船

山口三郎
（朝鮮郵船會社）

船頭と云ふと赤褌を聯想する、今日のキャプテンは司法警察權を握ってすばらしく權力のあるものだ。船頭と言はれてはおこるだらう。處で舊事記には『船長ハ天津羽原、舵取ハ天鷹、船子ハ天津眞浦トイフ』云々

日本で初めて、デイーゼル船を瀬戸内海に浮べた處、一向御客がつかぬ、朝鮮の河の渡舟ではあるまいし、軍箱の如く見えたのではと、煙突型の倉庫を作つて、やつと御難を免れた。人間のやってること大抵こんなものなり。

今日汽船と稱するも、已に時代遅れの代物なり、S. S. Taiyoなんて、ハイカッてゐたら笑はれる嘗てホスジャンプを、三段跳と名譯した程の誤譯中が寄つて、motor Ship 又は motorvessel を儲多船と迷譯したと云ふ。知新に過ぎたりといふべし。

朝鮮米や、魚油の積取に内鮮間四千噸の船を廻はさんず今の時世に、之は又太閤が御渡海用の千石船にも見る如き補助帆船が今日内鮮間の積取に從事し、汽船が劣敗者の地位に立たんとす。こと程左樣に、水火の責め苦にあるが今日の船問屋なり。儲多船を使ふ要あり。儲多船と譯したき念願あり。

建造費にこそ嵩め載貨、容量、乘組人員、燃料の節約、到底汽船の及ぶ處に非ず。

扨て、愈々本論……ノアの時代なら、只箱舟でも濟んだであらう處が素盞嗚尊が春川の牛頭山と出雲とを通はれた時代も追々經過して行くと、單に箱では相濟まぬ、一號二號では支那臭い（支那では北平丸のこを北平號）處で、應神天皇の御代に、伊豆の國に命じて舟を造らせられ、之を『枯野』と命名せられしが、抑々舟に名稱を與えた初めと言はれてゐる。降つて淳仁天皇の時に遣唐使乘用の二船播磨、速島――差詰め郵船商船で稱すれば H 級といふか――に從五位を授け給ひしと云ふ、物を人格化し、愛翫の意を込めたるによると云ふ可し。尚後世に至り、現在日本船の特徴たる丸の字を末尾に附加するに至る。

之を詮策して、支那（號）に起原ありとか秀吉時代（日本丸）に淵源するとか、或は封建時代の問屋（當時商人は無姓にして問屋は又の名を問丸ともいひし由）に始まれり等、異說紛々。

但し其眞なりと首肯せらるゝは丸は鷹なるが如く、男姓自稱の鷹が鷹がと云ひしが轉化して歌鷹、清鷹と末尾にくつゝき、更に之は人稱のみならず、膝切丸と云ふが如く刀劍に迄御伴することとなれりとの說なり。人には鷹、物には丸。回漕の起るにつれ所有者は船名の末尾につけて、今日では丸をつけるが殆んど信仰化せる容子。

今日の生物學者の說く處に依れば、雌が雄に轉化する實例ありといふ。無理に檢微鏡下に性をつゝかずとも、男性の『鷹』『丸』が女性たるべき船名に變化せるの確證は歴々。

依て『丸』の起原は鎌倉時代にあり、一般に用ひらるゝに至りたるは德川時代なりと推定す。

◈机を悲しむ

北漢山人

○高商の柴山教授は、とても生徒間に人望がある。皆曰く、『先生はえゝ人ぢや』

○然るに柴山教授は、殆んど終日研究室に籠つて、思惟、想念に凝中して居られる。生徒等心配して曰く、『あれぢや體を悪くする一体獨身といふのがよろしくないあゝ柴山先生に、家庭愛を知らせたい』

○ところで、その柴山先生が、今度内地へ賜暇旅行せられたので生徒等相慶して曰く、『オイいよ〳〵家庭愛が實現するんぢやと僕は思ふ。君の觀察は、どうだイ』『俺も實はさう思ふ。ぢやが、さうだとすると、コゝに一ツ可哀さうなものがある』、『何んぢやイそれは』、『アノ研究室の机ぢやもう先生の暖かい抱擁に接することが出來ぬと思へば、僕ァ實にアノ机が……』、『馬鹿ッ』

○兎に角柴山先生の人氣はスバらしい。

× ×

○山田新一氏、また帝展に入選（三度目）……但し御本尊は、今東京で、溝呂木道場で、厄氣となつて將棋道御修業中。

空を翳翔する。『ウーン、いゝ獵日和ぢや』、先生踟躇して、ズドンと一發放される。犬はおどり、鳥は、隊伍を亂す。されど、バタ〳〵と羽ばたきして、落ちて來る

敬するの術である。

○先生の狩獵も、嗚呼また實に辛苦多しといはねばならぬ。

○尤も、以上は、少くも兩三年前の出來事で、今はもうそういふ

旗
京城南大門
亀屋
本局
電話
振替京城

ナンセンス電車

金谷要作
（殖産銀行）

【二四】

週』なるものによつて、子供の御機嫌を奉仕する。『電車一週』とは中學洞から乘つて、光化門鍾路を經て中學洞に戻るのをいふ。

『どちらへ？』

『中學洞！』

『？……』

『子供が電車に乘りたがるものでネ』

子供『チン〳〵動きまあチュ、お父ウチャン、デンチャ面チろいナァ』

此の邊の呼吸さへ自然にやれば、我が愛す可き車掌君はO、Kの二つ返事で乘換切符に鋏を入れて呉れるであらう。

であるからといつて、電氣會社の課長さん！、我が愛す可き現業員諸君を叱つて下さるな。時には斯樣なナンセンスもあればこそ、現業員諸君も仕事にほゝえみをもつんだらうし、沿線の住民も深夜の軋音に腹も立たゝぬのだ。（五一〇、一二）

落しものゝ電車、といつても車中の遺失物の事では無い。電車が遺失されたのだから愉快だ。運轉手も車掌も居ない勿論乘客も無い大の電車がぽつねんと、京城市内の大道の眞中に取り落されて居るのだから愉快である。此の1930年の珍風景を觀賞し度くば、京城電車の安國洞線に來て見ればよい。

午前9時14分、我が愛す可き車掌並に運轉手兩君は悠然と紫煙を秋風になびかせて川端の共同便所で小用をたして御座る。

駛るものであればこそ徐々として居ると腹も立つが、落しものゝ電車に乘つたからには、欄間の廣告を一巨り讀んで終つて尙動き出す氣配なくとも腹は立たぬ。誠に愉快なるナンセンス電車である。

出勤時には子供等が電車を道に待構へ、お父さんいつてらつしやいと可愛い聲を張り上げる。親爺は徐行の窓からしつけいをして答禮する。夕時子供等がデッキの親爺を發見すれば、一齊に萬歲を叫んで電車めがけて突進して來る。誠に以て愉快な電車である。

細君に外出されて、むづかる子供を持て餘した親爺は、『電車一

◈漢江狐の話

三木一彦

○十月十一日、漢江々畔で、師團對抗演習のあるといふ朝、今本院長と一番ケ瀨院長とは、午前三時といふに御起床、觀戰のため人道橋方面へ御進發になりました。

○暗黑と寒冷との中に、ぢつと辛抱して、眼を皿にして四方を御睥睨になりますが、不思議や一兵も居らず。一發の銃聲さへ聽へません。『おかしいナー、さては漢江狐の仕業か』と、お尻をツネつて、感覺の正確さをお調べになるが、敢へて妖怪變化の仕業でもないらしい。

○とう〳〵早起きの起き損！とあきらめて、兩院長はスゴ〳〵御退却……もどり道には、格別寫眞機が重かつたさうです。

○以來兩院長は、『僕等の若い時分の演習は面白かつた。骨鳴り肉おどるの概があつた。ところが今の演習は何んだ。マルデ屁のやうだ。イヤ屁ほどの音もせんから情けない』、頻りに演習不味論を鼓吹せられる。

○或る人おかしく思ひ、よくよく兩先生の當夜の足どりを調べて見ると、ハハ、ナール……兩先生は、演習のない方へ、ない方へと行進され、ほんとの戰鬪は、それよりズーッと下流、唐人里といふところであつたと判つて『ハハー兩先生、これアやつぱり多少漢江狐が作用してゐますぜ。ェー』

× ×

○醫學博士になつた今村豊八氏は、それを機會に歐米を見て來やうと決心し、ツイこの間京城を發つた。

○變つた過去をもつた人である。醫者仲間には、珍らしい經歷の人である。三十頃までは、壯士といふか、志士といふか、兎に角支那問題を看板にして、政客の間を出沒してゐた。日露戰役の直前、參謀本部の命を受け、同志何十名かと滿州方面に潛入した。數年を支那で過した。それ故支那語は實にうまい。開業免狀は、その後獨學で贏ち得たものである。

方向が可笑しいとは思つたがたしかにこの路を前に通つたと云ふか

智異連峰の縱走

朴錫胤
（毎日申報副社長）

午后四時頃華嚴寺の正門前で自働車を乘り棄てた。いよ〳〵山の人となる。求禮郡守及び警察署長を始めとして頗る多人數。熊に襲はれる恐れがあるとてモーゼル拳銃を携帶するほどの物々しさ。失禮ながら山を解される方は先づゐない。ナーニ天王峰の頂上まで登れないこともあるまいと皆様おつしやる。落伍しやう等と思ふ人は一人もゐない。内心皆について來られては困るなと思つてゐた。

お寺で案内人、人夫、糧米等の準備が出來た。天王峰の登高を極めた人はこのお寺にも一人しかゐない。しかも一度登つた事があると云ふ。大分心細いが今の處この人をチーフガイドとする他方法がない。お寺の人々は頗る冷淡だ。澤山人が來ることだから一々親切にしておれないだろうがそうわざと高ぶることもあるまいと思つた。

一行は老姑壇に向つた、これが例の問題の西洋人別莊地である。その行程二里餘、先づ大抵の人はまゐるほど登りが急だとの話。これが屈竟な試驗場だと思つた。豫想にたがはず七時がうんと過ぎて目的地の老姑壇に着いた時には皆スツカリまゐつた樣だつた。中には椅子轎に乘つてやつと落伍を免れた人もゐた。山登りは思つたより苦しい、これが諸君の述懷である。明日皆ついて往くとは云はないだろうと思つてやつと安心した。

老姑壇はかなり急なスロープだつた、石造りの小屋が三四十軒もあろうか?、中央に一軒ホテルが建てゝある、西洋人以外には決して何人も泊めないと云ふ。それがホテルであり室が開いてゐる時でも泊めない等と云ふことに至つては誰が何んと云つても解釋に苦しむ。苦々しき限りだと思つた。

翌朝四時過ぎ起床、出發の仕度に取りかゝる。幸ひに豫定の人以外にはついてくるとは云はなかつた。一行六人である。

朝露にしつとりと濡れながら小一里も進んだ時に般若峰の麓についた。實に秀麗なピークである。この峰を境として全羅と慶尙が分れる。だから全羅道智異山と云ふも慶尙道智異山と云ふも共に當つてゐる。しかし最高峰が慶尙道にあることだけは知つてゐる人が澤山はゐない樣だ。

般若峰をよそに眺めてひたすらその夜の宿所帝釋堂に道を急いだしばらく道はなだらかな縱走峰の脊骨を上つたり下りたりした。谿谷は何れも密林に覆はれて見るからに森嚴である。朝から何うも天氣がからつとしない。雨模樣と云ふほどでもないがとかく霧がそこらへんをぶらついてゐる。熱のすつかり取れない病人の樣な氣がする。その内に案内の先生すつかり道路を間違へてしまつた。何うも方向が可笑しいとは思つたがたしかにこの路を前に通つたと云ふから不服〳〵ついて往つた。一つは天王峰が霧に閉されてゐたせいもある。早朝その偉容を拜んだきりずつと霧に隱れてゐた。三時間以上無駄足を運んだ。皆が一時にどつと疲れた。一番最初に人夫の一人が弱り出した。それから求禮の二青年は足が痛いと云ひ出した。それでも遮二無二前進した。

方向を取り直してから密林の中の小徑を昆根傳ひに進んだ、むしろ走つた。もう五時過ぎ、とても帝釋堂まで往かれそうもない。この時京都帝大學生の一隊に逢つた演習林に來て一ヶ月ばかりキャンプしてゐるとのこと、しばらくなつかしげに話した。

山でしかもこんな人跡未踏の仙境で人にばつたり出逢ふと實にうれしいものだ。一見直ぐ魂と魂で語り合ふ。そこに嘘がない。魂と魂とのタッチ!『小石平田』に着いた時には日がとつぷり暮れてゐた。

小石平田!、こんな壯快な場所は一寸見た事がない。周圍三里と云はれる一大平原!、極ゆるやかなスロープがついてゐるだけである。夏のキャムピンサイトとしては勿論スキー場としても恐らく天下の絶品だろうと信ずる。智異山の頂上近くにこんな壯大な所があるとは夢にも思はなかつた。昔から智異山の中には靑鶴洞があると云はれてゐる。傳說に依るとそこは龍を潛つて入ると云ひ、何千人かを容るゝに足る洞窟だと云ふ。で亂世の避難所だと云はれてゐる御鄭寧なことには家產を賣り飛ばして靑鶴洞戀しさにそこらへんをウロ〳〵訪ねあぐね乞人になつて

京城雜筆

故郷に御歸り遊ばされる御仁も少くないとの話だ。世の中には馬鹿な人もゐればゐるもので、この小石平田がその靑鶴洞ではないか、こゝは海拔六千尺、しかも周回三里の大平原、數千人はおろか數萬人だつて立派に生活が出來る所だしかも景色は絶佳、持つて來いの避難所ではないか、誰にもこの小石平田だけは是非御一見をお勸めする。實に壯快な所だ。

木を伐つて小屋を造つた。火を作つて寒さを凌ぎ、やつとその夜を明かした。翌朝五時出發、いよ〳〵頂上指して……草が延びて頭より高い、頭が上らない。露が雨と降る。靴の中が洪水だ。その時である、耳の中へ何う云ふはずみにか虫が入つた。それが羽ばたきしてあばれる。全く堪らない。いくらあせつても出て來ない。百計盡きてその耳を封鎖した。二時間後には死んだのか默つてしまつたしかし氣持が惡くてやりきれたものではない。

八時過ぎ絶頂に着いた、惜しいことには足下の山々が霧に閉ざされて眼界が少しも開けなかつた。いくら待つても晴れそうにもない仕方なく下りて來た。御多分に洩れずこの山もすべてが佛敎に因んで名が付けられてゐる。帝釋堂及び頂上の聖母祠の如きも勿論朝鮮民族の原始宗敎と關係があるとのことだが、今は佛敎に依つて解釋されてゐる樣だ。再び小石平田を賞し河東双溪寺指して下りた。そして難行を續け午后七時頃そのお寺の前に着いた。一つ驚いたことがある。それは七里の道を三里だと云ふことだ。それはうそではない、そこの山民はそう信じてゐるらしい。雨の中を二時間走つてから聞いても三里、三時間走つて聞いても相變らず三里だと云ふ。あきれた話だが先生たちはちやんとそう信じてござる。後で七里と分つて狐につまゝれてゐないことが證據立てられた。

二日で一寸二十里以上を歩いたことになるが大分無理であつた。その晩求禮に歸つて早速醫師に耳を診て貰つた。むやみにつゝき廻はす。痛くて堪らない。しかも虫などゐないと云ふ。べらぼうに痛い思ひをしたゞけ損をした。それでも氣持が惡いから南原でも早速病院にかけつけた。やはり痛くつゝく。血が出る。横面をはりたい位痛い。虫は出ない。京城に來て又病院に走つた。虫の死骸は直ぐ出て來た。痛くも何んともない。しかもとんでもない所をめちやくちやにかき廻はして耳の中の方々に生傷を作つたと云ふ。藪醫師人を殺すとはこのことか?。

都鳥
烏割
水
烹焚
旭町一丁目
電本三三六六

◈醫界風聞記

北漢山人

○元山の山川病院長が入京して池田院長（南山町）を御招待したいといふ。場所は、千代本である

○池田院長俥に乘つて出向いたが、途中で山川院長に、五六人も子供のあることを思ひ出し、土產に贈らうと思つて、三越へ寄つて花響、リボン、文房具、下駄（總て女兒のものばかり）俥の蹴込みに山のやうに買ひとり、『オーイ俥屋！急げ〳〵』

○さて、千代本へ着きました。双方の御挨拶よろしくあつて、酒ひとめぐり、池田院長曰く、『あんたとこは、五六人お小さいのがあつたネ』、『あ、さうです、ウヨ〳〵してゐます』、『少しばかりお土產に買つて來た。お邪間だらうが、是非持つて行つてくれ給へ』、『ハア、さうか。それは〳〵』、この時仲居が例の花響等々を、山盛りにして捧げて來る。

○藝妓等そのうつくしさに感嘆して、『あら、まあキレイ……』

○獨り山川院長のみは、これを見ると、おぼへず手にした杯をポタリと落す。そして『ウ、ウーン』と一醫唸る。

○急病ではないかと、一座心配して問へば、『イヤさうぢやアない。さうぢやないが、ワシとこはあいにく女の子は一人もなく、全部そろツて野郎ばかり、御親切は忝けないが、これア頂いたも同然！』に、今度は池田院長『ウーン左樣か〳〵、それならそれと、ナゼ早く申告せん。トカク田舍者はグス〳〵するので、ワシヤいつもスカを喰ふ』

るやうにありたいと。

王者慶應敗る丶夕

神宮外苑の秋は今酣に、六大學

品川雜記

品川雜記

中島司
（中央朝鮮協會）

武人と金錢

昔、伏見の城中に諸大名あまた並み居たる時、伊達政宗が懷中から一枚の金錢を取り出して『これが當今珍らしい通寶でござるぞ』と一座の諸侯に示した。何れも金錢といふものを親しく手にとつて見たことのない大名達のこととて『ハハア、これが通寶といふものでござるか、成るほど珍らしいものでござる』と、銘々に手のひらに載せて珍觀した。其時末座に直江山城守兼續が居た。手から手と順々に廻つて來た通寶を彼は扇子を披らいて受け、恰度女の子が羽子板をつくやうに、扇子の上で通寶を打ち返して裏表を一見に及んだ。それを見て居た政宗が『イヤ山城殿、苦しうない、手にとつて見られよ』と言ひも終らぬに、山城守は『拙者謙信に仕へし頃より先陣の下知して采配を執り申した此の手に、かやうな賤しき物を觸れ申しては、此の手が汚れまするので』と劍もホロロの態度で、扇上の錢をポンと政宗の方へ投げ返した。これは『常山紀談』に載つて居る話だ。

直江山城のやうに觸つただけでも手が汚れると思ふのも極端だが先づ以て武士は此の位の心掛けでありたいものだ。目下裁判中である所の朝鮮疑獄は、何しろ陸軍大將前朝鮮總督山梨半造閣下と金錢との問題である事に於て世も澆季の嘆に堪えないものがある。法網に觸れて罪になるかならぬかは問題ではない。苟くも陸軍大將であり、朝鮮總督といふ顯要の地位に在りながら、濫りに政治慾に驅られ不當に金錢を欲して鷄鳴狗盜の輩に誤まられ、國軍の名譽を毀損し、朝鮮統治史上に汚點を印したる事は、法罪となるとならぬとに關せず、道德上其の罪萬死に値するものだ。昔の武士は衆人稠座の中で嗤はれる事を死以上の苦痛とした。山梨大將たる者、何の顏色ありてか白日の下法廷に立ち得るものぞ。

自から顧みて心中疾しい所はない、靑天白日の身となつて不明を天下に謝する積りと、彼は言つて居るさうである。素よりさうなくてはなるまい。審理公判の結果山梨大將は決して惡人ではなかつた寧ろ善人であつたといふ事になつて欲しい。軍人の光榮のために總督の名譽のために切に之を冀ふ。而して愈々無罪とでもなつた際に位階勳等一切の榮譽を辭して山澤に隱遯してしまつたら立派なものだ。彼れ或はその心であるかも知れない。さもなくて萬一身の潔白を誇るやうな態度であつたら、言語同斷沙汰の限りだ。況んや有罪となるに於てをやだ。

今更ながら痛切に思ふ。軍人は金錢に淡白に、公人は名譽に殉するやうにありたいと。

王者慶應敗るゝ夕

神宮外苑の秋は今酣に、六大學野球リーグ戰は之よりAクラス同士の對抗爭覇戰に入らむとしつゝある。今季法政の猛勇振りは、實まじくもまた恐るべき有樣だ。彼等は强豪明治をストレートで屠り更に王者慶應を同じくストレートで斃し去つた。さうして一勝一敗の早稻田と將に決勝の一戰に勇躍して居る。野球には運不運があるが、今日の法政は素晴らしい實力を帶び來つて、明治慶應との力戰は堂々勝つべくして勝つたかの觀がある。慶明早のAクラス陣營は此の闖入者の前に大動搖大不安を來たして居る。

十月六日、此法政が慶應と第二回戰を行ふの日、私は餘りの人氣に喫かされて、後れ走せに神宮球場へ行つて見た。何といふ驚くべきファンの殺到ぶりであらう。內野と云はず外野と云はず、立錐の地なき滿員で、辛うじて入場し得ても、私は芝生の最後方に爪立つて、群衆の肩越しに隱顯するグラウンドを覗き見て滿足するの外はなかつた。前日六對三で一敗を喫した覇者慶應にとつて、今日こそは石に嚙りついても勝たねばならぬ大事の試合だ。必勝の意氣に燃ゆる慶應と、破竹の勢に乘る法政と果してどんな試合をするか、正にファンにとりて百パーセントの興味だ。

慶應はベストメムバアを以て臨んで居た。私が行つた時二回の裏法政の攻擊中で初回すでに法政一擊三點を先取し、慶應一點を返し此回法政又一點を收めて三點をリードした所であつた。さては法政

【二七】

かある。それは七里の道を三里だと云ふことだ。それはうそではない、そこの山民はそう信じてゐるらしい。雨の中を二時間走つてかひとめぐり、池田院長曰く、『あんたとこは、五六人お小さいのがあつたネ』、『あ、さうです、ウヨ〳〵してゐます』、『少しばか左樣か〳〵、それならそれと、ナゼ早く申告せん。トカク田舍者はグス〳〵するので、ワシヤいつもスカを喰ふ』

京城雜筆

いよいよ猛威を逞しうしてるなと聊か私も呆れたことである。然るに五回に入つて慶應が安打集中で三點を占め兩者同點となつた。さあ大變だ。球場は息づまる緊張と白熱の期待にただならぬ空氣が渦卷いて、接戰又接戰、龍攘虎搏の大試合に、觀衆が茫然と見惚れて居るうちに、補回戰となり、接戰實に十二合、夕日はすでに沈んでしまつて、蒼然たる暮色はグラウントに這ひ寄つて居た。慶法兩者は死力を盡して一點を爭ふた。その貴重な光輝ある一點は、打者蒔井の痛打に依て完全に法政の獲得する所となり、五A對四でさしもの慶應、再び敗れて、王者の陣營悲風慘たるの觀があつた。

野球狂時代は女の世界にも驚ろくべき多數のファンを出しつゝある。此の節の神宮球場は百花爛漫香氣馥郁たる有樣だ。殊に慶應チームの出る日が一番女性ファンで賑はうやうだ。よい傾向か惡い現象かは知らないが、兎に角一般に婦人の見物が恐ろしく盛んになつて來た。慶法二回戰の時なども、三塁側即ち慶應のベンチ側のスタンドは紅紫青綠色とりどりの美くしさつたらなかつた。ところがだ慶應が負けたのである。その瞬間色を失なつた慶應側のスタンドの姿こそ、物の哀れと申すもおろかなりける次第であつた。文明の花咲き誇り、榮華を極めし羅馬の都に、馬蹄黃塵を蹴りて蠻族襲來、惑に蹂躙すると云つた感じを抱いて、私は黃昏の神宮外苑を去つた

（十月九日記）

初秋

市山盛雄

たまさかに來る錢湯のうれしさか吾子はしきりにはしやぎてゐる

錢湯に子らつれゆくとうすぐらき路地を曲れば秋虫のこえ

足音をたつればここな蟇蛙葉壯丹のかげに逃げこみにけり

のそのそと葉壯丹のかげゆ蟇蛙歩み出で來るわがとどまれば

電燈のあかりにとびくる生きものの蠻蛮を捕らむと蟇のうごかず

【二八】

◈米倉町閑話

漢江漁郎

○忠南で農場經營などをやつてる人に、竹崎季雄氏といふがある例の竹崎順子の孫に當る人だ。

○血統が血統だけに、いつまでも肥桶を擔いでは居られぬ。近ごろは農業兼國士樂といふのを開業し、チョイ〳〵間鳩や、北滿地方に出沒する。

○ツイこの頃も、間鳩からの戻りに京城へ立寄つた。そして從兄弟に當る工藤擔雪氏のところへ顏を出し、約半日に亘り憂時慨世談をブッ放した。醫者こそして居れその方は大好物の工藤氏、一膝も二膝も乘り出し、しまいには邦家のために、東洋諸民族のために、兩人は相抱いて泣くといふところまで徹底した。

○その翌朝になると、村上旅館といふ宿屋から、『へイ、よろしく御願ひ申しやす』、何事だらうと封書を開けて見ると、例の季雄氏の筆蹟——尤もゴ當人は、もう出發後——『この際邦家のため二三萬金出資してもらいたいと思ふが、それはまア次の機會に讓る。今回は取敢へずコヽの宿料××圓也をとり替へ置かれたし。これ亦東洋諸民族のためなり。夢、疑ひ給ふな……』

○院長茫然たること半時、『オーイ（夫人に）面目次第もない』

ものを觀る。二十二日は漁大津、二十三日は城津を訪問して歸城の筈（九、二二、未乙千歳館二〇

朱乙から

朱乙から

野崎眞三
（朝鮮新聞社）

松本武正詞兄

豫ねてから御無沙汰の御詫と原稿催促の穴埋にでもして頂かうと云ふ蟲のよい此便を差上げる筆無精を御宥し下さい。

十九日夜同業三名と共に京城驛を出發、咸鏡北道水産狀況視察の旅に出ました。三防あたりで二十日の黎明を迎へ車窓から秋の風光を滿喫しつゝ一路咸鏡線を北上しました、平野部は豊穣の秋、稻の垂穗が重々しく黍の赤黑い穗は和風に搖ぎもしない。赤牛に乘つた牧童の草笛も秋の一添景であろう

◇

山間部は野菊、桔梗等々彩美しき秋草が咲き亂れ溪流には奔湍が巖を嚙んで雪と碎ける、遠く眼を放つと一碧淸澄の秋空に續く濃紺の日本海は鏡の如く輝いてゐる。秋は正に酣で嘆賞すべき秋色は山河に溢れ詩人ならぬ私にさへ何となく詩情を唆る。窓外から端川邑内が眺められると最う端川事件と云つた血腥い騷擾の思出が新聞記者らしく浮び、詩情なぞ此尖鋭な職業意識が一蹴してしまふのは困つたものだ。城津驛頭には舊知の重野郡守を始め支面長其他官民多數の御出迎があり恐縮する。歸途を約して再び車上の人となり午後八時十分朱乙驛着、下車するとヤアと北鮮日日の河村君が居る、舊知の下村警察部長と手を握り態々夜中出迎の産業課長、鏡城郡守、朱乙面長等に御禮を申上げた。

◇

困つた事は同行のA君が途中から吐瀉して眞ッ宵になる、車掌さんから貰つた胃散を勸め漸く落付いたので驛から直に千歲館に急行した。偶々入院診療の軍醫さんに取敢へず往訪を乞ふと右下腹部の疼痛と症情が盲腸炎だ。親切な軍醫の手當で食鹽注射五百瓦、カンフル注射等々最善の手當を盡し女中さん達は額を冷やす、幸にして經過は良好ながら絶對安靜の必要から翌朝から或は羅南衞戍病院へ輦まうとさへ衆議が一決した。親切な軍醫も盲腸の手術をしたと云ふ、宿の女中さんにも盲腸を切開した人が居る、何だか盲腸は誰も一度は襲はれる病氣なのかも知れない、右の下腹部がキリ〳〵痛むは盲腸だと脅されるので私自身も痛むやうな氣がして下村警察部長などが心盡しの會食も元氣が出なかつたのは自分ながら莫迦々々しかつた。

◇

溫泉の里の朱乙の秋は誠に美しい、最う雜木紅葉が燒け付くやうに爛れてゐる、溪流は淙々として流れ大自然の美しい施律が都會人の神經を包む。秋草、鮎、松茸、すべて秋の快さを滿喫しつゝ詞兄の御健祥を祈つてゐる。二十一日夜朱乙から自動車で羅南を訪問してから淸津に出て蟹工船とか云ふものを觀る。二十二日は漁大津、二十三日は城津を訪問して歸城の筈（九、二一、朱乙千歲館にて）

◈松峴洞閑話

北漢山人

○殖銀の矢鍋さんのお孃さんは女子大學家政科に在學して居られる。

○今年の夏、暑休でもどられた時、お父ぅ樣の寫眞を撮影され、東京へ行かれて後、それを現像して送つて來られた。

○それを當のお父ぅ樣が御覽になると、いかにもムッツリしてゐる。愛嬌がない。『オイ〳〵、俺はこんなにムーッとしてゐるか。チトひどいやうぢや……』奥樣にそう御相談になるが、奥樣は、別段御共鳴の容子はなく、『さうですネ、まア子供達に見せて御覽なさい』

○ソコで、晩餐の折、『どうだイ、お父ぅさんは、これで中々の愛嬌者なのに、この寫眞は、とてもムッとしてゐるネ』といはれると、お子さん達手ン手に御覽になつて、『あら、そんなことはないワ。いきうつしよ。全く……』、『ホー、するとお父ぅさんは、隨分ムッツリ屋だネ』、すると『エ、そうよ、松峴洞ひろしといへども、その方ではネ』

○お父ぅ樣、意氣悉く銷沈……

○『だが、鏡で見てみると、これでお父ぅさんは、いつもニコニコしてゐるが……』といはれるとお子さん達つゝき合つて、『アラ〳〵……うちのお父ぅ樣、ワリにうぬ惚が強いのネ』

電燈のあかりにとびくる生きものの蝶蛞を捕らむと蟇のうごかず

也をとり替へ置かれたし。これ亦東洋諸民族のためなり。夢、疑ひ給ふな……』

○院長茫然たること半時、『オーイ（夫人に）面目次第もない』

いつの間に

眞能義彦
（京城醫專）

ながめせしまにとかこたるゝもの唯に花の色のみではない。過去をふり返つて見ると、大概總てが、いつの間にか經ち、いつの間に成つて終つてゐる

いつの間にか夫になり、いつの間にか父になり、いつ間にか初老を越し、いつの間にか角力を取つても子供等に勝てなく成るなど世間普通の事であつて特筆するには足りないが、いつの間に豫想とかくもかけ離れた、やくざな人間に成つて終つたらうと考へると、流石に感慨深からざるを得ない次第である。

過去何十年の間に何回かはこれではならぬと舵取直した記憶もうす〳〵はあるが、其他の大部分は、事情にせかれつ、境遇に壓がれつ、浪のまにまにあてども無く、流れ流れて今日に至つた譯である。青春時代の潑剌たる抱負に比べると、精神力のうつり行く樣こそ、花の色にもまして激しい。

今多分に所持してゐる、色々な悪習慣を顧ると、此又いつの間に、と云ふ感じが深い。酒、煙草、朝寢、ぐつたら、ほうらち、ぐづ其他數へ來れば枚擧に遑のない悪癖が、いつ誰に指導されたと云ふ記憶は殆んど無くて、いつの間にやら見覺え聞習つて、いつの間にやら拔く可からざる根據を自分の牙城に占めて居る。『いつの間にか』は實に怪物である。反省の歩哨のまなこを、習慣の煙幕でごまかして、いつの間にか本陣に忍び込む怪賊である。

天分の豐かな人には此の反對に、いつの間にか上手になつたとか、いつのまにか完成したとか、又はいつの間にか榮達したとか云ふ事もある譯だが、天分に拙い自分には、そうした經驗が殆んど無いと云つてもよい程である。金に運の無い自分の經濟も此の例にもれない。

まだ有る有ると思つて居つて居る内に、いつの間にか財布の底はからとなつてゐる。そんな筈は無いと思つて、色々と費つた費用を考へ出して見るとどうやら落したのでも、拂ひそこないをしたのでも無い事が判明する。生涯の方針に豫算の無かつたやうに、私の家計にも豫算が無かつた。

然し私は人間に自惚のあることを此の上も無く有難く思ふ。友人がぽつりぽつり死んで行く。然し私だけは死なないものと信じてゐるので天下太平である。過去の夢の殘骸を眺めたら、將來は恐らく絶望の淵に立つ外は無いのであるが、幸なことには、年を取つてもいつも夢と自惚に生きてゐる。

樂しい事もいつの間にか過ぎて行くかはりに、苦しい事もいつの間にか消え去つて行く。そして若し冷靜に考へたら誠にはかない將來にちがい無いのであるが、自己愛着の執心から立ち上る蜃氣樓には、猶色々と誘惑の色彩濃やかに、『いつかはいつかは』と、將來に對しては『いつの間に』の失望を全く忘れて居るのは嬉しい事だ。

車中問答

小川書記官　××君（甲記者に）君は、此の米を賣つて行くかネ、買ふかネ

車中問答

小川書記官と相場

別府八百吉

（京城日日新聞社）

清州行の車中、穀物大會に出席せんとする官人、松村局長、小川拓務書記官、湯村農務課長、石塚、吉池兩技師その他、新聞記者二三……

十月八日午后四時四十分京城發窓外の黄熟近き稻田は、絶好の秋日和に照り込まれてゐる、誰れもが大豊作、米安、農村の疲弊、そんな事で頭は一杯になつてゐる。

甲記者　局長、例の本府の粗三百萬石の金融立案、その誕生となつた集會所の官民有力者懇談會――一回豫想發表の數日前――あそこであなたは、千九百萬石臺といふ事を示したですか。

局長　收獲豫想の數字が多いとは云つたが、數字には全然ふれませんよ。

甲記者　所が、色々の問答の内に、千九百萬石臺突破といふ口吻が、あなた方の口から明らかに洩れたさうですよ、私はその晩の宴會で出席者の一人から聞きましたが……

局長　そこの所が焦點ですからナー、そこを推知しやうとねらつてゐた人があつたのでしやう、又多くなければあんな相談はしませんからネー

小川書記官　イヤ、あの數子には驚いたよ、東京で農務課の技師に聞くと、マア千七百萬石臺だらうといふ事だつた、然るに電報は千九百二十餘萬石、僕は初め電報の數字の誤まりかと思つた、夫れにまた農林省の六千六百萬石臺の發表だ――朝鮮の數字の漏洩如何は知らぬが、内地の六千六百萬石は、その日の朝から傳へられてゐたネ

記者　夫れにしては、その日の東京大阪の期米相場人が平凡だつた！政府の役人が知つてゐた程度か知ら……

小川書記官　……

湯村農務課長　僕も朝鮮の豫想數字には驚いたよ、コイツは苦勞ものだと思ふと頭をガーンと毆られたやうな氣がした、そして引續いて苦勞してゐるがネ

石塚技師　二年續いた旱魃凶作、夫れで地力の余裕が著しかつた、慶尚南北兩道の十割近い增收はその好適例で、今年は實際山の上まで米ができた。

小川書記官　調君全北はどうかネ

調全北農北課長　豫想二百四十萬石ですから、未曾有の數字、水害地もあつたが、問題になりません、それに今年は水利組合の蒙利地よりも天畓がよく出來た、そこに此米安は色々の問題を孕みますよ

小川書記官　××君（甲記者に）君は、此の米を賣つて行くかネ、買ふかネ

甲記者　剩るもの安しだ、賣つて行くのが常識で、マダ安値があるだらうとも思ふ

小川書記官　俺は强氣だネ、絶對カイだ、仁川定期の十二圓臺に賣り余地があるものか、政府は迚もほつて置かぬよ、强氣一貫で行くべしだ、或は人氣の關係で安値があるかも知れぬ、然しそこは難秤（ナンピン）に買ひ均らして仕込むのさ、タトヘ十圓われがあつても二圓かそこらでないか、大阪の吉村が何十萬石か賣玉をもちまだ賣るといふ事だが、奴は顎差（アゴザシ――賣つてゐて相場が上り、買ひ戻して損する事）にあふよ、吉村は大玉を賣つて最近の大混亂に際し總解合（トケアイ、賣買取組を解く事）に應じないナンテ、相場道から排すべき奴だ……（頻りに妥當な專問語を連發する）

甲記者　之れは驚いた、小川課長が相場用語を活用するとは驚いた、米の百石もやつたといふわけか知ら、アハ、、、

乙記者　ナルホドねへ……相場用語の單語を研究した譯ですか

石塚技師　本を見ただけの單語の研究では分るまいネ

小川課長　アッハ、、俺が相場を知つてゐるのは、大に曰く因緣があるよ、内地から關東廳に行つて殖産商事方面を擔任したのさ何にも知らんのだらう、その時大連では金建銀建問題が沸騰してゐたよ、俺の所に來る銀行員や、特産商や、取引所關係者が盛んに專問用語を使ふ、俺は支那語を聞くやうなものさ、正直なところ皆目

れたと云ふ記憶は殆んど無くて、いつの間にやら見覺え聞習つて、いつの間にやら拔く可からざる根據を自分の牙

やかに、『いつかはいつかは』と、將來に對しては『いつの間に』の失望を全く忘れて居るのは嬉しい事だ。

京城雜筆

見當つかず躓つたよ、そこで一生懸命に此の頭を研究した、つまりは飯のためだからネ……

甲記者　銀の賣買を、その時若干やつたといふわけではないかネ

小川書記官　マサカ監督官がそんな事は出來まいではないか、然し夫れから相場の事はすつかり分つてゐる、××君など俺を馬鹿にしたつて駄目だぞ

甲記者　恐れ入りました（一同哄笑、松村局長はコクリ〳〵と船を漕いでゐる、或は眠れる風をして論議の渦中に入るのを避けたかも知れぬ）

甲記者　米相場が暴騰した時岡牛老や、增貫などが、政府から警告された、此の農村經濟を破壞せんとする米安、夫れにまだ更に賣りまくる吉村を、齊藤久太郎君の所謂暴損取締令で、賣り遠慮の警告をしたらどうだらう

石塚技師　安くするのを禁ずるといふのは怎うかナ

小川書記官　君、商行爲に權力行使はいかんよ……

甲記者　しかし、米穀法は國家權力の商行爲出動でないか、籾の金融にしても、米安頽勢に對する一種の權力行使と思ふ

小川書記官　夫れは違ふ……

湯村課長　權力行使、そんな風にとられるのは困る、我々の目標は不當な安値に落下せんとする米價を不當な相場からすくはんとするにある

甲記者　湯村さん、籾の金融普及は當面の方策として好いでしやう、然し本日の發表（その日に本府は對策を發表した）を見ますと、金融を受け得るものは地主や組合であつて、中農以下に、どれだけ本府の計劃する金融普及の惠澤が及ぶでしやうか、出來秋の投げウリ、あなた方が恐れる安値濫賣は、小作人――大多數の小作人の籾ですよ

湯村課長　その點は全感ですが、好い方法がありますか、伺ひたいものだ……（と逆襲）

甲記者　僕に名案はない、だが、あなた方は四十何人も、會議所にあつまつて、二日間案をねつたのだから、文珠以上の智惠が出たでしやうにネ……マア僕は金融組合の活動に期待したいとも思ふが、御發表によると、組合の活動範圍は小さいじやありませんか。

湯村課長　金融組合は、人事の配置が少く、色々の業務上の制限があつて、我々も實は期待はづれになりました、あれ以上は出來ぬのですよ

吉池技師　小農の籾は農業倉庫にドシ〳〵依托させますよ

甲記者　いくつ倉庫が出來ますか、ドシ〳〵依托すべく小農の數は夥しく多すぎるし、又夥しく地域が廣すぎますよ……

× ×

十月九日正午近く、淸州櫻馬場の公園地、穀物大會會場、大阪東京期米が、前日より約一間高の電報掲示、夫れをふり返りふり返り見てゐた小川書記官、座を起つて記者席に來る

小川書記官　××君、ウフ……どうだ、俺のいふ通り暴騰だ、參つたか、ウフ……絕對（此の絕對を強く發音する）ナンピンカイの米だぞ

甲記者　……（彼は常通へ大會の電報を賴まれ、又その屬する新聞に記事を書くべく忙しい）

小川書記官　……破顏しつつ柔道で鍛へた、頑固な石のやうな身體を、モーニングに包んでその自席に去る。

◈思ひ出の記

北漢山人

○赤池濃氏が、警務局長の頃、一夕支那領事を某旗亭に招待しました。

○そして、とり持ち役として、藤原喜藏、田中武雄の兩氏を煩はしました。

○酒三行、主客漸く陶然たる頃局長は、『さア田中君、一つ唄つてくれ給へ』といふ。田中氏奉仕的精神を起して、磯節を唄ひかゝると、局長俄かに、『あゝコレ……ヘエン〳〵』、大きな咳拂をして、出端を挫いてしまふ。

○今度は、『藤原君やれ』といふから、藤原氏特別のツボを押えて、大に美聲を發揮せんとすると局長あわてゝ、『ア、これ〳〵……エヘン、オホン』、またも藝術の尖端をヘシ折つてしまふ。

○兩氏頗る不平！領事の辭去したるを幸ひ、『局長！今日はどうしたんです。あんな風に我々の藝術を侮辱されては、エヘン我々といへども、心中甚だ……』とつめ寄すると、局長『さアそこぢや。兩君お客樣を誰と思ふ。支那のお方ぢや。それに田中君といひ、藤原君といひ、人一倍聲が大きいのに題材もあらうに、いきなり『船はチヤンコロ』とは、こりやどうぢや。さてまた、『四百四州を丸呑みに』とは、情けない。少しはあるじ側の拙者の身にもなつてくれ』に、御兩所『ダ――……』

と、金融を受け得るものは地主や組合であつて、中農以下に、どれ

食の管轄を賴まれ、又その屬する新聞に記事を書くべく忙しい。

小川書記官　……破顔しつつ

呑みに』とは、情けない。少しは、あるじ側の拙者の身にもなつてくれ』に、御兩所『ダー……』

御料理

お座敷金婦羅

川長

旭町一丁目

最尖端を行く
明るく靜かな
カフエー
アルプス
京城本町二丁目
（山本旅館前）

外科
皮膚科
瀨戸醫院
院長 瀨戸潔
京城旭町二ノ八
電話本局二四九八番

お二人で一つの保險に
はいれる然も保險料は
普通の一人分餘ですむ
二人保險
東洋生命京城支店
一萬圓契約で八千五百
圓の現金定期配當の外
に普通配當がつきます
不老保險

茶いろ〜
茶器いろ〜
青々園茶舗
京城本町二丁目
（電話本局一一一一番）

M式卷上日覆
ホロ形日覆
各種テント
踏車用雨覆
非常袋
フトン袋
其他帆布製品
製作販賣
京城驛前
中西テント商會
電本二八四八

京城永樂町二

金物類

京城永樂町二
酒井婦人病院
院長 酒井一郎
（電話本局一八番）

京城本町二丁目
一番瀨醫院
院長 一番瀨慶次郎
（電話本四〇〇五番）

醫療器械
並に新藥
株式會社 後藤風雲堂
京城出張所
（京城南大門通三）

金物類
近藤商店
京城本町三ノ三三
電話本局一五六二番

明治町二ノ七五
利根川齒科
院長 利根川清治郎
（電話本局二八六七番）

に普通配當がつきます

秋、都門に入る
月よし、魚よし
蔬菜よし、一杯
の『福迎』最も
人によろし。

京城雜筆八月號唎酒評に曰く

三木　三村君『福迎』はどうです。
三村　京城から出て居る三點の中では一番味、香兩方共よいやうに思ひました。
三木　甲といふ譯だな。
三村　さうです。
山田　口に入れて嚙みしめておれば、あとでよい感じがしますが、口に入れた時分は他の酒と異つた味を感じました。香は相當いゝ酒だと思ひます。
鎌田　香も味もマコトにくせのないよい酒でせうな。

常用酒として『福迎』を愛用せらるゝことは、第一經濟であり、第二氣分を爽快にし、第三健康長壽の基

京城本町（電車終點）
難波酒造場
電話　本局一四六一　光化門一一四五番

隨筆七題

（承前）

縮の最高潮時代に當り殊に女性内助の必要があると思ふ。（五、九十四日）

隨筆七題

（承前）

木塚常三
（竹添町）

天眼の蝮酒

上來消極的に聞へる話ばかりで性來陽氣の僕自身にも餘り心持良くない、最後に一ッ元氣な一節を加へてパッとしよう。

本年五月二十五日神奈川縣鶴見總持寺に於て故鈴木天眼氏五週年忌、故中野天門氏三週年忌法要が執行された、其席上、秋山定輔氏の鈴木天眼氏に就ての追懷談中に飯田町の天眼の處へ行つて見ると、肴物も碌々無い、唯見ると天眼君は濱縮緬の大きな兵古帶を締めて居る、恥かしい譯ですが、其時分に紙一連が二圓四五十錢だつたと思ひますが、其兵古帶があると紙が一連買へるがナーと見て居つた、そうすると貴公（秋山氏の事）何だか俺の之を狙つて居るなー之を遣ろうおいもう心配するな、心配するな、月給が遣れないで誰れ一人居なくなつても俺一人で書く丈け書くから心配するな、俺の是（濱縮緬）に眼が着く樣になつては……斯う云ふのです、私は『うん』と云ひながら泣く譯に行かず……天眼を思ふ時には何時も其を念ふ、斯る時、斯る立場に立つた時、此一人の眞心は實に百萬の援兵を得たよりも難有いものでありました、果して口許りでなく編輯を遣つて呉れたのです、燒酎か何かに蝮を入れたものを、私等は中國もので何だか汚ならしいやうに思ひましたが、天眼は其れを机の上に置きチビリ〳〵飲みながら毎日々々書きなぐるのです、全く其緒根の無盡藏な事、其は今言つた樣に社長（秋山氏は二六新聞社長）とか何とか言はれても俺（天眼）の此處（縮緬兵兒帶）を見る樣になつたか氣の毒だと云ふ優しい心からです、如何にも友情の敦い權化だと思はれました。

とあり、

其時代の星亨君は非常な勢ひで星君が議長を罷め樣とは誰も思つて居ない、況んや議院から除名せられ樣とは誰一人思つて居ない、想像した者もない位であつた、此大物を瞬く内に倒したのは一つに天眼君の靈智、靈能卓然たる氣魄が左樣させたのであります

とあり、右は秋山氏が二十歳過ぎに學校を出たばかりの二六新聞社長時代、天眼先生が二ッ年上の二十三歳から一年半ばかりの間の追懷談と思はる。

緊縮も〳〵大緊縮だ、緊縮の裡面には大緊張が含んで居る、緊縮の後には大發展があるとの希望がなければ人間は緊縮死して仕舞ふ

男子は外に奮闘して時としては案外に疲れ果つる事がある、ネバリ强きは女性の特質である、此緊縮の最高潮時代に當り殊に女性内助の必要があると思ふ。（五、九十四日）

◇最近風聞記

漢江漁郎

○日之出小學校の運動會に、三井物産の池田さんが行つて居られる。

○やがて、お孃さんの組の競技が始まつて、輸贏は今將に決せんとする。池田さん覺えずグッと乘り出して、『ソコだーまり子、ウーン、しつかり〳〵』

○アノまじめなお方が、おぼへず我を忘れて……。

× ×

○同じ日來賓競爭——池田さんのところへ大場勇之助氏がやつて來て、無理無體に、池田さんを、提灯競走にさそひ出す。

○成績如何と見てあれば、發頭人の大場さんは、事の外あわてゝ提灯に火がつかんのです。しかもつかんなりに、大場さんドン〳〵走るから滿場大喝采。

○片や池田さんは、ぞん外要領よく、巧みに立ち廻つて、とど一等となる。池田さん大得意ーお孃さんのおツムを撫でながら『どうだイまり子、アーン、お父う樣はこの通りぢや』

× ×

○城大にも隨分スポーッ熱心家は多いが、まだ高橋婦人科長の右に出るものはないさうです。

○といふのは、同博士は、京城運動場開設以來、どの競技にも一度だつてハヅしたことはないのです。『スポーッ大明神』といふ尊稱があります。

白川溫泉に入浴せざるの記

小田省吾
（城大法文學部）

黃海道は溫泉に富んだ道である。小生は信川郡の信川溫泉を筆頭として、同郡の三泉溫泉、鐵川溫泉、松禾郡の松禾溫泉、瓮津郡の馬山溫泉、平山郡の溫井院溫泉には何れも皆一浴を試みた。然るに近頃聞く所によると延白郡の白川に新たに溫泉が發見せられ、京城から最も近い溫泉として將來甚だ有望であるとの事である。そこで幸ひ同地方に旅行の序を以て此の新溫泉に入浴の野心を抱くに至つた。

開城から自働車に乘り土城を過ぎて碧瀾渡を渡り、自働車を乘り換へて延安に至り、更に二里半の間、車上より豐熟せる稻田を左右に眺めつゝ走ること約三四十分にして一川に達する。此の川は陸地測量部五萬分一地圖に漢橋川と記されてあつて、禮成江に合する川である。川より約十町にして道路の傍に新たなるトタン屋根の家屋の一群が見へる。之が即ち新設の溫泉場で、此の夏頃から營業を開始したといふ。白川邑は此處から十數町位である。新道が此の川を横ぎる所を漢橋里といひ、此邊は潮水往來し、予等の通過した時は恰も干潮時であつたが、滿潮の時は如何に多く滿ち來るかを知ることが出來る。里人の話によると昔は此の川の邊に溫泉が湧出したが何時の頃にか塡滅して其の場所を失つた。然るを最近に至り今の處に於て地下四十餘尺まで鑽管を鑿通せしに斯の如く高熱にして良質の溫泉が多量に湧出するに至つたのであるといふことである。

之に依つて考へると、彼の川邊にあつた溫泉といふのは、東國輿地勝覽卷四十三、黃海道白川郡山川の條に、『大橋溫井。郡の南五里日本の半里に在り』とあるものに相違ないと思はれる。それは同書に、『大橋浦。郡の南五里にあり、……匡正渡を經て海に入る』とあつて、名稱も里數も方向も合するから、大橋溫井は大橋浦附近にあつたに相違ない。其の大橋といふのは昔大きな橋があつたので之も同書に、『大橋。大橋浦にあり。舟楫橋下よりす』とあるので知れる。即ち今の漢橋里は昔の大橋浦である。朝鮮人の普通に大水と呼ぶ河が漢江の名で知られるのと同格である。今でも漢橋里の附近に大石橋の名殘を見出すことが出來ると聞いたが、探して見る暇がなかつた。右は又銀川郡誌（銀川は白川の別名）に左の如く記してあるので一層明瞭である。

『大橋溫井。大橋浦の邊に在り潮水出入、淤泥湮塞し、忽にして他所に移れども亦橋の南北を離れず』

之によると大橋溫井は潮水の作用により淤泥の爲めに塡められるので、幾度か其の位置を變へたらしいが、常に大橋の附近にあつたものである。されば白川の新溫泉は昔の大橋溫井の復活と謂つても過言ではあるまいと思ふ。又同書に『高麗恭愍王嘗て郡南の溫泉に幸す』とあるのも彼の大橋溫井のことであらうと思はれる。斯く觀じ來る時は此の新溫泉に入浴の希望は一層切なるものがあつた。

初め予等の白川溫泉場に着いたのは去る日の正午過であつたが、都合により宿を白川邑内に定めたもとより此處には朝鮮旅館の外には内地人宿は一軒もないのである其の日は終日驅け廻つて旅館に歸つたのは午後七時過であつた。旅館は相當清潔であつたが、汗を洗ふべき風呂の設がない。然し今から溫泉場まで徒歩で行くには餘りに疲れたのであつた。すると八時に旅館から溫泉場まで定期の入浴自働車が出るといふのである。一行は心得たりと之に乘つて意氣揚々として溫泉場に向つた。蓋し自働車で入浴に往くのは生まれて初めである。溫泉場に着いて見ると、此の日は恰も秋夕の翌々日で、近隣から入浴に來た人々で非常な賑ひである。浴室は最近組合の設立に係り、未だ共同浴場一箇所のみである。風呂は幾十人入り居るか知らぬが浴者は大聲を出して何事をか唱へつゝあるのが屋外まで聞へて居る。予等は早速入浴券を求めたが到底浴室に入る勇氣がないので、暫く元湯の附近を徘徊した見ると湧き出る泉は頗る多量で、其溫度は九十度にも達し、手もつけられぬ位である。よつて一大裝置を設け此湯を適當に冷まして湯船の方に導いて居る。其味は微かに鹹味を帶ひて居るかの樣で頗る口に適する。斯くて暫くすると稍々靜まつたので愈々入浴せんものと入口の戸を排して内に入れば、

公治長

に如何に多く減ぜ來るかを知ることが出來る。里人の話によると昔は此の川の邊に溫泉が湧出したが何時の頃にか塡滅して其の場所を潮水出入、洗流閉塞し、怒にして他所に移れども亦橋の南北を離れず』

之によると大橋溫井は潮水の作用に鹹味を帶ひて居るかの樣で頗る口に適する。斯くて暫くすると稍々靜まつたので愈々入浴せんものと入口の戸を排して內に入れば、こは如何に永湯の爲め眞赤になつた裸體のまゝの座像、立像は廊下に充滿して立入るべくもあらず、窃かに湯船の方を窺ふと全く一つばいである。予等は此の凄まじき光景に避易して躊躇すること若干分時であつたが、已むことを得ず終に入浴券一人金七錢也を放棄して入浴を中止することに議決し、夫より疲れた足を引きづりつゝ月を踏んで再び邑內の旅館に歸り、其の儘溫突に橫つたのは午后十時であつた。

其溫度は九十度にも達し、手もつけられぬ位である。よつて一大裝置を設け此湯を適當に冷まして湯船の方に導いて居る。其味は微か

◈野球拜見記

むらさき

○松岡京日社長、十月四日の警務局と老童新聞記者團との野球戰に出場……

○その日朝鮮新聞社から送つて來たユニホームを着用せられんとすると、あの出ツ張ツたお腹が邪魔になつてパンツがボタンのかゝるどころのさわぎではありませんお腹半分ハミ出して窮屈なパンツの中へはワシヤいやぢやと申します。社長フン慨、便々たる奴を叩いて『エーッ、こいつが〳〵』

○ところが今度はその守備振が又振つて居ます。ライトの守りにグラブもはめずノソツと棒立ちになつて居られるのです。お伺ひを立てると『ナーニ君、相手が相手ぢや、素手で結構結構』

○けれ共戰況はそれに反して刻々不利、遂に最後の回に又々ホームインされて『ダ、ダ、ダー』

○朝鮮新聞の野崎氏、憤然として警務局軍に當られました。

○氏のはバッターとしてよりもその盜塁振りの御あざやかさに見る者の目を集められました。

○一塁から二塁へ三塁へそしてホームへと兎に角無理押しに押してベースマンに体當り、野球と柔道と劍道の兼用。ドタンバタン……二人共重り合つて倒れる拍子にボールはハンブル、氏は御見事なヒックリ返り込み、蓋し野球史上古往今來未だ嘗て見ざるところ、群雀はクス〳〵『見ろー近藤勇の孫ッてえのは、アノ人だよ』

公冶長

蒲原久四郎（東四軒町）

公冶長衞より魯に還り、行いて二國の界上に至り、鳥の相呼ぶを聞く。曰く清溪に行いて死人の肉を食ふと。須臾にして一老嫗の道に當つて哭するを見る。公冶長之を問ふ。嫗曰く兒前日出で行きて今に反らず、當さに是れ死亡せしなるべし、所在を知らずと。長曰く、さきに鳥の相呼ぶを聞く、清溪に行いて肉を食すと、恐らくは之れ嫗の兒ならんと。嫗往いて見れば則ち其の兒を得たり、已に死す。嫗即ち村司に告ぐ。村司嫗に問ふに何によりて之れを知る事を得たるかを以てす。嫗長のいふところを以て是れに對ふ。村司曰く長人を殺さずんば何によりてか之れを知らんと、因つて長を囚縛して獄に付す。長獄に在ること六十日、雀子あり獄柵の上に繇り相呼ぶ。嘖々唯々たり。長笑ふ吏獄主に啓して曰く、長雀語を笑ふ、是れ鳥語を解するに似たり。獄主長に問はしむ。雀何のいふところあつて之れを笑ふや。長曰く雀鳴嘖々嘻々、其の言ふところは白蓮水邊に車あり、黍粟を翻覆し牡牛角を折り收斂盡きず、相呼び往いて啄むと。獄主未だ信せず人を遣はし往いて看せしむ。果して其の言の如し。後又猪及鵝語を解き、屢々驗あり。こゝに於いて放たるゝことを得たり。論語に曰く、子公冶長を謂ふ、妻はすべし累縲の中に在りと雖も其罪に非ずと。其の子を以て之に妻はす。

開城の傳說（一）

中村榮孝
（朝鮮史編修會）

○

開城には本年十月一日を以て府制が施行せられたが、この地の歷史はその由來久しく、その名稱は新羅時代以來のもので、即ち約千二百年前から既に開城といふ名はあつたのである。そして現在の開府の地が、都市として基礎づけられたのは、高麗が起つて新羅に代り、朝鮮半島を一統してからのことで約千年前以來である。爾來その國都として最も輝しい歷史を有してゐる。或は北狄の侵入を受けて兵燹の爲めに灰燼に歸した事もあつた。或は國防の上から遷都が計畫されたこともあつた。しかしながら支那や日本や女眞の商人や歸化人までも賑かに集まつて繁華な大都會を成した時もあれば、宮殿樓閣輪奐の美を極め、亘刹の建築相競うてその時代の妙技を發揮した時もあつた。今でも寺院宮殿の遺址を訪ひ城壁を巡る時は、五百年の永い間國都として發展して來た過去を偲んで感慨無量なるものがある。

○

高麗の都としての開城には、幾多の傳說がまつはつた。王氏高麗朝の淵源を說き、王氏の出身を語り、城基の起源を意義づけ、山河の形勢と國運との關係を因緣づけるなど、また王都附近の地名の起源を說明するものや、歷史を面白く傳へるものや、多種多樣な形で遺つてゐる。いまその一つ二つを記してみよう。

高麗朝の正史——李朝になつて高麗實錄によつて編纂せられた——である高麗史を見ると、その卷頭に高麗世系といふ部分がある。高麗朝の由緒を記したもので、それに金寬毅（西紀一一五〇年頃の人）の編年通錄といふ國王王氏の先祖や、建國の由來などを書いた本の文が引かれてゐる。

昔聖骨將軍虎景といふ者があつた。これが王氏の先祖の一番初めに出て來る。白頭山から遊歷して扶蘇山の左谷に來り、妻を娶り家を持つた。扶蘇山とは、今の松嶽山のことである。虎景は、家は富裕になつたが子が生まれず、ただ射術が上手であつたので、獵をして毎日を過ごしてゐた。

或日村の人九人と一緒に平那山へ鷹捕りに入り、行き暮れてとある巖窟に宿つた。すると虎が來て入口に迫つた。一同顏色なく、恐る恐る相談して、先づ皆な各々冠を穴の外に投げ、冠を虎に攫まれた者が、その餌食にならうといふことに決めた。ところが、これが虎景に當つた。そこで彼は、格鬪を覺悟して穴を出て見ると、虎は忽焉として消え、巖窟は崩れ、九人のつれは皆な生き埋めにされてしまつた。虎景は怪しみながら山を下り、事の次第を平那郡に告げその九人の葬禮を營みに再び山に登つて來た。そして先づ山神を祀つたところ、神が現はれて、自分は寡婦の身を以てこの山を主宰してゐるのであるが、今幸にして聖骨將軍に遇ふことが出來たから、お互に夫婦となり、一緒に神政ををさめ、この山の大王に封じようと言ひ訖つたと思ふと、山神も虎景も消え去つてしまつた。因つて郡の人々は虎景を封じて大王となし、祠を立てゝ祭祀を行ひ、九人が同時に歿したので、山名を九龍山と改めた。

その後虎景は舊妻を忘れ得ないで、毎夜夢の如くに來り、これと會してゐた。終に康忠といふ子が生まれたのであつた。

朝鮮土地信託會社の
信託
金錢信託
一口百圓以上
期間一ヶ年以上
不動產管理信託
有價證券信託

○

虎景の子康忠は、西江永安村の富人の女具置義といふのを娶つて五冠山の麼詞岬といふところに住んで居た。そこへ新羅の鹽干の八元といふ風水家が來て、扶蘇山の形勝を說明し、康忠に勸めて、山北の扶蘇郡の治所を山南に移し、松を植ゑて山を被ひ、岩石を露出させずにおけば、必ず子孫に三韓を統合する偉人が出るであらうといつた。そこで康忠はその言の如くにし、郡を松岳郡と改稱し、その上沙粲となり、且つ麼詞岬の舊第を永樂の地と定めて往來したといふ。

これは實に開城の地の發祥を物語る神話的傳說で、またその風水に適つたことを說明するものである。都市を選定するのに朝鮮では風水は最も重要なことで、開城は舊郡治といひ傳へる地は今も松岳山西北麓谷間の小平地に存する。

（昭和五、一〇、一〇）

の形勢と國運との關係を因緣づけるなど、また王都附近の地名の起源を說明するものや、歷史を面白く傳へるものや、多種多樣な形で語る神話的傳說で、またその風水に適つたことを說明するものである。都市を選定するのに朝鮮では風水は最も重要なことで、開城は古來風水上極めて推稱される地形であつた。

なほこれによつて王氏の先祖は新羅の松岳郡の長官であつたものと說き、松岳郡名の由來を明かにしたことは興味のあることである

舊郡治といひ傳へる地は今も松岳山西北麓谷間の小平地に存する。

（昭和五、一〇、一〇）

◈賣出し珍話

漢江漁郎

○先月――平田百貨店で大賣出しをした時、毎朝何千といふ老若男女が、戶の開くのを待ち構えて、ワーッと一時に雪崩れ込む。負傷者の出たばかりでない。人波に押された人々が、思はず下駄を脫ぐので、騷ぎのあとでは、いつも何十足といふ下駄が、ゴロ〳〵してゐたさうだ。

○こんな風で、大商店の賣出しは、大抵大當り……。つまり安いぞ〳〵の聲に、フラ〳〵ッとなるのである。

人のつれは皆な生き埋めにされてしまつた。虎景は怪しみながら山を下り、事の次第を平那郡に告げその九人の葬禮を營みに再び山に

の上沙粲となり、且つ摩詞岬の舊第を永棄の地と定めて往來したといふ。

これは實に開城の地の發祥を物

バナヽ

高橋不二人

一九三五年の夏だつた。

此年は、とてつもない暑い年だつた。

三〇年がレコード破りの暑さだと、四五年前人々はあえいで居たけれ共、此の年の暑さは又格別だつた。

そして五六年以來おされにおされた失業者の群は此の年になつて街頭に充滿して居た。

彼氏も亦、その容貌、風采共に失業者の一人だつた。容赦なく照りつける三五年の夏の太陽は、アスファルトに反射し、ゴチヤ〳〵した大厦高樓にはねかへされて、職にあこがれ、食に飢えた彼氏を遠慮なくのいしてしまつた。

その日は殊に又暑苦るしい日であつた。彼氏はやつとポケットをはたいて求めた一本のバナナを、ほこらし氣に、そして惜し相に、皮をむいてガブリ！正にその時だつた。彼氏の前を、肥滿したおいしい豚を思ひ出させる〇〇株式會社專務（後で解つた事だが）が京城雜筆へ寄稿した自分の文章に讀みほれながら通りかゝつた。と思ふ間もなく、ツルリ、ズデンドウとそれこそ惜し氣もなく、見事にデングリ返つてしまつた。そして悲しい事には、やつと求めた彼氏のバナナは立派に肥滿氏の下敷。ダーッと參つてしまつて居た。

彼氏は惜しかつた、殘念だつた泣き出したかつた。でも捨てたバナナの皮で肥滿氏がデングリ返つたのは面白かつた、嬉しかつたでも〳〵その次の瞬間、彼氏は長くのびた肥滿氏が氣の毒だつた。ハッとして力の無い腹に無理から力を入れてやつとのことで肥滿氏を抱き起した。……が、それが一つの機緣となつて〇〇會社の一員に採用されやうとは、彼氏の夢想だにしなかつたことである。

偶然に、ほんとに偶然にサラリーマンになつた彼氏は、三五年もなかつた。夏の暑さもなかつた。

ほがらかにすんだ眞夏の太陽であり、よく整頓された都市風景！そして大厦高樓だつた。

彼氏のステップは輕快に、手にはいつの間にか高雅なステッキが握られて居た。

眼に映つる總てが幸福であり華やかであつて、心は何處かでダンスして居た。

それから彼氏の心の中に頭を出したものは、バナナでなくて腕だつた。偶然にあらずして當然だつた。マコーでなくてカイダ、コンゴー、ウエストミンスターだつた一杯五錢のマッカリでなくて、ビール、ウヰスキー、キユラソーだつた、カフエだつた。

でも〳〵もう一つ……これも實に偶然！卒然！俄然だつた。一日彼氏は××街散策中、あの有名なカフエー〇〇〇の前で突如もんどり打つてブッ倒れた。物の美事に大道に叩きつけられた。ワーッと騷音と罵聲が相和した。

彼氏は起き上れなかつた。偶然！無意識！窓から捨てられたバナナの皮に足をとられて腰骨を打撃いたのだ。同時に右の腕も……。

そして當然彼氏は又もとの悲慘な失業者だつた。

收容され病院のベッドの上で、うらめし氣に、瞳の裏に映るバナナの皮を見つめた。そして出勤わづか三週の夢を。

運命は唯ニヤッと笑つた。

椿の島

（日記から）

奥永政輝
（鈴木運送店）

椿の國、眞赤な椿花、情熱の籠つた椿花、周圍一里しかない小嶋が全體に椿の花で彩られてゐる、と云つてもこの島に渡つて見て始めて得心の行くことである。

僕達の少年時代に、小學校で木蓮を持つて友達に、『やらうか』と云つて友が手を差出すと、その木蓮を引込めて、『もーくれん』（モウヤラナイの意味）と云つて惡戯をしたもんだ。この椿花と木蓮とは、良く判別しなれなかつた樣に記憶してゐる。だから椿花は特に思出が多い。

梅田さん（この島の名主）が島の頂上に案内するから是非行かうと勸められるまゝに難儀さで山上りの仕度にかゝる。その間山道の餘り險しくない事や、頂上に着いた時の愉快な氣持などを說明して呉れる。上らない先に、もう頂上を窮めたやうな氣持でゐる。

山道の兩側は勿論、目の届くところ、總てが椿の木と椿の花の陳列場だ。蟬は聲高らかに鳴いて、我らが夏を讃美してゐる。海の彼方から來る涼風は、そつと頰をなでゝ行く。牛の聲が遠くに聞える平和な島を歌つてゐるやうに、總てが島で始めて見られることばかりだ。

椿の花は、その赤い唇を差向けて、まるで接吻でも求めるやうに微笑んでゐる。

情熱の女性の表象のやうな椿花に迎へられ、見送られつゝ道々で行き違ふ島の人々に、一々紹介せられる。ロクに挨拶も出來ない自分は困つた。紹介されたと云つても、相手は純朴な島の人達だ。少しの虛飾さへもなく心持が良い。

中腹の椿木の根元に腰を下した伊愛半島の彼方には富士山が墨繪のやうに浮いてゐる。

おゝ富嶽よ！、島に來て始めて富士山を見る、東京での富士山も駿河で見た富士山も、鎌倉で見た富士山も、少しの變りもない。頂上に白雪を頂き、同じ姿で聳へてゐる。

下田港も、大島の三村も、あの波浮の港も、而し海の上が歩けたら一時間か二時間で行けそうに眼前に展開してゐる。

平和な島、村名は伊豆利島。雜沓の巷！最尖端を行く東都を離れて、この島に來た價値が今日判然したやうに思はれる。

島の人達は、少さな時覺えてゐる鄕里の田舍の人々と少しも變りはない、否それ以上に素朴だ。本當に皆が善人そのものゝやうに思はれる。

冲を眺めると大きな汽船が一艘靜かな海に白波を立てゝ、横濱の港を指して進んでゐる。多分米國からの歸り船だろう。

梅田さんの說明する語句に判らない點がちよい〳〵ある。だが、第六感を働かせて聞き取りつゝ會話をする。こんな時に會話と云ふ方が良いと思ふ。もう頂上だ。祉でも祀つてあるのかと思ふと、何もない。內地のこうした山の頂には祉があるもんだが、こゝのは、神祉が濱邊にある切りだ。

頂上で先づ東天を拜して聖壽を祈る。

【四二】

年に一度位は東京に行くこの梅田さんと東京の話に花がさく。淺草がどうだ、上野、日比谷がどうだ、それから靈岸島の島通ひの船着場の前にある宿屋の待遇がとてもよい、なんて一も東京二も東京だ。こんな人が多いから地方の農業が衰微するんだと、私は心の中で思つた。

この人は、この島で十年から名主と云ふ名譽職に在るだけあつて島のあらゆる方向の第一人者だ。島の財政、經濟のことについては堂に入つたもんだ。

處がこの島の王樣になる（島を買ひ取る）には、幾ら位のお金が要るかと聞くと、『貳拾萬もあつたら充分だらう』と云つた。

貳拾萬の金があつたらこの島の王樣になれるのかと思つたら、何だか變にウツトリした氣持になつた。

日向の新らしい村以上に、自由な新らしい村を造つて、そして自分がこの島の主權者になつて、內閣制を採つて、議會制度を設け、理想國を建設して……私はいよいよウツトリせずにはゐられなかつた。

下山の途に、僕の一番嫌ひな蛇、に道を横切られ、その度に心の動搖を感じながら梅田さんの家に着いた。

家では長州風呂が柔かい湯氣を立てゝゐた。

山を見る（續）

問題とならない。私の鄕里にも帝釋峽及び三段峽の勝れたる二峽谷を有してゐる。帝釋峽は古くから

りた。

椿の花は、その赤い唇を差向けて、まるで接吻でも求めるやうに微笑んでゐる。

情熟の女性の表象のやうな椿花

港を指して進んでゐる。多分米國からの歸り船だろう。

梅田さんの説明する語句に判らない點がちよい〳〵ある。だが、第六感を働かせて聞き取りつゝ會

京城雜筆

山を見る（續）

森哲郎
（京城齒科醫專）

萬物相の入口たる萬相亭に着いたのは十一時頃で、宿を發つてから約三時間半を要した。其處には山駕籠が二三臺乘りすてゝあつた。暫時休憩して、亭の主人の勸める麥茶に渴を醫して愈々谷間に入るそれから程遠からぬ處に舊萬物相を簡單に見て新萬物相へと急いだけれども、路は登るにつれて益々險しくなり、それまで役立つた杖も今は反つて邪間になるので遂に捨てゝしまつた。兩手で鐵索や樹の根をしかと掴んで一歩宛登つてゆく。かくして金剛門をも通りぬけて漸く天仙岩に辿り着いた。玉流洞溪谷八潭の恐ろしき九龍の傳説に對して、この天仙臺には周圍のグロテスクな山容に似ず至つて優しい天女の傳説が存してゐる。其の昔天人の用ひたと云ふ化粧水は、今もその名殘りをとゞめて、三ヶ所の岩の凹みに溜つてゐたので、傳説に憧憬れて、私も其水を手にはしたものゝ今は人間の粧にすらきゝめもあるまい、溜つた水の底には孑孑すら發生してゐたもの。天女共の平和境を亂して其の一人を己が妻としたと云ふ惡戲な樵夫の振舞を憎らしくも思つた。

眼を放てば、只一方のみ遠く開けて、三方は骸骨を露はした怪奇なる山々が、あだかも吾々を威壓するが如く近くに迫つて居り、何處と云つて纏つた景色は無いが、其の男性的な天斧の削成に驚きつゝ快哉を叫んだのであつた。充分新萬物相特有の味を賞して更に奥萬物相に至り、望洋臺を極めて亦もとの路に引返して三時半頃萬相亭に下つた。而して重い足を引き乍ら七時頃宿に歸る。普通なれば六七時間の探勝で足りるとの事であつたが、吾々は隨分ゆつくりして、展望を恣にしたのであつた。

萬物相は金剛山中第一の絶景なりと聞いて居たが、眼のあたり見るに及んで、其の怪奇なる山々の姿には驚いたが、雄大、壮麗と云ふ感じは自分の豫想した程度のものではなかつた。萬物相を以て第一の絶景と稱するも、これは見る者の自由ではあるが、大金剛から見れば其の一局部の景觀に過ぎぬ若し金剛一萬二千峰を一望の中に收め得る場所が他にありとすればこれこそ金剛山中第一の勝景と稱し得るであらう。最高毘盧峰頂上よりの大觀はどんなものであらう奥萬物相あたりから彼方毘盧峰の頂上を望んだとき彼處に登りてこそ内外金剛の雄大なる全景も眺め得る絶好の位置であらうなどゝ思つたのである。

海金剛は遂に見ずして歸つたのであつたが、已に代表的二大溪谷を見た眼には物足らぬであらうとてよしたのである。

私は曾つて山陽の耶馬溪遊記に刺戟されて、該溪谷を探勝したけれども、金剛山に比較すれば到底問題とならない。私の鄕里にも帝釋峽及び三段峽の勝れたる二峽谷を有してゐる。帝釋峽は古くから其の名を知られてゐたけれども三段峽は今から約十年前漸く世に紹介せられたのであつて、それまでは近在の樵夫にとりて最も厄介視せられてゐた場所に過ぎなかつたのである。耶馬溪を以て天下第一の絶勝と稱した山陽も、それ以上の名勝地が自分の足許にある事には一向氣がつかなかつたのであつた。峽谷の全長殆んど四五里に及び、溪中三大瀑布を有し、一段、二段、三段と各其の趣を異にしてゐるのも妙である。到る處奇岩、絶壁が溪を隔てゝ相迫り、深淵あり急湍あり、此等の勝景は眞に應接に暇無き有樣である。これを金剛山に比較するに、其の規模に於て遠く及ばぬけれども、若し三段峽をして金剛山中の溪谷たらしめば其の景觀の美に於て探勝者をして必ずや嘆賞せしめるであらうと此邊で一寸お國自慢をして置く。

げに朝鮮のもつ誇りの一として金剛山こそは、それの持つ山岳及溪谷の美は量に於いて大いさに於ても世界に誇り得るものであらう殊に自然の造つた一大藝術に加ふるに更に人工の美を以てし、二千年に渉る佛教上の歴史あることは此の自然と人間とのなせる一大綜合藝術品に對して如何程其の價値を增加せしむるか知れない。俗惡なりと稱した衆香瀧の右方大文字も、時代の推移によりてやがて千年の後にも至れば、一大名物として充分の價値を生ずるものと信ずるのである。

秋漸く酣にして大金剛山の紅葉したる姿は如何ばかりか美しい事であらう。

高麗史の珍記事

今村鞆（南米倉町）

靈液を吸ふ

莊和王后吳氏は、羅州の人で、父は多憐君、世々州の木浦に家して居つた。高麗の太祖王建が、弓裔に仕へて、水軍の將となつて居た時代に、出でて羅州を鎭して居た。

船が木浦に泊した時に、川上に五色の氣があるを望見して、至れば（以下原文で書く）

至則后浣布。太祖召幸之。以側微不欲有娠。宣干寢席。后即吸之。遂有娠生子。是爲惠宗。面有黑紋。世謂之孾主。常以水灌寢席。……云々

此の記事は、僅かの文字數であるが、土俗學方面から見て、中々趣味津々たるものがある。

先づ第一に、賓客へ御馳走として、妻、妾、娘等を提供する風俗である。この風は日本にも昔にあつた。据へ膳と云ふ言葉は斯る邊から出て居るであろふ。此の風は世界の何所にもあつた風で、現に印度の一部や南洋に殘つて居る、田口鼎軒氏が、印度でその樣な提供に逢つて、困つたと云ふ事だ。

此の記事により、高麗の初期に其風の存在した事が判る。朝鮮に於ける、此土俗の資料は、大分蒐めてあれど、長くなるから玆には略する。

第二に、Sameu を非常に尊重した思想が伺はれる。此れを神聖なるものとして飲んだり、又男子が身體の一部分へ受け入れたりしたことは、希臘、ローマの昔に在つた習慣である。現今でも、巴里邊では Fellatio を特別に好む變態嬶客を目的としたBordelleがある。夫れ等の娼女は、大抵、Fellatio の最後に於て、神聖なる數十萬の動物を、平然として胃の腑まで、活躍させると云ふ事である。

第三に、賤しき異種族へ、種を殘さぬと云ふ思想の在つた事である。日本の古記にある、矢釜の矢がホドを突いて死したと云ふ記事を、同樣の思想で墮胎をやり損じた事であると、解釋して居る學者もある。

高麗王室の近親婚、特に兄妹婚の甚だ多き事も單なる其時代一般の、風俗のみと解するを得ぬ、此の記事はそれ等の詮索に、一資料を與へるものである。

（附記）高麗の血族婚に付ては自分は、本月號の雜誌『朝鮮』に一文を載せて置いた、參照せらるべし。

高麗史を書いた、李朝初期の大學者鄭麟趾は、何に據つて、此記事を書いたか判らぬが、高麗朝で作つた實錄に、其記事があつたものと推する。而して其當時、吸ふた爲めに姙んだと考へて居たらしい。此れは無論吸ふた爲では無く、太祖王建が、斷然と席に宣する危機一髮を後らしたためである。夫れが遂に二代の王惠宗となつた。幸運なりしオタマジヤクシ！

不可解の熱藥

二十八代忠惠王の后妃傳の部にも一つ珍記事がある。曰く

銀川翁主林氏は、商人信之の女で、丹陽大君の婢である。沙器を賣つて業として居つた、王がこれを見て、幸して寵があつた。王は此の女を宮中に納れんとした時に、和妃林氏が妬いた爲めに沙汰止みとなつた、王は夫れを氣の毒なと思つて、翁主として、三峴に新宮を造つて、其處に置いた。ソコで世人はこれを呼んで、サバリ翁主と云つた。此れから以下は原文で書く。

王好熱藥。諸妃嬪皆不能當御。唯翁主得幸云々

此の熱藥と云ふ字が、從來學者間に疑問となつて居つて、誰れも是れを解いた人が無い。

自分の意見は、此は飲む藥で無いと思ふて居る、『眞臘風土記』に、

婦人出產の跡は、熱飯に鹽を抹して、××の中に入れ、一晝夜を置きて捨つ、產後平日の如く、且つ××收まり、多產の婦人も室女の如し……とある。トンダ掘りめしである。

多分コンナ比ひのものであつたであろふ。サバリにヌク飯はつきものだ。由來王者と云ふ者は、ヒマにあかして斯樣な學問には、中々熱心で、研究は至り盡すものであるから。

章について潤一郎が書いてゐた事を記憶する。大意は英語の數行が日本語で表はす場合は簡潔な一二句に盡きることであつた。妙くと

しのびよつてその莖を折つてしやぶるにしか役立なかつた秋海棠の花が何故に終日私の頭にちらついて離れないのか。あの京城の店頭

めてあれど、長くなるから茲には略する。

第二に、Samen を非常に尊重

京城雜筆

秋

水井れい子

秋雨がいく日かふりつづいてしめやかな氣になる日がつづいた。私の通る小路の板塀に白ばかしの朝顔の花が咲いてゐた。繁つた葉と大輪の朝顔の雨にしほれた姿がしきりに日本的な古風な情味を誘ふ。何でもない事だが丁度その頃の東京朝日の亂菊物語の夢前川のくだりに朝顔の挿繪がのつてゐたのがよけいにその感をふかめた。絢爛目を奪ふ潤一郎の作品にも、その頃の夢前川では哀れがこもつてゐた。潤一郎はたしかにあの作品の中では泣いてゐたと思つた。しかすがに切なる思をたどたどしい（これは技巧の問題ではない、日本語がもつ美しい飛躍だ纖細に動く感情を規定せられた言葉に表現する日本語的技巧の謂だ）筆にあらはしてゐた。行衞しれずなつた胡蝶を慕ふ太守の心は事こそ變れかくされた作者の心ではなかつたかと、私は息づかないでは讀む事ができなかつた。千代子夫人と別離した事をくやむのではない。又、それは彼の主觀に於いてどうにもならない事實ではあるが、そこに人間としての一抹の哀愁がただよはないでをらうか。私はあの事件を形骸的に批判する前に人間的なかなしみにとざされた。ただ殘された事は潤一郎の作品が今後別種な味はひをふくむことであらうといふ事である。

○

いつだたかの改造に日本語の文章について潤一郎が書いてゐた事を記憶する。大意は英語の數行が日本語で表はす場合は簡潔な一二句に盡きることであつた。尠くとも日本語のこの飛躍は我々日本語をよくする人間にのみ味解せられる言葉であるといふ事を述べてゐた。日本語を味解することによつて我々の感情はそこまで行かなくては嘘だ。

如何にエキゾチックな作家であらうとも彼らが遂にこの日本語の飛躍に味到する時、別種な人間的開展があるやうに思ふ。私は潤一郎がこの論文を書いた時にしたしむべき人間谷崎氏を見出した。我々は日本人だ。さうして日本文學がもつ人間味——頗る抽象的な言葉であるが——換言すれば圓熟した人格はここから生れてくるのではなからうかと思ふ。

○

青草にまじつて女郎花が咲いてゐた。其無造作な花が私の心に實にふさはしく思はれた。道々それを折りためながら山頂の道を歩いた。われもかうも咲いてゐる。松林の中に入ると白い高貴な萩が咲いてゐた。あの眞珠のやうな花がひつたりと私の心を捕へた。今年の秋はどうしてこんなありふれた花が新らしく私の心を打つのかと不思議に思はれて仕方がなかつたこころみに連れてゐた男の子に、『ここに萩が咲いてゐる』といつた。この純眞な男の子がどう答へるかによつて私の頭が通常であるか否かをたしかめる爲であつた。子供は『あ、ほんと！』といかにも感に堪へないやうに目を瞠つた私はやや安心したのであつた。

○

祖母のゐないお寺の納戸の庭にしのびよつてその莖を折つてしやぶるにしか役立なかつた秋海棠の花が何故に終日私の頭にちらついて離れないのか。あの京城の店頭に賣つてゐるあんな丈の低いのではない。八つ手の木の下の蔭につやつやと丈のびた秋海棠の花だ。あの美しい粉をふいたやうな花瓣に黄色い蕊が見える。あの清楚な、秋！といふ言葉にふさはしい花だ。ルンペンは秋の故郷に會はず人しい。

○

生きる事にあくせくたるお前は町にゆけ。私は山に行かう。山道の萱のそこはかとなき生え處さへ私にはしたしいものだ。松林の上に踊る日光を仰いでしんと靜もる森に這入つて行つた。この爽快さは黄金を超越する。

人世を蹂躙した。

私は後の子供にいつた。『木の下の草が見たい爲にきた』と。山の中の木の下には現世のものとも思はれない程に野菊が一面に咲いてゐた。秋は自らほろびる死を思はせる。

木洩れ灯の青葉の中を濡てきぬ
わがうつせみにさやりあらすな
心澄む秋ちかづきぬなりはひに
會ふ人々をうとましめつつ

記事を書いたか判らぬが、高麗朝で作つた實錄に、其記事があつたものと推する。而して其當マにあかして斯樣な學問には、中々熱心で、研究は至り盡すものであるから。

鰻丼
五拾錢
お壽司
一度は御試食を
本町五丁目
阿波文
（電本一八三七）

無題

西山幸雄
（京城齒科醫專）

京城雜筆

誠に結構。科學の進歩は有難い事だ。處で今日は天下晴れての結婚式、その披の披露の宴に待した藝妓とすつかり意氣投合した新郎君朝は飛行機で手に手をつないで都落ちと云うのでは全くの作り話になるが、話丈でも困つた事になる

『うれしいのは洗錬されたエロチシズムだ』（決して僕の言にあらず電車の中で聞いた事）

前も云つた事であるが、僕はエロチシズム小說と云う呼び方を好まないのだが、いゝ意味のエロチシズム作品にはその作者に對しても亦作品に對しても好感を持つ事が出來る。

フレッシュなエロチンズムはその作品の藝術價値をより高める事が出來るからである。

而し今の所謂エロ作家と云ふ連中にはずい分變な人も有る樣だ。

○

新興文學と呼はるゝものは尖鋭化された次代人の感覺にピンと來るものである以上言葉の表現等にも相當所謂新らし味があつていゝ而し中にはあまりいゝ感じを與へないものがある樣に思ふ。勿論此れは僕一人の主觀だがエロチシズムを略して『エロ』など呼ぶのは全く嫌な事である。

中村正常ものする處のナンセンス小說を讀むに至る處にユマ子、リ、コ、ペソ吉等の名あり。

こうした呼稱が果してナンセンス小說としての價値効果を特に增大してゐるものであらうか。

僕自身は之等のトクニ、僞名書きの名前に接する時、何故ともなく或るぎこちないくすぐつたさといやな氣持を感ずるのである。

（一〇・一四、午後四時）

○

『プチ、ブル根性をたたきつぶせ』

マルキシストの誰かがこんな事を云つた。にも拘はらず一九三〇年の日本には澎湃としてプチ、ブル根性が漲ぎつてゐる。所謂エロチシズム乃至ナンセンス文學と呼ばるゝ處のものが（僕自身こうした呼び方を好ましくは思はないが）歡迎され、百%のヂヤーナリスチック價値を有するのも亦宜なるかなである。

ところで

アメリカン・モダーニズム――プチ・ブル趣味――エロ・ナンセンス

こんな事は云へないかしら。

○

イデオロギー小說の多くが內容にせよ形式にせよ餘りに千偏一律的であるのに我々はいつも不滿と倦怠を感ずる。

讀む人の心にしつかりと食ひ込まれねばならぬ之等の小說が、案外何等の刺戟なしに、時々はむしろ甚だしいつまらなさを感じさせられ乍ら讀まされる事さへある。

事件の單なる報告は決して小說ではあり得ない筈だ。

『新しき藝術とは』なんて大見得を切るがらでもなし、きつてみた處で相手にして呉れる人もないだらうが、兎に角、現在の樣な時代に於ける文學、殊にイデオロギー小說と銘打たるゝ處のものに於て、作品として尤も考慮すべく注意すべき事は思想性と藝術性とのよりよき調和と、もう一つは作家自身の正しきイデオロギーの認識と云う事でないかと思ふ。

『イデオロギー文學に於ける恐るべき敵は決してイデオロギーそのものではなくして、若しその作品が價値ないものであつたとしても、それは作家自身のイデオロギーに對する認識不足によるものである』

と云う樣な事をプレハーノフは云つてゐる。

ところでもう一つ云ひ落したが日本のプロレタリア作家よ（勿論一部分の人に對してである）もう少し君等の小說は文章の上にも內容に於ても研式とか表現とか云ふ點に就ても研究してみるべきではなからうか、どうだらうか。いつもいつも氣どつたヒロイズムや警官と人々との毆り合いでも仕樣がない。プロレタリアートの、玲瓏とした水の樣に澄みきつた心境小說こそ望ましきものである。

○

スピード結構、エロも決してにくくない。

文壇の諸將が朝大阪から飛んで夕方京城につく。講演會をやる宴會がある。麻雀もやらねばならぬあくる朝は五時に起きて飛行機で飛ばす。ひるすぎには大連につく

心よき追想

在らッしやるやふですが、どなたでいらッしやいますか。少し心當りの事がありますので

と丁寧ナもの云ひ、名ざされた私

心よきの追想

池部義雄
（李王職醫療）

モシ〳〵書生サン

と呼びかけられたのは四十年前、處は京の聖護院、時は仲秋無月の夜、始めて笈を下ろして五日目で肩あげのとれたきのふけふのころ人通りもない町はづれで藪から棒の此聲に、思はず一歩たじろきまして

ナニか用事ですか

の返答もうすら寒い風に慄へて居ます。

すみませんが五錢かして下さいませんか、朝より一片も口にしませんのですから

ナアンだそんな事かと胸撫で下ろした私は、懷中で蟇口の中から十錢銀貨一枚とり出しまして彼の手に渡し乍ら、うすあかりに其人を見ますと、丁年そこ〳〵の若者でまことに正直さうな面相ですから

どふされたのですか

と優しく問ひました處、如何にも淋しさふな聲に涙を織り込んでの物語は、これを單的に記しますと生まれは八幡の在、家は貧農、繼母のぎやく待、京の知人をたよつて來たが不在……と云ふ筋書きの通つた不幸な人で

見す識らずの店では雇ふてもくれませず、仕方がないから歸らふと思ひますけれど、お腹がすいて〳〵一足も歩けませんからお願した始末です。有難ふ御座いました。此のご恩は忘れません

と手を執つての喜びです、年少の私はくすぐつたいやふナ、悲しいやふナ、而して又嬉しいやふナ氣で

デは早くお歸ンなさい

と挨拶をして行きかけますと、是非處と名を聽かせよとて袖を放さないので、已むなく姓名だけを告げまして、彼は西に私は東に、幾度か目禮を交はしつゝ次第に遠ざかりました。此時迄雲に閉されて居つた月は、世の秋を一點に集めて、皎たる光りを大地に漂はせました。

僅か一夕に起つた輕い出來ごとソンナ不必要ナ記憶は、もはやおぼろとなつた八年の後、業を卒へた私は、同縣人五名と携へ、花笑ふ都をあとに、歸郷すべく大阪に出まして、出帆まで五時間あるとき〳〵

生線に立つてはイッ又息ぬきが出來るやら、素通りでイ、見物せふか

と衆議忽ち一決しまして、大阪城や住吉などを廻り、最後に道頓堀に出まして、折柄の午餐を認めに足もとの鋤燒家に登りまして、勝手ナ熱を吹き合つて居ります時、靜かにアイの襖を開けて、一人の紳士が中腰のまゝ

まことにお妨げして相すみませんが、先刻から隣室で承りますのに○○サンと云はれるお方が在らッしやるやふですが、どなたでいらッしやいますか。少し心當りの事がありますので

と丁寧ナもの云ひ、名ざされた私も當初其人を見ました時、宛かも夕べの淡き夢を思ひ出せない程度に朦朧ながら會つては一度面唔したやふナ人！と思ふて居る矢さきですから

ソレは私ですが、貴下はと申しますと、暫時視線を注いで居ました紳士は

オ、貴下ダ、貴下ダ

と、私の面前まで來られまして寔にお久ふ御座ります、お達者で何によりで、こんな嬉しいことはありません

先方は感極まるといふ態度ですのに、まだ懷ひ出せぬ私は、もじもじいたして居りますと、

お見忘れですか、いつぞやの夜聖護院で

アゝさふでしたか、これは寔に失禮しました

と挨拶すれば紳士は四人の友の方にも會釋しまして、而かも卒直に過ぎし夜の一伍一什を物語つた後

こんな嬉しい事はありません、今日は公休日で、妻子はさきに行つて居りますから、これから皆さんのお伴をして中座に御案内いたしませふ

と、イクラ遠慮しても聞き入るればこそ、遂にひかれて一等席の觀劇です。初對面の夫人からも

是非お會ひしたいと、かね〳〵申して居りましたが、一念がとゞいたものと見へまして

と痛み入つたる優さしい挨拶、芝居がハネてから車を連ねて堂々たる自宅に……翌日は造幣局の花見に……夕刻乘船の際は各自に土產物を調へて、夫妻揃ふて見送り、

た處で相手にして呉れる人もないだらうが、兎に角、現在の樣な時代に於ける文學、殊にイデオロギ

會がある。麻雀もやらねばならぬあくる朝は五時に起きて飛行機で飛ばす。ひるすぎには大連につく

いやな氣持を感ずるのである。

（一〇・一四、午後四時）

京城雜筆

實に到れり盡せりの款待でした。

花の堤で一座と少し遠ざかつた時、その談話せし處を、例の單的で記しますと、事件のあつた年の翌年結婚、家督相續、養父母は須磨に隱居、家運は追々に繁昌……との事でありました。

嗚呼『神』は善者を惠むべく其贈り物は常に準備されて居る！。」

二昔半

久松前平（京城日報社）

十一月の思ひ出、それは二昔半もの學生時代のこと。

土曜日夜中の一時頃『演習』と雨戸を叩かれて跳ね起き同宿の四名と用意を整へて戸外へ出ると上級生の親分が六名と共に待ち構えて居る。演習には持つて來いの薄月夜であつた。一行は無言の儘極めて靜かな行軍を續ける。大体森林の側道を辿るのであるから我々下級生には恐ろしくてならぬ。ものの三十分も行くと、先頭が止まるにつれて一同は草道にふせる。腹ばひになつて畑に潜行する。そしてイモ（薩摩芋）堀りが始まる中々困難な作業ではあるが、その時は自作のものを收穫する樣な心持になつて運動競技以上の興味をそゝる。見る〳〵内に用意のサック（洋服のズボンの右下左下を別々に紐で結ぶ、それに充滿すると連續した二つの袋が出來るからズボンの股部を肩に掛けて運ぶ樣に出來て居る）一ぱいになる。愈々引揚げる段取りになつた頃黑い影が默々として迫つて來る。豫ねての命令通り別れ〳〵になつて本部に逃げ歸る。台所で檢閲が始まる紐が切れて片つ方はからつぽの者があるかと思ふと膝部のほころびから喰み出した者など大笑ひである。直ちに總動員で蒸し揚げられ行軍中の悲喜劇を語りあつて打ち興じつつ飽食する。その愉快さはいまだに忘れられぬ。これは順調なときのこと、密柑とか干柿とかの演習に至つては中々難事が多かつたことも記憶に深い。

×

級長から『本日放課後〇〇神社境内に集ること』と秘密の命令がある。さあきたわれるのだと人心惶に恟々である。全校生徒が參集すると五年生の級長が進み出で『近ごろ本校生徒の風紀が甚だしく悪い』云々と一場の訓示があつて先づ二十人許り呼び出される。『お前等は上級生に敬禮の仕方が悪い』と五、六人のタクレ（上級生で一番バンカラを下級生の呼ぶ綽名である）が出て來て睨み付ける。それから華美な服裝をしてる組は一つ宛鐵拳の制裁。女學生及び若い女と同行（それが姉でも妹でも親戚でも）或は文通した者、俗歌を歌つた者などは半死半生の極刑に處せられる。一同恐ろしくてならぬが寧ろ當然の制裁だとして將來を誓つたものである。

×

その頃の學生さん達は蠻的過ぎる程でもあつたが、純眞で無邪氣で、そして何となく生き〳〵して居た。近頃の學生さんはカフエーでもいてるとか何とか所謂ハイカラさんでないと威張れぬさうだ。

◈髭と鉈の話

三木一彦

〇今西博士の御令息は、京都大學在學中だが、この夏はズーッと當地の父博士のお住ひに來て居られた。

〇或る時博士は、二三年前の雜筆――博士の書かれた『黑髭』といふ小篇を捜し出し、『どうだいこれは、父うさんも書けば、斯うしたものも書けるんだよ』、博士大分お得意でありました。

〇ところが、御令息は一讀眉をひそめ、『感心しませんネ。元來父う樣のお筆は、斯ういふテーマには全く向かないのです。いはゞ鉈をもつて髭を剃るの類です。これからはおよしなさい……』に、博士『ハハン……愉快にコキおろすのう。イヤ承知した。以後はをつける。ハイ〳〵』

將棋名人論

あります。近年勝ち越して八段になつた人ですから、どうしても勝敗率がよろしうございます。負越しの甚しい大崎君だつて、金君だ

將棋名人論

石山賢吉
（東京ダイヤモンド社）

將棋好が四五人寄ると、必ず出る噂は、今の將棋界に誰が一番強いか、と云ふ事であります。

私の本文の目的も、此事を主題と致します。

今の將棋界には名人が二人、八段が八人居ります。尤も名人の内一人は自稱です。一般の承認しないものでありますから、或は名人一人、八段九人と云つた方が至當かも知れません。いづれにしても今は將棋の全盛時代であります。準名人の八段が八人も九人も居るなんて全く前例のない事であります。將棋界が隆盛でなければ見られぬ現象であります。

八段九人の内三人は現在將棋を指しません。即ち大阪の坂田三吉君も、四日市の小菅劍之助君も、酒田の竹内丑松君も、現在將棋を指さんのですから、強い弱いを論ずる場合には、是れは論外といたさねばなりません。すると、跡へ殘るのは六人になります。此六人が現役の八段であります。現在棋界の强者で、次ぎの名人は此内から出ようと云ふ譯であります。其顔觸を申しますと、土居市太郎君大崎熊雄君、金易二郎君、花田長太郎君、木村義雄君、木見金治郎君であります。此六人中誰が一番強いか、之を問題とするのであります。

最初、成績を申上げます。大正十四年に、專門棋士の申合に依つて將棋聯盟と云ふものが組織され爾來、棋士同志の勝負は一々記錄されて居りますが、之に依りますと、土居君は大正十四年の四月以來今日迄百番指して勝敗五分々々即ち負け勝ちなしであります。次ぎに大崎君は同じ期間に七十七番指して廿一番の負け越し、更に金君は七十九番指して十六番の負け越し、花田君は百十八番指して三番の負越し、木村君は二百十一番指して九十八番の勝越し、木見君は大阪在住の關係上、聯盟の記錄に載る東京での手合はズット少くなつて居りますが、是れは三十四番指して十三番の負け越しになつて居ります。即ち木村君が第一等の成績であります。それも實に飛び離れた好成績であります。他の八段は、全部敗け越し、土居君が漸く勝負五分々々の間に挾つて木村君は二百十一番指して九十八番も勝ち越して居るのであります。持將棋が一番、負けは僅に五十六番しかありませぬ。即ち七十%の戰勝率であります。斯の如き戰勝率の保有者は恐らく他にありますまい。此點に於ては、木村君は古今獨歩と思考されます。

然し、木村君が斷然たる戰勝率を保有して居るからとて、同君が一番强いとは申されません。ナゼかと申しますれば、木村君は下から上つて來た人です。同君は八段中の最年少者で八段中の最後輩であります。近年勝ち越して八段になつた人ですから、どうしても勝敗率がよろしうございます。負越しの甚しい大崎君だつて、金君だつて、木見君だつて、いづれも若い時代の成績は斷然たる勝ち越しになつて居ります。だから、單なる勝敗率で其優劣を決定する譯に參りません。決定する參考材料にはなりますが、それを以て絶體の材料とする譯に參りません。八段中誰が一番强いかを知るには、其範圍をグット狹めて、專門棋士總體に對する成績でなく、八段同志と云ふような近い成績を見る必要があります。

それに依ると、八段中では土居君が一番好い成績を納めて居ります。

土居君は、同じ八段に對して誰にでも優勢の地位を保つて居ります。大崎君に對しては半香を四番勝ち越し手直りに致しました。又木見君にも、花田君にも半香で負けては居りません。幾分勝ち越し位になつて居る筈です。唯、金君と木村君とに半香を手直りにされました。然し平手を指してからは矢張り土居君が勝ち越して居ります。木村君も、同じ八段に對しても勝ち越しの成績にはなつて居りますが、土居君ほど優勢ではありません。

土居君を以て現八段中の最强者としなければなりません。それに土居君は、此成績以外に別に强味を持つて居ります。

土居君は、常に相手次第の將棋を指す人です。相手が强ければ力を出すが、相手が弱ければ力を抜く。だから、勝敗率は力量相當のものにはなつて居りません。今から四五年前のことでした。土居君

京城雜筆

はよく角落に勝つが、香落に負けたものです。

そこで、土居君は角落は強いが香落は弱いと云ふ評判になつた。角落は名人である。伊藤宗印以來の名人である。現名人の關根金次郎氏も大駒落が旨まかつた。氏の角落、飛車落は一時天下を風靡した。大阪の坂田三吉君などは關根さんに角落が仲々勝てなかつた。明治四十一年に關根さんと第一回の爭ひ將棋を指した時などは、香落は二番共坂田君が勝ちながら、角落は關根さんにヤンワリあしらはれてまかされた。それほどに關根さんの大駒落は一時評判のものでありました。處が、土居君が八段に昇進して、四五段畑の連中と大駒落を指すようになると、師匠の關根さんよりもうまい。攻めたり、守つたり、輕くあしらつて、次第に自己の地位を優勢にして、敵を倒す呼吸は、何とも云はれぬほどの旨さで、實に天下一品と云はれました。

處が、其土居君が香落を指すとどうも角落のように行かない。弱敵にコロ〳〵まかされるのです。宮松七段などは此適例に漏る一人で、五六段當時、よく土居君に角落を負けながら、香落を勝つたものです。そこで、土居君は角落は強いが香落は弱いと云ふ評判が立つたのです。

處が、是れは、壺中の眞相を穿つたものではありませんでした。土居君は香落だつて強いのです。負けるのは相手を見縊つて掛るからで、ウンと腰を据えて指せば香落だつて強いのであります。現に香落で、大崎花田と云ふ、同じ八段畑の强敵をまかして居ります。斯う云ふ次第ですから、土居君の力量は、成績だけでは測られません。それへ、相手次第で力を拔くと云ふ事をも加算しなければならんのであります。

土居君が茲一番と踏張れば實に強いものです。現に最近讀賣新聞の七八段戰に、八段を全部まかしました。八段を五人、七段を一人まかして六人拔きをいたしました七人目に自分の弟子の金子七段と取組み、負けました。本人曰く、負けてやる氣でもなかつたが、負けたと。此邊が土居君らしい處であります。

讀賣新聞の七八段戰には賞を懸けてありました。五人を拔けばどう、六人を拔けばどう、と云ふような方法でありました。

開戰前の下馬評では、三人は拔けようが五人はどうか、殊に八段全部をヅラリ負すような事は殆どあるまいと見られて居りました。處が土居君は出場するや否や、八段全部をまかして六人勝ちをしたのであります。然も、其戰鬪振りは實に鮮かなもので、苦戰に陷つた將棋は一番もなく、皆樂々とまかして居ります。持時間を一ぱいに使つたのは、最初戰つた木村君との一番だけで、他は持時間の半分も使つて居りませぬ。形容して云へば、木村君以外の他の五人は先づ鼻唄氣分でまかしたのであります（續く）

◈街頭風塵記

漢江漁郎

○貞洞普通學校の校長柴崎直太氏は、教育實際家としては、なか〳〵エライといふ評判です。

○尾籠な話だが、學校の小便所には、よく生徒が紙切れや、竹片などを捨てる。それが流し口に引ツ懸つて、ソコラ中汚ないものが一杯になる――斯ういふ場面は、皆樣もたび〳〵見かけられたことと思ふ。

○ところで、柴崎校長です。氏は、さうした場合に遭遇すると、ちよッとの躊躇もしない。いきなり上衣をハネて、シャツを脱いでその汚ないところへ、身を横たへて、右の腕を肩まで、グイと流し口に差し込んで、その竹片や、紙切れをとり除いてしまふ。しかもその前にも、そのあとでも、子供に小言らしいことや、教訓めいたことは一言もいはぬ。さつさと自室へ引揚げる。

○生徒らは、始め少々校長の汚ならしい仕事を、輕侮的に見てゐるが、そのいよ〳〵腕を、肩口まで流し口にさし込むのを見ると、流石にハッと胸を打たれ、以後は二度と便所の溢れるやうなことはないさうだ。

× ×

○亡くなつた天日さんは、一昨年頃から折々、『ワシもどうやら昔年の目的だけは果したやうだ』と語つてゐた。

○百萬圓の資産が出來上つたといふ意味である。

○天日さんのそれに比べると、朝鮮窒素の野口氏は、とても慾深かぢやさうな。

○この人は、『ワシも、慾はいはぬ。しかし一ケ年純益五百萬圓……キレイにワシのふところに這入るやうになると、ワシも少しは樂になる……』

○マダ大團圓でなくて、コレが慾の中やすみぢやさうな。

尊德翁から

（承前）

たために平素よりも尙優に生計を送ることが出來たので尊德翁の名聲は愈々あがつた。

尊德翁から

（承前）

井上清

（朝鮮煙草元賣捌會社）

櫻町の復興事業が如何に難事業であつたかは尊德翁をして成田山に參籠せしむるに至つたことによつても想像のつくことであるが、彼が不動明王に三七日の願を掛けた事から正義は人間の至誠であるが正義だけでは民を懷ける事は出來難い、正義に仁愛を交へなければならないと云ふことを悟つた。今迄は正義の心を以てすれば如何なる難事業でも解決することが出來るものと信じて居たから凡てがあまりに正しきに過ぎて却つて人から誤解をうけた感があつた。成田山から歸つて後の彼は前とはかわつて重い詞の中にも柔か味を示し嚴格な貌を見せながらも一方に愛らしい笑顏をも見せるようになつたから彼の至誠は愈々光が出て來た。以前彼にたてついた人々も今は彼に歸服するに至り彼の最難題とした代官鵜氣權太夫も彼の至誠の前には遂に落城してしまつた。それからと云ふものは仕事は順調に進んで櫻町四千石の衰運全く舊に復し天保三年四度彼が故郷を去つて此の地に來てから滿十年を經て復興の大事業は成功した。即ち、仁愛撫育の心は遂にこの大事業を完成せしめたのであつてその仁愛の花の香は幾多のエピソードを生んでゐるのであるが此には之を省略する。たゞ彼の慧眼驚くべきは茄子の味に由つて凶歲を前知し櫻町三ケ村のものをして凶作に備へしめた事である。彼は六月の初旱や茄子に季秋の味があるのを知つて之は正しく陽氣の薄いためで陽氣發せずば陰氣が躍動するから米はとれぬ。今年は凶作にちがいないと村一同のものにその理を說き戶毎に畑一段歩の年貢を免ずるにより畑へ稗を蒔き作るべしと命じた。村人は彼が云ふまゝにそれを實行した。果せる哉六月中旬から秋分にかけて雨を見ぬ日とてはなく關東から奧州にかけて米の收入が平年の十分の一にも足らない。初冬には早や飢餓を訴ふるものが續出して冬に入つてからは菜色野に滿つると云ふ有樣になつたが、櫻町だけは尊德翁の豫見によつて餓から逃れることが出來た。而して彼は更にこの機を外さず將來の凶作に備ふるの必要を力說したことは彼の賢明に對して一層の敬意を表せない譯には行かない。近々必ず大凶歲があるに相違ない。若しその日暮しで明日の用意を怠らば不時の災難に遭ふべし、天災や地變はどうすることも出來ないが凶歲飢饉は人間の備へ一つでどうにもなることであるから油斷なく今から戶毎に稗を作り之に備ふべしと村人にすゝめた。村人も何等の異存あるべき直ちに實行したが尊德翁の豫言は又も適中して天保七年の大飢饉は到る處慘狀を逞しうすることになつた。それでも櫻町領と靑木村領とは稗を作つて居たために平素よりも尙優に生計を送ることが出來たので尊德翁の名聲は愈々あがつた。

○

茄子の味によつて凶歲を豫知し豫め之に備へしめた尊德翁の偉大さは全く底が知れない。而して此の話を現代に結付けて見ると今日政治家を以て任ずるもの或は財界の巨頭と自負する人果して尊德翁に見ゆるだけの勇氣があるであらうか。口の人は多くあつても正義のために果斷實行する人に乏しいのが現代の悲哀である。今や我が財界は未曾有の不景氣に直面して政府も民間も上下をあげて醜い狼狽混亂を續けて居る。軍縮の條約は結ばれても財政難や民の苦惱は容易に救はれそうにもない。財界人は口を揃へて金解禁をのろい、政府の緊縮政策を罵つて居る。井上藏相が一書を飛ばして此の不景氣は世界的のものであるからなんとも致方がないと論ずれば、政友の山本氏は經濟國策の提唱なる書を公にして緊縮政策一本槍ではこの不景氣を打開することは出來ぬとかなり切り聲をしぼりたてゝ居るそうかと思ふと金輸出再禁止や平價切下論まで飛び出す。失業者が續出すると見れば政府部內から非募債主義の放棄論まで出て來る。而して之等のことを口々にする政治家や財界人が歐洲戰後未だ好況の時代を脫しない時に於て金解禁を斷行するの用意を怠つたその不明さを知らぬ顏で居るかのやうにも見へる。金解禁から僅か十ケ月に過ぎない今日、早や金解禁に依つて來るべき不景氣に如何にも堪へられないやうな意氣地なさの體たらくは正に之に對する對策の何ものをも持ち合さなかつた不明さ、落だつて强いのであります。現に香落で、大崎北田と云ふ、同じ八段畑の强敵をまかして居ります。斯う云ふ次第ですから、土居君の切れをとり除いてしまふ。しかもその前にも、そのあとでも、子供に小言らしいことや、敎訓めいたことは一言もいはぬ。さつさと自入るやうになると、ワシも少しは樂になる……』

○マダ大團圓でなくて、コレが慾の中やすみぢやさうな。

京城雜筆

を露露せるものであつて尊德翁をして云はしむるならば『お前たちは之まで私の利私の欲に捉はれて人たるの道を踏んでゐなかつたのだ、自分の田へ水を引くために人の田の涸れるのを知らぬ顔してゐたからこうした不景氣に苦しむのだ、斯の如きは獸の道である。宜しく斯る獸の道を棄てゝ人道の至善を行ふことに心掛けねばならぬ人道の至善は私欲を去るにあるのだ。政府と云はず民間と云はず凡てが此の私欲を棄てゝ世のため人のため國のためにのみ勤めよ。さすれば不景氣の如き忽ち一掃されて健實なる空が現はれて來る』とほゝ笑み乍ら戒むるに相違ない。

○

尊德翁傳中に二人の女性が現はれて居る。一は翁の前妻おきの、他は後妻歌子である。おきのは姿も心もすぐれてうるはしい女であつた。その叔母にあたるお澤が見ず知らずの金次郎からの情によつて命をとりとめた。そのことがかゝ弱い胸のうちに通つて金次郎を世に優れて情深い賴母しい人だと思ひ染め貧しい金次郎ではあるが此の人と二世の契を結ぶべく決心した。而して婚禮の盃をあげる時貧乏を不幸と思ふな、どんな困難に遭ふとも自分の力で之にうち勝ち然も義のためには一命を捨てるだけの魂を宿して居らなければならないと金次郎から諭された詞をよく心に銘して農事に勵み家事を扶けて夫婦共々勵いたから金次郎の家は少しづゝ富んで行つて平和な家庭が續いたのであるが、金次郎が服部家の家政整理を引受くる事となるや夫婦は五年の間別れ〳〵にならねばならぬ事になつた。女の若い身で五年と云ふ長い月日を獨りで暮すと云ふことは耐へられない事である。又女の手一つで一家の經濟を維持して行くこともなか〳〵容易な業ではないから故障を申立てやうと思つたが此の度のことは金次郎にとつて見れば戰場の初陣とも云ふべきで功名手柄の仕樣によつては莫大の知行を下さる事にもなるであろう、又それがならずとも金子何百兩歸りには錦を着られるであらう、五年の月日は長いが後の樂みに比ぶれば何んでもない、多くの下男下女に奥樣と呼ばるゝ果報の早く來るのを待つ方が得策であると思い返し少しも早く御出府少しも早く始末をつけて御歸りなされて下さりませと凛々しく答へた。而して五年の月日を指折り數へて金次郎が何百兩かの御禮を持つて立派な身裝となつて歸つて來るのを樂みに待つて居たまでは誠にけな氣なことであつたが、さて五年の月日が流れて金次郎が歸つて來たのをいそ〳〵迎へたそれは五年の間身を粉にして御家老の御家再興を圖り首尾能く望を遂げて歸つて來た金次郎であるからその懷中には燦として目を驚かすやうな土產物があるにちがいないと想像したからであつた處が金次郎は荷物一つ持つて居なかつた。おまけに千百兩ほとの借財を整理して殘つた三百兩の中二百兩は主人夫婦の手許金として差上げたのはまだしも御家老が金次郎の骨折を思召され下さらうとした百兩の金を悉く家人や家來に遣つて了つたと聞いては五年の間待ちに待つた的も外れて今は口惜しさと無念さが込みあげて來る。五年の間留守居をして居た私の辛勞も察せずほんとうに私の身はどうなるのであらう、きつと澤山のお土產があるとそれを樂んでお待ち、して居たのにと今は顔を見るさへ腹立たしく而して『私は金が欲しさにお屋敷の仕事を引受けたのではない、服部家の廢滅は御領主の恥辱となるから之を餘所に見ることは出來ぬので百姓の身を以て御武家の御家政に手を入れたので、百兩の金などは五年の間乃公が病氣したと思へばすむことである。百姓の手で武士の家の借金を修め後々の仕方までつけたことは乃公ばかりの名譽ではなく百姓一体の譽れだ。この譽れは百や二百の金で買へるものではない。金は稼げばその人について來る。けれども正しい譽れは誰の身にも得られるとは極つて居らぬ。貧乏は不幸ではない、これから夫婦心を合せて家業に勵めばその惠は必ず來る』と說き諭す金次郎の詞も今は耳に入らないで遂に離縁を申出で足柄村の實家へと去つてしまつた。僅か百兩のために五年の辛抱が酬ゆる永遠の幸福を失つてしまつたのである。（續く）

◈聞くがまゝ

三木一彦

○金解禁の當時、仁川高女では岸鮮銀支店長を招いて、一場の講演をやつてもらつた。

○ヤヤコしい經濟問題だが、說くと平易明快、巧みに生徒の頭に入れ、頗る好評を博した。

○四年生在學中の岸氏令孃ホッとして、『うちの父う樣も、あんなところへ出ると、なか〳〵の男前だワネー。オホッ……』

近代人の匂を嗅ぐ

拔帳をつくつてゐるものもある。これは近代人の生活が急しくなつて來た結果さうしたものが要求さ

近代人の匂を嗅ぐ

後藤長治
（京城府學務課）

○

ペンをとつて原稿紙に向ふといふことは自分の思想發表の一形式にすぎない。思ひついたことを文字といふ發表形式の助けによつて表現するに外ならない。從つて根本的に書かるべき思想內容が孕まれてゐなければならぬ譯だ。胸三寸の中に疊まれた思想さへあれば發表したところで沈默したところで本質的には何等の變りはない。『筆とれば物書かん』といふが要は筆をとると取らぬの違ひだと思ふ。

人が臆くうがつて沈默を守つてゐるのをいゝ氣になつて自分だけが一人こんな考へをもつてゐるかの如く驕慢な態度でその意見を發表するが如きは勿論識者の嘲笑を免れないにしても書くことをもつて自己宣傳の如く自己吹聽の如くいやに冷笑の目をもつて見られる程たゝきのめされた樣な淋しさはない。

兎に角私達はペンを執つたといふ事、或はペンを執るといふ事をそう厚かましい態度と考へたくない、また考へられたくもない。

只腹ふくるゝ心地に堪えかねて文字といふ形式を借りて自分たちの心の中に鬱積してゐる或る眞惟の一部分を排泄した一寸放屁に似た樣な極めて輕い純な心であり態度でありたいと思ふ。勿論あらゆる文章はさうだとはいへないにしても隨筆等をものする態度は明かにさうあるべきだと思ふ。

○

『文は人なり』といふ。文の根底にはその個性を貫く人格的反映としての思想が横つてゐるといふことはいふまでもないのだ。で文章を書くといふ事が無闇に厚かましいといふなら既にかゝる思想を抱いてゐることが厚かましいといへやう。發表したその事は何等大した罪はないと思ふ。にもかゝはらず我々現代人はやゝもすれば根底たる內容を忘れて表面に現はれた形式のみを重大視する傾きがある。世俗に『出た釘は打たれる』極めて卑怯なる現代人の心理ではある。沈默の中に如何に怖しい思想が育まれ訓誡の中に云ひ知れぬ透徹さがある事を考へて見るがよい。發表したつてしなくつたつてその人の思想に變りはなくそんな事でまた人間の價値は何とも動くものではない。

○

そこでだ――チョット直ぐから理屈ッぽくなつていけないが、近頃は文章でも漫談や隨筆やゴシップやそれからナンセンスといつたものがすばらしく流行する。それがなくつては雜誌にならないといふ狀態である。私の知つてる男に海外情報も社會欄も勿論經濟記事も殆んど目を通さないがそれ等を見るために數種の新聞をとつて切抜帳をつくつてゐるものもある。これは近代人の生活が急しくなつて來た結果さうしたものが要求されるだらうけれども一面またよく話したり聞いたりする近代人の趣好によるのではあるまいか。

今日私達の生活はおちついた氣持で長篇等を耽讀する餘裕もなければまた一部のその道の人以外には長いものを物すやうな時間と精力とを有しないのだ。知らず雜筆の盛なる此處にあるや否や。その時代の人間の嗜好や生活はこれ等の傾向からも窺ひ知られて面白いものだと思ふ。

○

私は隨筆ものを見る場合よく感ずるが昔のそれと今のそれとは隨分傾向が變つて來てゐるやうだ。むづかしい言葉をかつて來ていへば個人主義的傾向が次第に姿を失つて集團的傾向が隨筆にも表はれて來たといひ得る。昔の隨筆といへば個人中心であつて自分の趣味で自分を語るといふ事に急であつたが近頃は一人よがりをいつてゐても誰も相手にしない。即ち隨筆のもつ內容が變つて來た。『徒然草』等を見てもわかるやうに昔の隨筆といふよりも今までの隨筆は靜かな隱遯的な隨筆だつた。これからの隨筆は動く隨筆でありテキパキと切れるやうなものでなくてはならないやうに思はれる。

ナンセンス、實は大いにはねて動いてそこに何かの意味で社會性が反映してゐなくつてはやつぱりピンと來なくなつた。

近代人はこの意味に於いて極めて感覺的に敏感ではあるがまた極めて鈍感でもある。

（五、一〇、二〇）

狐に誑かされた男の話

古賀國太郎
（東大門警察署）

それはしと〳〵と五月雨降る初夏の或る朝のことでありました。私はM市の郊外約半里の所に在るM中學校に登校すべく途中可なり大きな溜池の堤の下道に差し掛りますと、堤の下から救を求むるやうな聲がするのでふと見上ぐると一人の若者が折柄堤の上に引き揚げてあつた吾等の學校のボートの舳に抱き着いて苦悶して居るのを發見したのです。

何か急病にでも苦んで居るのであらうと想像しながら駈け上つて見ると、これは又如何したことでせう、其の若者の〇〇がボートの舳……旗を樹てる爲めにしつらへてある穴……にはまつて脱かんとすれど脱けぬ爲め困憊其の極に達して居ると云ふ始末です。私は早迷餡を取り寄せ辛ふじて救助しましたのですが、此の顚末に就て若者の語る處はこうです。

昨夜M市の某所で遊興し、したたか酩酊の擧句しと〳〵と降る雨中をM中學校所在地の村落なる自宅に向けて千鳥足を運ぶ途中茲の堤の下道に差し掛りますと圖らず一人の妙齡の婦人と道伴になり冗談話を交へながら歩を運ぶ裡、遂ひ情意投合巫山の夢を見た樣な氣がしましたが今朝正氣付いて見ると此の始末です。豫ね〳〵私の村では此堤附近に古狐が棲んで居て屢々人を誑かす由喧傳されて居るのですが、噂の通り私も此の憂き目を見た次第ですと半ばはにかみ半ば慄き懼れた面持でしみじみと語るのでありました。

右は約三十年前ほんとうに私の遭遇した實話です。勿論近頃では小供でも狐狸が人を誑かすとか河童が人を溺らすとか言ふ樣な事は眞實としませぬ。然し當時は小供は愚か大人でも半信半疑で居り一は小供に對する躾けの方便として親から盛んに聽かされたもので、遂に小供心にも半信半疑の念を抱き、延いて環境の如何に依り自己錯覺に陷ることも往々あつたのです。今日から考へると馬鹿々々しい樣でもありますが、當時文化の普及が如何に不徹底であつたか當時未だ原始的宗教たる動物崇拜トーテム崇拜的の觀念が潛在し我々の靈的生活を刺戟して居たかを此の一事實を想ひ起す毎に痛感するのであります。

分聞分見

匂の茶紅

氏名逸

〇先頃死んだ馬場是一郎君は、兒玉政務總監や吉野作造博士、荻田悦造氏などと高等學校時代からの同期生であつた。吉野君が世界戰爭中御手のものゝ政治史から國際關係を論じて大衆をアツト云はせて居る時代京城に來た時、馬場君は博物館の囑托をして居たので吉野君がヒドク氣の毒がつて居た。何とかならんかとの話だつた。

〇今度兒玉政務總監が來た時には清津の府尹をやめて以前よりもモット困まつてゐたらしい。で兒玉氏は同窓のよしみで月々若干（二〇〇圓？）を出してたそうだ。葬式にも出かけたとかの事だつた。

〇聞けばこの人々の二高時代に、トテモ大きなストライキが始まり、しかも馬場君は總指揮官格で大にやつたものだが、貴公子兒玉氏は溫良組で時々馬場氏から意氣地なしだと拳固を頂戴した。その御禮心の近年の情誼には、馬場氏も涙を流してゐた。

洋上閑話（承前）

舷外に約二尺突出し居る爲め碇泊中隣船の外板を突破る恐れありて之が爲に物議を釀すことがある

洋上閑話（承前）

松崎嘉雄
（遞信局海事課）

朝鮮半島に於ては東岸、南岸、西岸の三者海況自ら趣きを異にし從つて古より其の地方地方に依つて船の形も之に順應して自然多少相違あるのは免れない。然して大体に於て現在の朝鮮船の構造は幼稚極まるもので之を造船學上より見れば太古の遺物たるに過ぎない即ち木材と木釘とを以て組立て船体の强力と最も必要とする肋骨の如きものすら備へて居らぬ。故に其の構成力即ち横强力、縱强力共極めて貧弱であつて大海に於て一朝颶風に際會せんか忽ち解體の虞れがあり又其の實例に乏しくない一例を擧ぐれば從來朝鮮東岸の沖合に於て航海中大風に逢ひたる帆船中大和型帆船、西洋型帆船又は合子型帆船は眞日本に漂着した例はあるも朝鮮型帆船に限り其例がないと言はれて居る。それは何れも日本海の中央に於て風濤の爲解體せられた事を證して餘りあるのである。而して其用ゆる處の錨は木材を合せて錨形と爲し錨桿には扁平の長き石を用ゐ錨索は藁繩を以てし其の御粗末なること驚くの外ない。尙ほ船幅は廣く且つ船首尾共に開き即ち舳も艫も幅廣く船底は方形の龍骨を使用せず航（分厚の木板）と爲し外板の水密裝置が甚だ惡い。即ち木皮又は竹の細柔に碎きたるものを用ゆるが故に卷紙に比し塡隙の效に乏しい。古はいざ知らず現在に於ては造船材料の良材に乏しい爲め造船材として最も忌まるゝ落葉松の如き柔軟材を一般に使用する爲め强力の維持上夢ひ過大の木材を使用せざるを得ない。但し船幅を廣大にしてある結果船體過重に陷ることはない。此の船幅が廣大なることは又復原力即ち覆沒を防ぐ效力に役立つから此の點は本船の唯一の特長とせらる。然れども外板柔軟材なるが故に乾濕の度甚しく之に加ふるに前記の如き粗惡なる塡隙材を使用するので水密裝置は益々困難となる。即ち滲水（アカ）が多く之が爲に船内中央部に集水部を設け朴阿只（パカチ）を半割したるものに長柄を附して之を水掻（ベジ）と爲し、水夫交代にて四六時中排水に從事するを常とす。鴨綠江、大同江、錦江等に使用せらるゝものに比し東岸即ち咸鏡南北道沿岸の船型は大にして往々總噸數四十噸以上のものを見受くることがある。舵面は頗る長方形と爲し上げ下げ自由にして淺水に入るに從ひ舵を引揚げて之に應ずるに便である。甲板は船首の一部及船尾の一部にあるのみ中央は無甲板とし首尾の連絡は大形の木板を架して居る。即ち半梁を用ひて艙口を設くることを知らない。檣は一本のもの、二本のものあれどもスパンカーはない。ジブスルもない。檣は倒し得る裝置なるも兩舷に横架したる尺大の木材にて之を支ふる裝置にて該材は舷外に約二尺突出し居る爲め碇泊中隣船の外板を突破る恐れありて之が爲に物議を釀すことがある本船の特長は船首部舳の幅が廣いので碇泊中は凌波性甚だ宜しく恰も輕鷗の波のまた〳〵浮ぶが如く波浪に抵抗せない、即ち波乘りが善いので前記の如き御粗末な錨及錨索でも頗る安定である。嘗て朝鮮の一港に於て多數の内地帆船（西洋型又は合子型帆船）及び朝鮮型帆船が碇泊中大風の襲來を受け前者は被害多く後者は被害尠なかつた實例がある。勿論今回の樣な稀有の颱風ではなかつた。その理由は西洋型帆船は船首尖鋭であるから碇泊中怒濤を船首に受くる毎に、船首左右に振廻り易く爲に錨爪の把握力を失ひ、遂に走錨して陸岸に打上げられたのである。然し朝鮮型帆船は一度全帆を展じて港外に出でんか、船首幅廣きが爲め風壓に抗し難く、即ち風下に壓流せられ易く夫の西洋型帆船の如く風位に近づき航走すること、即ち縫航することが困難である。從つて順風の場合を除いては風下に横樣に流さるる度合が多いので航海時間を損すること甚しい。一言にして之を評すれば朝鮮船は航海に不利にして碇泊に有利である。朝鮮が古來海運業の振はなかつた原因の一は必ず此の造船術の欠陷にあつたのではあるまいか。

（以下次號）

家庭教師希望
お子方樣の勉强のお相手一通ひでも住込みでも結構です（社宛）

秋日の椽

角田不案

あからひくまひるの椽に秋祭くる日數
へて妻と話すも
もの思ふ心いつしかししむらのつかれ
となりていく日かへぬる
照り足らふ秋日の椽にながと身を投
げしまゝほせりたりけり
志得ざる心のわりなくも秋日の椽に追
へり蠅など
椽にほす布團にも似てしゝぶとはまし
てふくらむか秋の日をあび

◇

はりつめし心うれしみときめきて一つ
ぎの酒やふくみたりけむ
一つぎの酒をふくめばしゝむらのつか
れの凝も消へてあとなき
この醉へる心めでたき天が下に酒はこ
よなきものにこそあれ
眼かさ心に感じ見ゆるもの光り帶び來
ぬ醉ひにけらしも
さかしらに振舞ふ輩泣くやから叫ぶや
からも來り酒のめ

◇

豊秋の稔りの秋を銃とりて兵隊はねる
人殺すわざ
國をまもるつとめ尊し人を殺す業はあ
さましけぢめのありや
人と人互に殺す悪業をねるや兵士等秋
草をふみ
米の多くて騒ぐ國べに米を食へず死に
ゆく人のある世なりけり
國を擧げて米しあまるに米食へぬ民し
ありせば誰を責むべき（五、一〇、一
〇）

見聞分話

江湖百話

千駄山房

○この夏頃であつたか、兒玉政務總監は、北鮮地方を視察された。

○凡そ大官が地方下りをすれば、ソコに官民合同の歡迎會のあるのは、朝鮮の定跡だ。まして相手は政務總監だ。行くところ、とどまるところ、盛宴の附隨しない夜はない。

○そして宴が始まれば、必ず白頭山節といふものが唄はれ、不良老年（有志）が『白頭天池につもりし雪は……』とやると、田舍藝者がそれに合せて、『ヤー、ツンツルテン』と彈く。

○外な場席ならば、それもまことに結構……だが獨り兒玉總監の前では、『ヤー、ツンツルテン』などは、上を畏れぬヒガ事である。隨行の人々は、これを思ふてハラ〳〵してゐるが、ソコは田舍の剛健人士……いゝ氣なもので唄ひまくる。

○ところで、元來この唄をつくつた作者といふのが、例の植田國境子……その國境子は丁度一行に交つてゐるので、バツの悪い事夥しく、何處の宴會に列しても、そろ〳〵それが始まらうとすると、脾腹を押えて、『タツ、タツ、タツ』、『ヤー、植田うぢ、どうなされた』、『ウーン、苦しうござる』……急病突發、這々の體で別室へ

× ×

○山口銀行の田口さん、お若いに似氣なく、朝は非常に早いのである。

○そして八時前には、もうお宅を出懸けられる。

○といつても、銀行の門はマダ開いて居らぬ。徒歩主義者の氏は、この時間を利用し、朝鮮神宮附近へ散策し、ウンと新鮮な空氣を仕入れて開門キッチリに銀行の玄關へ姿を現はされる。

○判で捺したやうだ。『あゝ見えても、うちの支店長は強い意志の人ですよ』

軟扇子

十月一日（續）

れなどと、虫の良いネダリ込みは毎度やつて來るが、今日のは同縣人の名簿を見て來たと言ふ丈で、どうして誤れとも言はぬ。こんな

軟扇子

十月一日（續）

高橋昇（三菱載寧鐵山）

何時頃か知らぬが、兎に角眞夜中の事である。戸外で人聲がしたので、目が覺めかけてウッ〳〵して居ると

『御免下さい』

と言ふから、寢床の中から

『ハーイ』

と返事をした。

『國勢調査ですがお變りはありませんか』

『アヽ變りは無い』

『さうですか御免なさい』

『御苦勞だね』

何か話しながら行つてしまつた。後で聞けば午前二時頃であつたさうだ。四五日前に豫備調査がすんで居るのだ。

朝になつた。空は一面に曇つて居る、九時頃から細い雨が降つて來た。H君が正午過ぎの汽車で、K鐵山に轉勤するので、降らねば良いがと思つて居たのに、とうとう十時過ぎから隨分降る。H君が最後の打合せをして居る間も、牛車で出した荷物が、途中で濡れねば良いがと心配して居る。幸に長降りはせず、皆が驛へ行く頃には止んで居た。丁度晝の休みなので皆驛に行き、僕は事務所の留守居をした。

今日から事務所移築の敷地均らしに着手した。朝鮮建一戸を取除かねばならぬのを午後からやらせた。建てる時には、あれでも數日はかかるだらうが、取壞しには三時間位ですんだ。すべて建設には時間を要するが、破壞は早い。東京の復興も七年で終つた事に、先づした位である。桃栗三年は早い方である。

六時近くになつて、內地人が一人訪ね來てた。其言ふ所によれば同縣人であり、今朝迄平壤に居たのを、海州の方に出て、京城に歸り度いとの事。平壤では鐵道病院の中村氏（是も同縣人）の所に厄介になつて居たけれど、どうもすまないと思ひ飛び出して、職業紹介所に行つたが、病氣があつてはと、はねられた。中村氏は出た後で懇篤な手紙を自分の居た室に置いて呉れられた、それを見ると出なければ良かつたと後悔した、シカシ一度出た所へ又行く氣にもなれず、いろ〳〵煩悶し、昨夜は瑞氣山に寢て、今朝驛から詫びの手紙を出して來た樣な譯で、國勢調査にも入れずにしまつた。此前の國勢調査には、平北の警察に居たから無論入つたのに、など言ふことが少し變な所もあり、兩眼は充血して居るし、顏色も全く良くない。中村氏の手紙や、巡査の正服をつけた寫眞を、荷物の中から出して見せたりした。

私は土工をやる何某といふものですが云々と述べ立て、職に有り付けずに困つて居るから、何かに使つて呉れならまだ良いが、酒臭い息を吹きかけて、何とかして呉れなどと、虫の良いネダリ込みは毎度やつて來るが、今日のは同縣人の名鑄を見て來たと言ふ丈で、どうして呉れとも言はぬ。こんな同縣人は全く持ちあつかう。

兎に角

『中村さんといふ人は知らぬが病氣のある身体で、ドコへ行つても仕事が出來る譯ぢや無し、さうして深切に言つて呉れる人の所を、飛び出すとは無謀だ、病氣をなほして然る後、これからどうして行くかを考へるべきだ。國勢調査にも入れないなど國民として恥ぢや無いか。改めるのは今からでも遲くは無い、海州に行つたつて仕方が無いことだ、これから平壤に引返して今一度詫びて行くが良い……これは僅かだが持つて行き給へ……』

と、例によつて金一封を出したら突然來て迷惑をかける事を言ひ譯（?）し、押戴いて退出した。洗ひざらしのカーキー色の洋服、卷脚胖に地下足袋といふ服裝ではあるが、みすぼらしい姿である。こういふ氣の毒な人が、社會に無くなる樣に心に祈つた。

× ×

國勢調査の記念スタンプ欲しさに、次ぎの樣に書ハガキに書き、自分に宛てゝ出した。

今日は記念すべき國勢調査の日である。僕の家で、何を記念の爲に殘して置かうかと考へた時に、どうも適當のものが無い。記念切手は二三日前に買つてあるが、只それ丈では保存も厄介である。ソコで白羽の矢が君に當つた。葉書君、君には誠にすまないが……實際遠くドコ迄も行く丈の能力を、君が持つて居

うちの支店長は強い意志の人ですよ』

京城雜筆

ることは、僕も良く解つて居るのだが……郵便局迄行き、記念スタンプを捺して貰ひ、歸つて來て呉れ給へ、僕はアノいろいろな肉筆の澤山はいつて居る美しいアルバムの中に入れて、長く君を保存してやらう。普通よりも大きい、特別な意匠をこらしてある、記念切手を君にはつてやるよ、ね君！、豫ねて職務に忠實な君の事だから、間違ひ無しに行つて來て呉れる事とは思ふが、何分一寸變つた行き方なのでね。シカシ其變つて居る所に、又興味もあると思ふ。同じ事ばかりやつて居ると、飽きが來るからね。ヘマ泰斗

× ×

前に書いた軟扇子十月一日が豫算ならば、以上は十月一日の現實である。豫算は矢張豫算に過ぎず電燈はまだ工事にも着手して居ない（五、一〇、五）

身邊寸話

河谷靜夫（大邱日報社）

松本さん、隨分御無沙汰します偶に上城はしますが、いつも多忙裡に引揚げますので心しながらお眼にかゝれません。

△

私も百パーセント――コンナ言葉を覺えました――の大邱人となりました、營々と社業に從ひ算盤を置いた机の上で筆を執つてゐます。

△

身邊にいろんな變化もありますが、自分ながら微笑まるゝナンセンスを一件お知らせします。

△

元來、私は可なりな讀書癖を有して勘平さんの死んだ年ぱい頃までは手あたり次第讀書したものですが漸次賦性の懶怠に累されて新刊書に遠ざかる樣になりました、圖書代として例月五十圓以上も要するといふ人を寧ろ羨むやうになりました、これではアカンと考へてこの一兩年は書林への拂ひも月々十二三圓から二十圓位はあるやうになりました。

△

然るにです、常に私の讀書趣味の乏しい事を叱つて且つ鼓舞激勵してゐた今早稲田に學んでゐるー勉強してるかどうかは保證しませんー長男が此夏休みに歸つたので、大に褒められる積りで、コンナ本も讀んだ、斯う言ふものも讀むと威張つてやつたものです。

△

處がなほ長男の滿足を購ふことが出來ず、いろ〳〵なものを自分で書林から取よせて私に突きつける、勿論自身夫れに均霑することにもなるのです。

△

本月の十一日この小姑のやうな長男が出發歸校しました、ヤレヤレと兩腕を高くあげて伸び〳〵しましたが、突如昨年京城の第一高等女學校を卒業して今家事を見習つてる長女が『人われを大工といふ、百パーセント愛國者』といふ片假名の多い書物を呈示して『兄さんのいひつけです、コレをお讀みなさい、そして毎日の工程を兄さんに報告するのです』とある。

△

つまり、長男が出發すれば又々私の讀書慾？が激減すると思つて內命を妹に致して出發したのです

△

私は今しやうことなしに、つまらぬ『人われを大工といふ』といふ夢物語を讀まされて、そして毎日其の頁の工程を英書で小姑に報告されてゐるのです。

◈花園町閑話

なにがし

○今度貯銀頭取の椅子に就かれた森悟一氏、お宅も中學洞から花園町へと移轉された。

○と同時に、電話番號も變つた本局『一一八四』といふのである

○變つて間もなく、お孃さんがそのお友達と電話でお話――先方が、今度の番號は、覺えにくいのネといふてゐるらしい。すると、こつちのお孃さん『アラ前のよりズッと覺えいゝワ。なぜつて、名前からして一一八四――いゝわよ――ぢやなくッて』

よこしまのおもひもなくて朝な夕な神にぬかつく人そ幸ある

○　都天子

するといふ人を寧ろ羨むやうになりました、これではアカンと考へてこの一兩年は書林への拂ひも月々十二三圓から二十圓位はあるや

等女學校を卒業して今家事を見習つてる長女が『人われを大工といふ、百パーセント愛國者』といふ片假名の多い書物を呈示して『兄

こつちのお嬢さん『アラ前のよりズッと覺えいゝワ。なぜつて、名前からして一一八四――いゝわよ――ぢやなくッて』

京城雜筆

やまと歌

國風會京城支部

高樓月

○　工藤　武城
高樓にさゝくみ居れは盃に月の浮ふもおもしろきかな

○　中島　貞信
秋風の小簾ふきあくる高殿にゐなからめつる月のさやけさ

○　清水　正德
高殿ゆふりさけ見れは隈なくて千里も同し望の夜の月

○　安東貞一郎
世の塵もさらに及はぬ高樓はさす月影も清くすみけり

○　田中半次郎
高殿に歌のむしろをひろけつゝてる月影をめてあかさまし

○　古田萬龜子
高殿にのほりてみれは望の夜の月はいよ〳〵高くすみけり

○　田中秀一郎
あて人の琴ひきおわす高樓にさすもさやけき秋の夜の月

○　安東都天子
たかとのにのほりて見れは照る月の影さやかにて晝をあざむく

○　松寺　竹雄
小夜更けて琴の音もるゝ高とのの小簾に影さす月のさやけさ

○　濱野鍾太郎
かねてより待ちし今宵を高とのに心ゆくまてめつる月かけ

○　足立丈次郎
高殿にのほりて見れは空と海とはてなく月のさえ渡りたる

○　西田　明松
高樓に世のうきことも忘れつゝふくるもしらて月を見るかな

○　淺井佐一郎
あし曳の山たち出つる月見んとたか高殿も小簾かゝくらん

○　今村　雲嶺
高殿の歌のむしろにつらなりてこゝろゆくまて月を見るかな

敬神

○　雲　嶺
いつきまつる高麗の社の廣前に絶えせぬものはやひら手の音

○　佐　一　郎
身を清め神の御前にぬかつきて國安かれと祈りこそすれ

○　明　松
恙なくわか身この世にふることも皆大神のめくみなるらん

○　丈　次　郎
ぬかつきて打つかしは手の音高くひびくも尊ふと神の大前

○　鍾　太　郎
朝夕に神の御前に跪き眞心こめておろかみにけり

○　竹　雄
よこしまのおもひもなくて朝な夕な神にぬかつく人そ幸ある

○　都　天　子
朝な夕な神の御前にかしこみて國やすかれと祈りこそすれ

○　秀　一　郎
わらやのみならへる里も神まつる社はかりはおこそかにして

○　萬　龜　子
何事もよき行ひの源は神をうやまふ心よりこそ

○　半　次　郎
豊秋のみつ穂ぬきとりうすなのかみの御前にまつそなへけり

○　貞　一　郎
ふして祈り起きてそ祭る千萬の神は我等の皇祖なりけり

○　正　德
額つけは涙とまらぬ神やしろやまとをのこの眞心はこれ

○　貞　信
たふときもはたいやしきも日の本は神をいははぬ家なかりけり

○　武　城
やひら手は宮居の奥にこたまして遠つみをやのみ聲とも聞く

鹿聲幽

○　武　城
夜こと〳〵なく鹿の音もかすかにて秋はふかくもなりにけるかな

○　貞　信
掉鹿のなく聲遠く聞ゆるはやまのあなたに妻や訪ふらん

○　同　人
かそけくも深山おろしのさそひ來て枕をぬらす掉鹿の聲

○　正　德
曉の老の寢覺にかそけくも鹿の音すなり谷の孤屋

○　貞　一　郎
山里の秋はことさらわひしくてしかの遠音を枕にそ聞く

○　牛次郎
妻戀ひてまたもや谷を下りけむ
すかになりぬ小男鹿の聲

○　萬龜子
さをしかの聲もかすかに聞えきぬ

あはれ淋びしき旅のやとりに

○　秀一郎
山さとの夜はの寢覺そわひしかる
ほのかに鹿の聲もきこえて

○　都天子
霧ふかくこめたる秋の野末より妻
とふ鹿の聲そ聞ゆる

○　竹雄
秋の夜は淋しきものを遠山にこゑ
かすかにも掃鹿のなく

○　鍾太郎
さなきたに淋しき秋の奥山に妻訪
ふ鹿の聲幽なり

○　丈次郎
行く汽車のしはしとまりし深山路
にこゑかすかにも鹿のなくなる

○　明松
松風のおとも淋しく夜は更けて妻
訪ふ鹿の聲そかそけき

○　雲嶺
久方の月すみ渡る春日野にこゑも
幽に小男鹿のなく

京城雜筆

腰折紀行

浦田多喜人
（三巴酒造合名）

九月七日に鹿北線醴泉方面に旅行して稻の實れるを見て

鹿北に豐年の瑞稻の花
稻の丈け人の肩までに及び風無く日中暑くほんに米の洪水を思ふ時前年の旱魃を忘れて太平樂を
旱害を救濟せぬ間に世は惠れて
雀追ふのも嬉しがほ
この地方に行けば皆何となく太古の風を偲ばしむる悠長さ、人々の自動車で走るは平和を破る心地ぞする。
人は走らず犬吠えもせず
案山子笠着て弓引かず
旱害救濟で御心勞遊ばされた林知事さんもこの豐年で肩の凝が解け
いざと云ふ力もぬけて朝寢かな
豐年で失業者救濟を緩和し水害で又失業者に職を與ふるとなれば天譴も天惠となり
雨の御蔭で稻田は實る
雨の御蔭で道造る
或る警察で飲食店の値下を慫慂し料理屋にも値下せしめんとせしに料理屋は應ぜざりしと云ふ。飲食店は社會のために食を供給する機關なれば時代に應じて値下するは當然の事なるも料理屋はブル階級の遊び場所として實社界には無用のものなり。現今より尙一層高くして營業稅も增稅すれば國家の爲に大なる財源たるべし。警察のオセッカイは難有迷惑なりと。俗謠に曰く
酒は一樽千兩しよとまゝよ
主の寢酒はかがしやせぬ

◈丸ビルより

中島生

松本さん）
九月十五日にヒョッコリ現はれて一晩泊りで退去した廣江君が、半月ぶりの十月一日に又上京して目まぐるしく出沒してゐます。今度は大阪まで空中を來たさうですが、先生にとりては空旅は尋常茶飯事のやうに、飛行の飛の字も事珍らしくは申しません。恐ろしい急テンポな各所訪問ぶりで、小生も聊か呆れてゐます。此調子で先生の仕事が芽を吹いて來たら、どんな鼻息だらうと空恐ろしく想はれます、何處の誰れに仕込まれたやら、都々逸、端唄等々チョイと小いきな文句をいゝ氣になつて披露するので、二度びつくりです。恐らく大和町の政所は御存知あるメーと存じます（十月三日）

ひとり言

嚴肅は自然の正體である。されはいつかはこの地上の人間繁昌も、都市盛榮も、とこしへの一夢と打ち碎かるゝ時もあらう。今の人間の悲鳴をあげながら、この芝居の全盛はどうだ。スポーツの流行はどうだ。活動の繁昌はどうだ。戰後の世界で、最もうわついてゐる

京城雜筆

ひとり言

丘

永樂町人

ヨ、から見てゐると、神宮の丘の雜木林が、一日〳〵と、丹朱の色に染まつて行くのが、よく判るのである。

花崗岩の、眞ッ白い、直線的なテノ參道石階を中に挾んで、宮女の襲のやうに、また若大將の、緋威し鎧のやうに、斑爛とうち輝いてゐる紅葉黃葉は、流石に朝夕の趣を添へて餘りあるのである。

十月の初めには、その丹朱は、殆ど人の氣づかぬほどであつた。十日頃からホノボノと茜さし、以來朝な〳〵に濃度、厚度を加へて行く。たとへて見るならば、あどけない童女の、いつしかに、肉づき、艶容を增し、髮や肌が、しまいには、掩ひ切れずうち匂ふやうに、その行進形態は、可憐なものであつた。

が、また夕陽に映ゆるその紅黃を眺めてゐると、寸前の頽落を前にせる平家の榮華を見るやうな氣持もする。これは、凋落の前の變態的な發色である。桔梗患者の廋頰に、ほんのりと潮する病的鮮紅である。一抹の悲しみを、深く藏しないでは居らぬ。

ふと、人として、同じくヨ、に生きることの恐ろしさを、思はないではゐられない。自然は『はぐくみ』の一面をもつと共に、きびしき肅殺の他面をもつ。時來れば物皆を壓殺し盡さずんばやまぬ。嚴肅は自然の正體である。されば、いつかはこの地上の人間繁昌も、都市盛榮も、とこしへの一夢と打ち碎かるゝ時もあらう。今の人間の極盛は、即ち明日頽落の、その名殘りの晩餐でないと、誰か保證し得る……。

米

今年は、記錄すべき年である。米の國日本は、瑞穗の國でありながら、年々米が足らず。これを國外に求めてゐたが、不思議や今年は、出來過ぎて困るといふのである。

豐作ならば、萬民皷腹であらうと思ふと、それがまた安價で、百姓は、どうにもならぬといふ。

ならば、一體豐作がいゝのか、貧作がいゝのか。天道は、どうしたらいゝかと、昨今戸惑ひしてゐることと思ふ。

兎も角も日本は、むつかしい國柄である。外へ賣るものとしては絹と木棉の外はない。外から買ふものしては、無限にある。たとへば、鐵でも、石油でも、棉花でも羊毛でも、ゴムでも……貧乏な癖に、盛んに買はなければ、どうすることも出來ぬ。國として先天的に、一大弱點を持つてゐるといはねばならぬ。

尙ほ農林國的態容を持しながら事實は年々米麥木材まで、外國から仕入れつゝあるのである。百姓國が、外國から米を買ひ。山林國が、外國から木材を買うてゐる。日本の脚下の危ふさは、これで十分判ると思ふ。

さてまた、最もいけないのは、我々國民が働くことが嫌ひで、サボルことが大好きな點にあると思ふ。經濟國難〳〵と血を吐くやうな悲鳴をあげながら、この芝居の全盛はどうだ。スポーツの流行はどうだ。活動の繁昌はどうだ。戰後の世界で、最もうわついてゐるのは、米國及び日本だ。尤も向ふは、金持の若旦那である。

その上に、今一つ我國では、青年男子が學校を出ても、鍬やハンマーをとりて、自立することは考へず。專ら他人の廂の下に立ち、俸給を得ることのみ考へ。若き娘等の兩親は、働くことは敎へず。ピアノ、茶、花、踊り……斯くして日本は、何所へ行くであらう。

人麿

日本古代の歌人は、皆多量に戀愛歌を詠じた。

最もよき戀愛歌を詠じたものが最も秀拔な詩人と見られたのであらう。

柿本人麿の如き、遺作は必ずしも多くないが、今日に殘るもの〻中では、やはり戀愛歌が、大宗を占めてゐる。

いふもの必ずしも行ふものではあるまいが、しかし彼もまた、斯道の大勇士たるを免れぬやうである。

當時の婦人も、やはり紅裙?をチラ〳〵させてゐたらしく、二三それを讃仰した作がある。

くれなゐの裾曳く路を中におきてわれや通はん君や來ません

立ちて思ひ居てもぞ思ふくれなゐの赤裳裾ひき往にし姿を

一面には、また申々の愛妻家でもあつたらしく斯ういふ歌もある。

馬買へば妹徒歩ならむよしえやし石は踏むとも吾は二人行かむ

この時代の歌を讀むと、男も女も健康で、體格のよかつたことが、そゞろに思ひやられる。

【六一】

譯するので、二度びつくりです。恐らく大和町の政所は御存知あるメーと存じます（十月三日）

最も古き歴史と
最も良き品質

三十年来
おなじみの
最上醤油

最上醤油

香味
佳絶
ホシ大ソース
永登塚大
浦醸

お上品な
料理には
淡口醤油

淡口醤油

一度御試用
のほど願上ます

祝發展

東洋拓殖株式會社
朝鮮土地改良株式會社
朝鮮火災海上保險株式會社
朝鮮鐵道株式會社
朝鮮郵船株式會社
京城株式現物取引市場
京城電氣株式會社
不二興業株式會社
金剛山電氣鐵道株式會社
三井物產株式會社
朝鮮煙草元賣捌會社

再版出つ

今村鞆氏著

歴史民族 朝鮮漫談

（定價一部 參圓六拾錢也）

京城黃金町一ノ一一三

發行所 南山吟社

内科
婦人科

今本醫院

（京城旭町一丁目）

院長 今本義胤

主筆 大浦貫道

月刊 心の友

京城南米倉町
心の友發行所

社長 福田有造

木浦新報
光州日報

（紙面全く一新）

昭和五年十月廿五日印刷
昭和五年十一月一日發行

本誌定價
一ヶ月（一部） 四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇
發行兼編輯人 松本武正
印刷人 石川利夫
印刷所 京城日報社
京城府和泉町一七〇
發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

資本金 五百萬圓
諸預金 貳千參百五拾余萬圓
殖產積金契約高 參千百拾余萬圓
代理店 朝鮮殖產銀行鮮內支店及派出所

營業案內及住宅資金月賦貸パンフレット御申込次第贈呈致します。

京城府南大門通二丁目
株式會社 朝鮮貯蓄銀行
電話本局四五八〇番 振替京城四〇〇六番
取締役頭取 森 悟一
專務取締役 木村和水

營業種目
殖產積金 殖產貸付
普通貯金 積金擔保貸付
特約貯金 預金擔保貸付
據置貯金 證券擔保貸付
定期預金 不動產抵當貸付

內科
小兒科
木村醫院
院長 木村文三郎
京城吉野町一丁目

京城三越新館落成

◆十月二十四日開館◆

お買物は三越へ

京城雜筆（第百四十號）

大正十三年一月二十九日
昭和五年十一月一日發行

（第三種郵便物認可）
（毎月一回一日發行）